



SERNYA

チベット文学と映画制作の現在

SERNYA 別冊

チベットのむかしばなし

# しかばねの物語

特集



S E R N Y A

チベット文学と映画制作の現在

SERNYA 別冊

チベットのむかしばなし

# しかばねの物語

特集



## はじめに

しばらく『セルニヤ』をお休みしておりましたが、その間にチベット文学研究会のメンバーが関わった様々な本が出ました。二〇二二年には『路上の陽光』（書肆侃侃房）、『チベット幻想奇譚』（春陽堂書店）、ラシャムジャの短編小説が収録されたアンソロジー『絶縁』（小学館）、二〇二三年には『ダライ・ラマ六世恋愛詩集』（岩波書店）、『チベット女性詩集 現代チベットを代表する7人・27選』（段々社）、そしてこの九月には『チベットのむかしばなし しかばねの物語』（のら書店）が刊行されました。振り返ってみると、どの本もチベットの現代の創作活動と伝統的な口承文芸が地続きであることを思い起こさせてくれるものだと言えるのではないのでしょうか。

特に『しかばねの物語』の翻訳に取り組んだことで、昔話を語るという営みがチベットの人びとにとって重要なものであり続けてきたこと、そして現代を生きるチベットの作家や詩人、映画監督たちにとっても創作活動の源泉のような存在であることに思い至りました。そこ

なったりするところから全力で逃げ、仲間と協力しながら知恵と勇気で乗り越えて生き残ることについて語っています。暴力に対する抵抗の物語は、時代を超えて現代を生きる私たちにも響くものだと思います。

続くエッセイのコーナーの冒頭を飾るのは、短編アニメーション「いしのしし」の制作に携わった松尾みゆきさんとウジャ・パクパジャプさんのお二人による制作秘話です。昔話が大好きという二人が出会い、『しかばねの物語』の「石の獅子」をもとに立体アニメーションを完成させていく過程とそれにかける思いを語っていただいています。さらに、チベットの諺を集めておられる仏教学者の小野田俊蔵さんに、動物と諺というテーマで、チベット人の動物観に触れながらたくさんの諺をご紹介いただきました。また、チベット各地の方言を広く調査研究している言語学者の鈴木博之さんには、普段から格段の関心をもっておられるぶたとその語られ方に関する考察をお寄せいただきました。そして、アニメーション制作を学ぶために留学し、現在も日本で創作活動を続けているルチュ・パクパジャプさんには、ライフヒストリー

で、口承文芸の観点から現代の創作活動の諸相を見つめなおしてみたいと考え、今回の小冊子を企画しました。いつもの『セルニヤ』とは少し違い、のら書店との共同企画として制作した特別号となります。

まずは『しかばねの物語』から選んだ昔話六話をチベット文学研究会のメンバーの翻訳でお届けします。『しかばねの物語』は口承で語り継がれてきた昔話が詰め込まれた福袋のようなもので、その内容は地域によっても異なります。チベットで出版された本としては、西寧の青海民族出版社から刊行された *Mirotse srung*（西寧版）とラサの西藏人民出版社から刊行された *Ro srung*（ラサ版）の二冊が有名ですが、両者を読み比べてみると、しかばねが若者に面白いお話を語るといふ枠物語の設定こそ共通しているものの、中で語られる昔話はまったく別のお話です。本になっていないものも含めれば、さらに多くのバリエーションがあることでしょう。今回取り上げた六話のうち、五話は西寧版から、最後の一話はラサ版から翻訳したものです。どのお話も若者たちが魔物の生贄にされそうになったり毒親や暴君に殺されそうに

とアニメ制作の夢を綴っていたいただいています。

翻訳コーナーでは、今年五月に急逝したペマ・ツェテンさんによる生前最後の小説「松の木の香り」と気鋭の若手作家レーコルさんによる小説「詩人結社ロラン」の翻訳を掲載しました。ペマさんの小説は死んだ男との思出と遺体の扱いをめぐる話、レーコルさんの小説は卒業間近の大学生の男女が学生生活の中で失ったものについての思出を語り合う話です。また、近年詩の翻訳を積極的に進めている海老原志穂さんが本冊子のコンセプトに合わせて選んだ二編の詩を掲載しています。読者のみなさまには昔話とあわせてチベット人の現代の創作活動の諸相を味わっていただければ幸いです。

本冊子を通じ、多くの方にチベットの昔話の魅力とその背景となる豊かな文化に触れていただけるよう願っています。

星 泉





# もっとはなして しかばねさん



のら書店刊行の『チベットのむかしばなし しかばねの物語』  
には12話を収録しましたが、他にも面白いお話がたくさん  
あるのでご紹介します。長いお話はつっこみどころも多いの  
で、みなさんもうっかりしゃべらないようにお気をつけて！

本冊子は東京外国語大学フィールドサイエンスコモンズ  
(TUFiSCO)、アジア・アフリカ言語文化研究所 (AA 研) 基幹研  
究 DDDLing のサブプロジェクト「母語による創作活動の諸相」、  
および JSPS 科研費 JP 20H04480 の研究成果の一部です。



2022年4月にオープンしたウェブ版セルニャもご覧ください。  
<https://sernya.aa-ken.jp>

## 『しかばねの物語』用語

ツアンバ 大麦を煎って粉に挽いたものでチベット人の  
主食  
マルセン ツアンバにバターやチーズなどの乳製品を混  
ぜて練ったもの  
チャン 大麦からつくったお酒





## 大工のクング

星泉 訳

しかばねがふたたび飛びさってしまったので、デチュー・サンボは、またしても自分で苦勞を買うような真似をしてしまったと後悔しながら、墓場にむかつてずんずん歩いていきました。そして、しかばねのいる木のもとに行き、白月のおのをふりかざして切りたおそうとしたところ、しかばねは木からおりて、なんでも入る革袋の中に、すんと入りました。デチュー・サンボは、袋をまだらのひもでぎゅつとしばって背負い、口をしっかりとつぐんで歩きだしました。

しばらく歩いていったところで、しかばねが、またお話をはじめました。

\*  
\*

さて、むかしむかし、クンムンという国に、クンナン

に、たかが大工が、同じクングとよばれているとは不屈き千万。こんなことでは、おれの名折れだ」

そう思った絵師のクングは、大工のクングをなきものにしてやろうと、悪だくみを考えた。

ある日、絵師のクングは、にせの手紙を書いて、王の宮殿の屋上の、王さまの通るところに落としておいた。家来がその手紙を見つけ、王さまに手わたした。王さまが手紙を開いて読んでみると、そこには、こんなふうに書いてあった。

わが息子クンキョンへ

父さんは天界に転生して、今、何不自由なく元氣にくらしている。権力もほしいままだ。

じつは今、天界では仏堂を建立するところなのだが、あいにくこちらには大工がない。だから、大工のクングを寄越してはくれないか。天界への行き方は、絵師のクングの言うとおりにしてくれ。

父クンナンより

という王さまがいたそう。王さまが亡くなり、王子のクンキョンが、亡くなった父をとむらうために、お坊さんたちをまねいて、父が天界に生まれ変わるように祈りをささげた。王さまの生まれ変わり先を占ってもらったところ、きつと天界に生まれ変わるだろうという結果がでた。

クンナンが亡くなったあと、クンキョンが父の跡をついで、その国の王になった。クンキョンは、父王の時代にそばに仕えていた、絵師のクングという人物を、同じように自分のそばに仕えとした。

ところで、その国にはある人物がいた。農民たちのために木の農具を作って生計を立てている男で、農民たちはみなその男のことが大好きだった。腕もいので、大工のクングというあだ名でよばれていた。クングというのはみんなに愛されるという意味なのだ。

絵師のクングは、国に大工のクングとよばれる男がいると聞きつけて、すっかりふきげんになった。

「まったく、こっちは王さまのおそばにつかえる人間だ。クングと名のるにふさわしいのはこっちだぞ。なの

王さまのクンキョンは、手紙を読み終わると、

「父上は、ほんとうに天界に生まれ変わったんだなあ」と、ほつとした。そして、大工のクングを宮殿にびびだして、こう言った。

「おい大工、先般亡くなったわが父が、天界に転生して、今、仏堂を建立しようとしている。そこで、大工のおまえの手を借りたいという書状が届いたんだ」

王さまに手紙を見せられた大工のクングは、しばしおどろいたけれども、何かのまちがいはないかと思っただけで、

「王さま、天界へ行くといっても、いったいどうやって行けばよいのでしょうか」

「うむ。天界への行き方については、絵師のクングの言うとおりにせよと書状に書いてあるのだ」

王はこう言うと、今度は絵師のクングをよびだして、天界への行き方をたずねた。すると、絵師のクングは、こう言った。

「ああ、それはですね、焚きあげの煙でできた馬に乗って、天界に行くのでございます。まず、木で大きな小屋

をつくりまして、その内側と外側に、たっぷりとごま油をぬります。次に大工道具を用意して、小屋の中におくんです。そして、小屋の上を、松やビヤクシンの木の葉でおおいましたら、火をつけます。燃えだしたら、大きな焚きあげになって、もくもくと煙が立ちのぼります。それから、種々の楽器で音楽を演奏しますと、焚きあげの煙の馬が立ちあらわれますので、それに乗って天界に行けるのでございます」

大工のクンガは、この話を聞いた瞬間、

「おっと、これは絵師のクンガの策略だな。これはなんとかしなくては」

と思ったので、こう言った。

「王さまのおおせのままにいたしましょう。でも、天界に行くのでしたら、自分の大工道具を持っていきたくいですし、わたしは大工ですので、小屋は、わたくしめの住まいの裏手に、自分でつくりたいと思います。その場合、少なくとも、七日間は必要です。用意ができれば、王さまのご命令どおりにいたしましょう」

王もその話を聞いて納得した。

一か月のあいだ、自宅に引きこもっていた。

そして一か月がすぎたある日の朝、大工のクンガは、体をすっかりきれいに清めて、白い衣を身にまとい、王さまのもとをたずねた。

「王さま、おそれながらご報告申しあげます。お父さまは、天界でたいへんごりっぱなくらしをされておられます。仏堂も建立してまいりました。ところで王さま、お父さまからお手紙をいただいてまいりました。こちらです」

王さまが、手紙の封をあけて読むと、こんなことばがしたためてあった。

息子のクンキョンへ

元気でやっているようだな。国をりっぱに治めていると聞いて、うれしかったぞ。

大工のクンガをこちらに送りこんでくれたおかげで、仏堂はりっぱにできあがった。大工には、ほうびをたっぷりとつかわしてくれ。

ところで、仏堂の彩色をするために、絵師にもきてほ

大工のクンガは家にもどり、息子と妻も駆りだして、昼も夜もなく、自宅の床下を掘り、裏手の畑の真ん中へとつづくぬけ穴を掘りすすめた。そしてぬけ穴の入り口は見えないように、おおいかくしておいた。

王さまが、民衆に、木材とごま油をもつてくるようにとおふれをだすと、大量の木材とごま油が宮殿に届けられた。大工のクンガは、届いた木材を使って、掘ったぬけ穴の上に、大きな小屋を建てたのだった。

さて、約束の七日が経ったので、王のクンキョンと絵師のクンガらが、大工のクンガの家に来てきた。そして、大工のクンガを大工道具といっしょに小屋の中に入れて、火をつけ、音楽を演奏した。

絵師のクンガは、煙がもくもくと立ちのぼるのを指さして言った。

「ほらほら、ごらん！ 大工のクンガが煙の馬に乗って、天界にむかっていくぞ」

絵師のクンガは、こうしてみんなをだましたのだ。

一方、大工のクンガは、小屋に火がはなれるやいや、準備してあったぬけ穴をとおって、自宅にもどり、

しいのだが、絵師のクンガをこちらによこしてくれないか。こちらにやる方法は、今回と同じで問題ない。

父クンナンより

王は手紙を読むと、たいそうよろこんで、大工のクンガにほうびをたくさんやった。大工のクンガは家にもどって、ほうびの品をひろげてみると、白い絹の着物や宝石の数々だった。それで、大工の家は、すっかり裕福になった。

大工のクンガは、以前と変わらず、農民たちのためにさまざまな道具を作ったので、農民たちはみんな、クンガのことが、以前にもまして好きになった。

絵師のクンガは、その様子を見て、

「いったいどういうことだ。悪だくみが福に転じてしまったではないか。たちの悪い大工めが、焼け死んだと思ってたのに、のこのことできやがった。そのうえ、王さまからごほうびにお宝をたくさんもらっているじゃないか。もしかすると、煙の馬に乗って天界に行く方法が、ほんとうにあるんだらうか」



と、思った。絵師のクンガは、大工のクンガに嫉妬の炎をめらめらと燃やすばかりで、どうしようもなかった。ちょうどそのときだった。王さまが絵師のクンガをよびだして、

「天界に行って、仏堂に彩色をしてきてほしい」と命じたのだ。絵師のクンガは、

「ことわつたらまずいし、もし行けば、王さまがほうびの品をくださるかもしれない」と期待をして、

「承知しました。明日天界へ参ります」と約束をした。

次の日、王さまがおふれをだしたので、民衆が木材とごま油を大量に運んできた。大工のクンガは、それを使って小屋をつくり、中に絵師のクンガと彩色用の道具を一式入れ、火をはなつて音楽を演奏した。

すると、絵師のクンガは、たちどころに火あぶりになってしまった。大声で助けをもとめたけれども、音楽があまりにうるさくて、絵師のクンガの声は、だれの耳にもまったく届くことなかった。そして、ついには絵師のク

ンガは、真っ黒こげになって、焼け死んでしまったそう  
な。

\*\*\*

しかばねがここまで話すと、デチュー・サンボは、  
「いやあ、あつという間に因果がめぐってきたね」と、

口をすべらせてしまいました。しかばねは、するするつと袋をぬけだし、びゅーんと墓場に飛んでいきま  
した。

西寧版『しかばねの物語』より第五話

## 金とトルコ石の秘密

星泉 訳

デチュー・サンボは、しかばねの語る「こがね姫とし  
ろがね姫」にすっかり聞きいり、竜樹大師の教えを忘れ  
て口をすべらせてしまったので、しかばねはまたもや革  
袋から逃げ出して、墓場に飛んでいきました。

しかたがないので、デチュー・サンボは、もう一度、  
墓場にかつぐと、しかばねを革袋に入れ、ひもでしばり、  
背中にかつぐと、もと来た道のりを歩きだしました。

デチュー・サンボが急ぎ足で歩いていると、しかばね  
がふたたびお話をはじめました。

\*\*\*

むかしむかし、あるところに、大きな村があった。村  
の奥まったところには、大きな池があった。その池は、  
村の水源地だった。そこから畑に水が引かれ、人間も家畜

もみんなその水に頼っていた。かつてはその池のおかげ  
で村は繁栄して、みなしあわせにくらしていた。

ところが、あるときから、その池に、カメの化け物と、  
カエルの化け物がすみついた。

この二体の化け物は、水をせきとめては、村人たちを  
困らせていた。しかも、一度せきとめられた水をふたた  
び村に引くには、毎年二人の若者を、いけにえとして、  
化け物にささげなければならなかった。いけにえをささ  
げないと、化け物たちは、池の水をせきとめるだけでな  
く、村に、ひどい霜やひょうを降らせたり、日照りや、  
疫病をもたらしたりするので、農民たちは安心して暮ら  
すこともできないのだ。それで、村人たちは、しかたな  
く、毎年二人の若者を化け物にささげてきた。

でも、だれも自分の息子を化け物のえじきになどした  
くないので、そのときがくると、サイコロを転がすこと  
で、息子をささげる家を決めた。

何年もそうやってきたある年のこと、いつものように  
サイコロを転がしたところ、とある農家の息子と狩人の  
息子がえらばれた。二人は村のおきてにしたがって、化



け物のえじきになるために、池のほとりに向かった。村人たちは、やりきれない思いで、かれらを村はずれまで見送った。

しかし、この二人の若者はかしくて勇気があつたので、なんとか化け物のえじきにならずにすむ方法を考えようと心に決めた。

池のほとりについてたとき、まだ化け物の姿が見えなかったので、二人は木かげに隠れて、様子をうかがっていた。

しばらくすると、池の中から、世にも恐ろしい化け物が、一体、また一体とあらわれた。一方はカメの姿をしており、もう一方はカエルの姿をしていた。

二人が木かげからようすを見てみると、カメの化け物がカエルの化け物に話しかけた。

「なあ、カエルくん、あわてることはないさ。だれもきみの急所を知らないから、ほつともうまいもんを届けにくるぜ。ほんとうにばかな連中だよ。池のほとりのビヤクシンの枝で頭をぶつたいたら、カエルくんは死んでしまうつてのに。それに、カエルくんの死体を丸のみ

すれば、口からトルコ石がいくらでも出てくるようになるつてのにな」

今度はカエルの化け物が急に立ち上がり、カメの化け物に話しかけた。

「あつはは。カメくんたら、口が悪いなあ。黒ブタがカラスの羽色をのしるような真似はやめるよ。おれたち似た者同士なんだから。池のほとりの石を、きみの首めがけて投げつけたら、きみだつて死んでしまうだろ。それに、カメくんの死体を丸のみすれば、口から金きんがいくらでも出てくるようになるじゃないか」

化け物たちのやりとりを、木かげで聞いていた少年たちは、お互いに目くばせをした。

農家の息子は、ビヤクシンの枝を手にとり、狩人の息子は、池のほとりの石を拾うと、化け物めがけて突進し、枝と石を投げつけた。すると化け物はばたばたとたおれて、あれよあれよという間に、小さくしぼんでいった。

二人は、化け物の死体をつまみあげ、農家の息子がカエルの方を、狩人の息子がカメの方をのみこんだ。ために吐いてみると、狩人の息子の口からは金が、農家の

息子の口からはトルコ石が出てきたので、二人はとびあがつて喜んだ。

そのとき、農家の息子が言った。

「さてと、化け物を片づけたから、水をせきとめられなくてすむな。村に帰ろう」

すると、狩人の息子が言った。

「いや、ちよつと待て。今すぐ戻つたら、あの世にいった人間が、この世にのこのこ戻ってきたと言われるのがおちだ。それに、うちの村はひどく貧しいから、一度戻つちまったら、旅にでたくてもおいそれとは出かけられないだろ。それよりさ、こうして金とトルコ石をたんまり持つてるんだから、あわてて村に帰ることもないさ。二人であちこち旅をして、おもしろいものを見て回ろうぜ」

こうして、二人は村には戻らず旅にでて、山越え谷越え、ずんずんずん歩いていった。

旅の途中、二人は女将がきりもりしている居酒屋に寄った。そこで酒を飲んだ二人は、金を払うとき、口から金とトルコ石をけろつと吐いて、支払いをさらつと済

ませた。

それを見た居酒屋の女将は、たいそう驚き、二人を長く引き止めようと、愛想をふりまきながらお酒をふるまったので、二人はすっかりいい気分になって、その晩はそこに泊まることにした。

夜になり、女将はふたたび強いお酒をふるまった。二人はすすめられるまま、しこたま飲んだので、べろんべろんに酔っぱらってしまった。

酔っ払った二人がげえげえ吐くと、口からは金とトルコ石がぞくぞくと出てきたので、しめしめと思つた女将は、ひとつ残らずひろいあつめた。女将は二人が吐くたびに金とトルコ石をひろいあつめて、ほくほくしていた。

吐くものがほとんどなくなつたとき、最後のひと吐きで、金のカメと、トルコ石のカエルが出てきた。それから先は、いくら吐いても水しか出てこなくなつた。

一部始終を見ていた女将は思つた。

「なるほど、二人の口から金とトルコ石が吐き出される秘密は、この金のカメとトルコ石のカエルにあつたのね」  
そこで、女将はすぐさま娘を呼んで、娘にトルコ石の

カエルをのませ、自分は金のカメをのみこんだ。

夜が明け、起きたときには若者たちの酔いはすっかりさめていた。酒代と宿代を払おうと思っ、おえつと吐いてみたけれども、出てくるものは水ばかりだった。

「しまった。大変なことになってしまった」

二人は酒屋の女将に向かって、自分たちの大切な宝物がぬすまれたと言いたてた。

それを聞いた女将はひどく腹を立てて、二人をどやしつけた。

「まったく、恥を知らない人間は犬と同じ、しつぽのな  
い犬は化け物と同じっていうことわざの通りじゃない  
か。あんたたちは、酒を飲んでも金は払わないし、宿に  
泊まっても宿代は払わない。そのうえ、この女将にぬれ  
ぎぬを着せようってのかい」

こう言われてしまった二人は、どうしようもなく、す  
ごすごと引き下がった。

ふたたび旅に出た二人は、とある森のはずれにたどり  
ついた。



森の中に足を踏み入れてみると、黄色い花の咲いてい  
る木に、するするとのぼっていく人がいた。その人は、  
黄色い花をつみ、自分の体にこすりつけた。すると、驚  
いたことに、その人はサルに変身した。サルになったそ  
の人は、するするつと木に登り、こんどはたわわに実っ  
ているくだものをむしゃむしゃ食べた。

しばらくすると、サルは赤い花の咲いている木のどこ  
ろにわたっていき、花をつんで体にこすりつけた。する  
と、元通りの人間の姿になった。

その様子を見ていた二人は、  
「はーん、黄色い花と赤い花をこすりつけると、人間  
がサルになったり、サルが人間になったりするんだな」  
と秘密を見抜き、黄色い花と赤い花をつんで、ふところ  
におさめた。

こうして、二人は何年もの間、あちこちを旅してまわ  
り、不思議なものをたくさん見て、世の中の秘密をたく  
さん知ることができたので、いよいよ連れ立ってふるさ  
とに帰ることにした。

ふるさとに帰る途中、かつての居酒屋に立ち寄ってみ  
た。すると、あの女将があらわれて、娘を呼んで、二人  
をもてなすように言った。

この母娘にひどい目にあわされたことを思いだした二  
人は、仕返しをしてやろうと、黄色い花をふところから  
取りだし、娘の体にこすりつけてやった。すると娘はた  
ちどころにサルになり、居酒屋の中をキヤッキヤいな  
がら駆けずり回った。

そこへ女将がやってきたが、娘の姿がどこにも見当た  
らない。どうしたのかと思って見回すと、そこにいたの  
は一匹のサルと、見おぼえのある二人だった。

「むむむ、この二人、とんでもない魔術の持ち主なので  
は……」

そう思った女将が二人にすがりついて、助けを請う  
と、二人は言った。

「ふっふっふ。女将、油断したな。馬も走れば沼にはま  
るし、アリも歩けば脂にはまるっていうやつだ。あんた  
はかしこいつもりかもしれないが、上には上がいるの  
さ。思い知ったか。馬で行くなら平らな道を行け、語る

ならまつとうなことを言えっというのだ。人の道にそむ  
いたらろくなことはない。

なあ、女将、あんたは頭も切れるし、弁も立つ。おれ  
たちのカメとカエルで楽しく遊んだ感想でも、ひとつ聞  
かせておくれよ」

女将は、痛いところをつかれて、恥ずかしくなり、顔  
は血のように真っ赤になった。それで結局、自分の口か  
らは金のカメを吐きだし、娘の口からはトルコ石のカエ  
ルを吐きださせ、二人に返したのだった。

農家の息子は、ふところから赤い花を取り出して、サ  
ルのからだにこすりつけてやった。すると、魔法がとけ  
て、娘はもとどおりの姿になった。

こうして二人の若者は、お宝をもって、ふるさとに帰  
り、しあわせにくらしたとき。

\*\*\*

デチュー・サンボはここまで聞いたところで、思わず、  
「いやあ、二人ともたいしたもんだね」



と口走ってしまいました。

するとしかばねは、

「ほらほら、運のつきた子だね、口をすべらせおって」と言うのと、するするっと袋を抜けだして、墓場に飛んでいってしまいました。

## 農夫と暴君

大川謙作 訳

それからデチュー・サンボは休憩も取らずに再び墓場へと赴き、これまでと同じように願いを叶えるしかばねを袋の中に入れ、まだらのひもでしっかりと縛って肩に担ぎ、息を弾ませながら運び始めた。するとしかばねが「若者よ。そんなにシャカリキに頑張ることはないぞ。わしがひとつ気晴らしに楽しい話をしてやるから、聞かがいい」と言って、語り始めた。

\*\*\*

昔々、デユルというところに貧しい農夫がいた。農夫は一生懸命に畑を耕したり雇われ仕事をしたりしていたのだが、地主の取る小作料や国王の課す税の負担は本当に重く、窮乏して惨めな暮らしを送っていた。その年、デユル地方は大変な凶荒に襲われていたのだが、王の税

はそれまで以上に重くなり、地主も小作料を免除してはくれず、貧しい農夫は税も小作料も納めることができずにいた。すると王は、「貴様、税も小作料も納められないというのなら、この地に暮らすことはまかりならぬ。どくなり出ていってしまえ」と命じ、農夫の家を

差し押さえてその門を封じた。こうして貧しい農夫は住むところを奪われ、他郷を流浪する羽目に陥った。王に家を差し押さえられてしまったため、彼には革袋ひとつほどのツアンパすらなく、なんとも悲しく惨めな気持ちであったが、為すすべもなく一人、行き先も定まらぬままその地を後にせざるを得なかった。そうして彷徨うち、枯れた茅草の生い茂る荒野へと辿り着いた。彼は飢えと渇きに苦しみ、暑熱に打ちのめされていたため、体には力が入らず、頭もクラクラして視界もぼやけるほどであった。そうして彼が荒野の中をあてどなく進んでいくと、馬のしかばねが転がっているのに出くわした。しかばねからは肉がおちて骨だけになっていたが、それでも頭には肉がまだ多少は残っていた。そこで男は食料とするためにこの馬の頭を帯にくくりつけて進んで行っ

た。しばらく行くと荒野の只中に大きな多羅樹が生えていた。そこで男はこれに登り、樹上に身を落ち着けることにした。

太陽が沈むと空に黒雲が湧き出て激しい雨となり、雷鳴が響きわたってなんとも恐ろしげであった。その時、荒野の彼方からまだらの馬に乗って黒い帽子を被った男たちの一団がやって来て、樹の下に野営して飲み食いをはじめた。彼らは聞いたことのない言葉で語りあっていた。農夫は、こいつらはきつと悪鬼の類に違いないぞ、こんなところにやって来る人間なんているわけがないからな、と思っただけで恐ろしくなり、つい手が滑って馬の頭を落としてしまった。すると悪鬼たちは慌てふためいて散り散りに逃げ出し、何処かへいなくなってしまった。

次の日、樹からおりて見てみると、チャンで満たされた金の椀が落ちていた。喉が渴いていた農夫はこれを飲み干し、ついでに肉とツアンパも食べたいなと思ったところ、金の椀から肉とツアンパが望むままに現れた。農夫は満腹するまで食べることができたので、元気いっぱいになった。大喜びした農夫はこの椀を「望みを叶



える器」と名付け、懐にしまいこんで旅を続けた。もはや彼は飢えと渴きを恐れる必要はなくなつたが、今度は追い剥ぎに出くわしてこの「望みを叶える器」を奪われてしまうのではないかと心配になった。こうして不安な気持ちを抱えながら旅を続けているうちに、道中で、投石ひもを手にした男と行き合った。農夫は最初、この男は追い剥ぎではないかと恐れたが、話をしてみるとこの男もまた農夫と同じく王の重税を納めることができずに追放された者であることがわかり、すっかり意気投合した。貧しい農夫が「俺たち二人、昼は隠れて夜に移動した方がいいぞ。追い剥ぎにあつたら怖いからな」と言うと、投石ひもの男は「追い剥ぎなんて怖くないさ。敵と会つたら俺が投石ひもを投げる。そうすればこの投石ひもは自ずと相手の首に巻きついて絞め殺してくれるんだ。俺たちのところも凶作だつた上に王の税も重かつたから、食い物は簡単には手に入らないかも知れないぞ。俺たちはやっぱり昼に移動して何とかして食い物を探しながら行った方がいいんじゃないか」と言った。農夫は「飲み食いの心配はいらないよ。食いたいのものを何で

弟となつて旅路を共にすることを約束した。四人は苦楽を共にする義兄弟ができたので勇気が湧いてきて、あの暴虐な国王になんとかして復讐しようと話合つた。貧しい農夫の作戦に従つて、四人は暴君の宮殿の後ろに行き、夜中に鉄槌で大地を叩いてみると、一回ごとに鉄の城が一階ずつ積み上がつていき、九回叩き終えてみると九層の鉄の城が完成していた。

翌日、夜が明けて王の大臣が宮殿の門から外を見ると、王宮の後ろに昨日までは存在しなかつた九層の鉄の城が建つていた。驚いた大臣が鉄の城の城門まで行つてよくよく見てみると、そこにはなんとあの貧しい農夫がいた。急いで王に報告すると、王は怒り心頭、『下僕は満腹すると主人に逆らう』というのは本当だな。すぐに兵を差し向けて城を焼き討ちにしてしまえ』と命じた。そこで王の兵たちが大量の炭を城の周りに並べ、火をつけて巨大なふいごで風を送つたので大きな火柱が立ちのぼつた。すると農夫は城のてっぺんで山羊の皮を揺すつて雨を降らせ、火を消してしまつた。これを目にした王は怒り狂い、鉄のハンマーとやつとで城を壊してしま

も食わせてやるさ』と言って、「望みを叶える器」から肉やバターやチーズ、それにツアンパやチャンなどを取り出して投石ひもの男に与えた。男は大いに喜んで、二人は義兄弟の契りを結ぶことにした。そうして二人がさらに旅を続けていると、鉄槌を持った男と出会つた。

「お前はどこへ行くんだ？ その鉄槌は何なんだ？」と尋ねると、男は「食い物を探して彷徨っているんだ。この鉄槌で大地を九回叩くと九層の鉄の城が出現するんだぞ」と答えた。そこで農夫が「望みを叶える器」からたくさんの食べ物を取り出して男に与えると、男は大いに喜び、義兄弟の契りを交わして共に旅をすることになった。三人が旅を続けていると、今度は山羊の皮を手にした男と出くわした。「お前はどこに行くんだ？ その山羊の皮は何なんだ？」と尋ねると、男は「俺たちのところも凶作で、食い物を探して彷徨っているんだ。この山羊の皮を揺すると雨が降ってくる。激しく揺すれば大雨になるんだぞ」と答えた。そこで農夫が「望みを叶える器」からたくさんの食べ物を取り出して満腹になるまで男に与えると、男は大いに喜び、彼もまた三人と義兄

えと命じた。ハンマーとやつとを手にした兵が城を壊そうとしたとき、農夫は山羊の皮を激しく揺すつて豪雨を招いたので、兵はみんな水に流されてしまつた。これを目にした王は激怒し、何としてもこいつを殺してやろうと思い、大臣たちと共に甲冑を身にまとい弓矢を手にして城を取り囲み、農夫めがけて矢を放つた。そこで農夫が投石ひもを放つと、ひもは王の首に巻きついて徐々に首を絞め、暴君はくびり殺されてしまつたとき。

\*\*\*

しかばねの話がここに至ると、デチュー・サンボは思はず「貧しい農夫が復讐を果たすことができ本当によかつた！」と言葉を漏らしてしまつた。そのため願いを叶えるしかばねは再びビューンと墓場へと舞い戻つてしまつたのであつた。

## 陽光と月光

岩田啓介 訳

デチュー・サンボはうっかり口を滑らせてしまったことを後悔して、慌てて屍陀林の墓場に行き、しかばねを背負ってきた。道行くとき、今度こそしかばねが何を言ってもうっかり口走らないようにしようと誓った。しばらくすると、再びしかばねは物語を語りだした。

\*\*

むかしむかし、ある王国があり、その王に二人の妃がいた。年上の方の名を太陽妃ティキー、年下の方の名を月妃ティツンといった。二人の妃はそれぞれ息子を生んだ。太陽妃の子は陽光、月妃の子は月光と名付けられた。二人の妃はどんなときも互いに仇敵のごとく嫌悪していたけれども、二人の息子は水とミルクが混ざるように、同じ母から生まれた兄弟よりも仲が良かった。

いでしようか？ さすれば説明いたします」と言うのと、王は神と三宝を証人として誓いを立てた。

月妃ティツンは、王が誓いを立てたのを見届けると「陽光と私の二人は、生まれ年の八卦の相性が合わないのです。なので、私のこの病気は、陽光の心臓を取り出して食べれば治るに違いありません。それ以外に方法はあります」と言った。

王は我が子を殺すのをたいそう残念に思ったが、王妃に反対することはできないし、自分でも誓いを立ててしまったので、「馬が逃げても捕まえる方法はあるが、口から出た言葉を引っ込める術はない」という諺に倣い、陽光の心臓を取り出して王妃の病気を癒すと約束した。

王と妃の話をもれなく聞いていた月光が、兄の陽光のもとにすつとんで来てあららざらひ話したところ、陽光は恐れ慄いた。二人は相談した末、もはや王宮にはいられないので、自分たちの国を去って異国で暮らすことに決めた。その夜、兄弟二人は僧侶から乾いたトルマを小さい革袋一杯に受け取り、十五夜の月の出とともに宮殿から出て東の方に逃げ去った。

あるとき、太陽妃ティキーが大病に罹って亡くなったので、月妃ティツンはたいそう喜んだ。それ以来、月妃は毎日のように再三再四、陽光を亡き者にする方法を考え「もし陽光を亡き者にせず大人にさせたら、我が息子の月光は王位を得られないだろう」と思い、悪だくみをするようになった。ある日、彼女はひどい病気になった振りをして「あいたたた」とうめき声をあげて横たわっていた。王は聞くやいなや、以前にも王妃を亡くしていたので、不安で胸がつぶされそうになった。どんな治療や儀式をしても効果がないので、王が「どうすればよいのだ？」と尋ねると、王妃は「大王さま、私に効き目のある方法は何もありません。たった一つだけ効き目のある方法はあるのですが、王さまはそれをしないし、できないでしょう。それ以外にはいかなる方法も効き目がないので、私たちは死別するしかありません」と悲痛な声をあげた。すると王は「もしお前のこの病気を治す手立てがあるなら、私は王位を放棄する覚悟もある。話してくれ」と言った。王妃は「王さま、私はあなたを信頼しておりますが、必ず実行すると誓いを立てていただけな

二人は九日九晩、昼夜も絶え間なく進んで行ったところ、ある日、水のない谷に着いた。乾いたトルマは底を尽き、そこに水もないので、弟の月光は地面に倒れて進むことができなくなってしまった。兄の陽光は「お前はここにいるんだ。僕が水を探してくるよ」と言って、苦しみに耐え勇気を奮い起こし、尾根を越えて水を探しに行ったが、見つからなかった。兄が戻って来たところ、弟はひどい渴きで意識を失っていた。弟が死んだと思っただ兄は、悲痛にもだえて泣き、来世では一緒に生まれるよう祈願して、木の根元に石の囲いを築いてその中に弟の体を横たえさせて立ち去った。

その後、兄は峠を二つ越えて行ったところ、ある岩窟に赤い扉があるのが見えて、そこに行つて扉を叩いた。すると、髪は羊毛のように白く、口には歯が真珠ほどもなく、目はトルコ石のように青い老仙人が出てきた。仙人は「かわいそうなぼうや、どこから来たんだい？ こんな辺鄙なところにいったいどうして来たんだい？」と尋ねた。少年はこれまでのことをつぶさに説明し、弟が喉の渇きで死んだことを話すと、堪え切れずに泣き声を

上げてしまった。老仙人は何度も領き溜息をついて「ぼ  
うや、泣いてはいけないよ。まずは二人できみの弟のと  
ころに行つて、本当に死んでいるかを確かめてみよう。  
そんなに素直で心根の良い子は救いに行つてやらないと  
な」と言った。二人が食べ物と飲み物を持って弟のいた  
ところに着くと、体の周りに作った囲いが壊れていて、  
体もなくなっていた。というのも、雨が降って葉の雫が  
弟の口に流れたので、弟は意識を取り戻していたのだっ  
た。兄弟二人は互いに名前を叫び合つて探し、ついに再  
会することができた。兄は弟に食べ物や飲み物を腹いっ  
ぱいに振る舞つて、仙人とともに岩窟に戻つて来た。兄  
弟二人は、仙人の弟子になつてそこで暮らすことになつ  
た。

仙人は「お前たち、二人とも遠くに行つてはならない  
よ。人に会つても自惚れてはならないよ。そのようなこ  
とをすると、不幸な目に遭わないとも限らないからね」  
と忠告した。はじめのうち、二人は岩窟のそばで遊んで  
いたが、長い月日が経つうちに、仙人の忠告を忘れて  
里に下りて行き、そのあたりの子どもたちと遊ぶように

臣たちは谷の上手の方に虎年生まれの男の子が二人いる  
という噂を聞いて、すぐさまそこに向かった。仙人は前  
もつてそれに感じて、二人の子を大きな陶器の甕の中  
に隠し、米酒の入った甕のように装つた。仙人は二人の  
子に「何が起きても出てきてはならないよ」と忠告した。  
大臣たちが肉を求める肉食動物よろしく岩窟の入り口に  
駆け寄つて来て「よぼよぼ爺さん！ お前の二人の子を  
我らに寄越してくれ。王のご命令には誰も背くことがで  
きないぞ」と言ったところ、仙人は「私は出家者でござ  
います。子どもなどいるわけがありません」と言った。  
しかし大臣たちは、仙人がそう言つても露ほども疑うこ  
となく殴りかかり、剣を取り出して「よぼよぼ爺さん！  
お前が子どもを寄越さないなら斬首だぞ」と言った。そ  
のとき、甕の中に隠れていた二人の兄弟は堪え切れずに  
出てきて「お前たち！ お年寄りをいじめるな。僕たち  
二人はここにいます」と言った。すると大臣たちは、ハイ  
タカの子のような二人の子どもを捕まえて連れて行つて  
しまい、仙人は悲痛に押しつぶされて泣いた。

二人の子は宮殿に連れられ、身体を清めて新しい衣装

なつた。あるとき、二人は子どもたちと力比べをした。  
二人の力が驚くほど強いので、子どもたちが「君たち二  
人がこんなに力が強いのはどうしてなの？」と尋ねたと  
ころ、二人は「僕たち二人は虎年生まれだからこんなに  
力が強いんだ」と説明した。かくして、谷の洞窟に二  
人の虎年生まれの子がいることが人々に知れ渡ることと  
なつた。

さて、そのあたりは別の王が支配する国で、そこには  
大きな湖があつた。その湖は、以前は人びとの衣食を恵  
んでくださった父母のようなものであつた。しかし、数年  
前に水辺の魔物が住み着いてからというもの、毎年、虎  
年生まれの男の子を二人ずつ魔物への捧げものとして湖  
に投げ込まなければならなくなつた。捧げたときは平穩  
が訪れるが、そうしないと湖が溢れて、土地には大きな  
災害が起きるのだ。その地域では、虎年生まれの子が毎  
年のように少なくなつていき、あるものは別の地域に逃  
がれ、あるものは逃げ切れずに魔物への捧げものにされ  
た。その年、虎年生まれの子がさつぱり見つからないの  
で、王は大臣たちをあちこちに遣わして探し回つた。大

を着せられた。湖への捧げものために宴会が開かれる  
と、ラモゼーマという王女が現れた。王女は二人の少年  
に見初め、この勇敢で聡明な二人の少年を湖に投げ込ん  
でしまうのは残念だと思い「この二人はかくも素晴らし  
い若者なので、ここに留めおきましょう」と王に頼み込  
んだものの王は聞き入れなかった。王女はたいそう慌て  
ふためき「彼ら二人を湖に棄てるっていうなら、私も二  
人と一緒に湖に捨ててよ！」と泣き叫んだ。すると王は  
「国の統治が衰えることを一顧だにしないような悪い娘  
は、一緒に革袋に詰めて水の中に捨ててしまえ」と命  
じた。王の鶴の一声により、人びとは三人を革で縛つて  
水中に投げ捨てた。陽光と月光の二人は「僕たち二人は虎  
年生まれだから水中に投げ捨てられても仕方がないとし  
ても、この子まで巻き添えにされるのは可哀そうだ」と  
思つていた。王女は「私は王の罰が下つたのだから水中  
に投げ捨てられても仕方がないとしても、この二人の少  
年がわけもなく水中に投げ捨てられて魔物の餌食にされ  
るのは可哀そうだ」と思つていた。魔物が捧げものの革  
袋を受け取つて開いて見ると、中には男の子二人と女の



子一人の三人がいるではないか。魔物がわけを尋ねてみると、兄弟二人は「彼女はあなたの食べ物ではありません。僕たち二人を食べてください」と庇った。娘は「彼ら兄弟はあなたの食べ物ではありません。どうか私を食べてください」と庇った。彼らが自分の命を差し出そうと我先に訴え、互いに慈悲の心で思いやっているのを目の当たりにした魔物は、凶暴さを失いすっかり穏やかになった。そして魔物は彼らを湖畔に送り届けて、今後は虎年生まれの子を投じる必要はなく、雨もほどよい時期に降らずと約束した。

それから王女は「私は今生、あなたたち二人と添い遂げます」と兄弟と約束して宮殿に戻り、兄弟二人は仙人のもとに戻った。彼らが岩窟の扉を叩いて甲高い声で「仙人さま、僕たち帰ってきました」と叫んだものの、仙人は信じられず「私のもとにいた二人の男の子は王に奪われて殺されてしまったから、生きてはいるはずがない」と言った。兄弟が事情を詳しく説明したところ、仙人はたいそう喜んで扉を開けて、二人は中に入った。

王女が宮殿に戻ると、王も従者たちもみな驚嘆した。

#### 西寧版『しかばねの物語』より第二十二話

### 魔物の三兄弟にとついだ娘

海老原志穂 訳

デチュー・サンボがむつとしながら墓場に戻り、しかばねを背負いなおして歩いておりますと、しかばねがまた口をひらきました。

「なあ、おわかいの、まあそう怒りなさんな。『靴はそまつでも足はあたたかい』とことわざにもあるではないか。おれたちははるばる旅する仲間なんだから、おしゃべりくらいしてもいいだろう。話でもして楽しく過ごそうじゃないか」

と喋りだした。

\*\*\*

むかしむかし、魔物の三兄弟がいたそう。みな、妻はおらず、その辺りのとある家に働きものうつくしい娘がいるのを知り、その家に結婚の申し込みに行った。

王女が事情を詳しく説明したので、王はたいそう喜んで使者を遣わして、仙人と二人の息子を宮殿に招き入れた。王女ラモゼーマは陽光に嫁ぐことになり、王は七日間の大宴会を開いて、象五百頭と従者を妃となった王女とともに陽光たちの国に送り届けた。王子たちの父は、二人の我が子が戻って来たのを見て喜びと恥ずかしさがあいまって、息子たちに頬ずりして泣いた。悪逆な心の月妃ティツンは、恥ずかしさと怒りに苛まれて口から血を吐いて死んだとき。

\*\*\*

物語が終わったところ、デチュー・サンボが「あー良かったな」と口走ってしまったので、しかばねはぴゅーんと飛んでいき、虹のように消え去った。

魔物の三兄弟は声をそろえてうかがいをたてた。

高い岩山の向こうがわに

なだらかに広がる平地の近くに

力みなぎるぼくたち三兄弟は住んでいます

魔力は空の神にもひとしく

蔵は金銀財宝であふれかえり

馬、ヤク、羊は山と谷をおおうほど

はかりきれないほど広い畑地でとれる

穀物は積み上げ山ほどの高さになります

娘さんをぼくたちのおよめにください

王の宮殿のように幸せで豊かな暮らしができます

ぼくら三兄弟にとってこの地にくることは

前世からの願いであつたのです

それにこたえて、娘の老いた母親がこのように言いました。

玉のようなひとり娘は

天女にもならぶうつくしき

玉のようなひとり娘は

気質は絹よりやわらかく

升ますいっぱいこがねの黄金をわたされても

かわりにやるうとは思いません

千里をはしる馬を買える金をもっても

手に入ると思わないでください

年老いたこの私には

娘の手助けが必要なのです

うちには息子がいないので

家のしごとは娘にたよるしかありません

なにごとにもひいでたこの娘を

よめにやるわけにはいきません

うつくしい羽をもつ孔雀を

外に出すわけにはいきませんが

結婚を申し込んでくださったことは

わが家の名譽でもありますので

娘の名前を言い当てられたら

ご縁ですのでよめにさしあげましょう

と言った。魔物の三兄弟はかしこくはあったが、さすがに娘の名はわからず、おたがいに顔を見合わせるしかなかった。結局三人とも言い当てることはできなかったの  
で、すぐごと家にひきかえした。帰る道すがら、ウサギに出会った。

「やあ、ウサギのお兄さん、どこにおでかけですか」

とたずねると、ウサギは、

「果物を探しに行くんだよ」

とこたえた。三人は、

「果物なんて探しに行かなくてもいいですよ。ぼくらの仕事を手伝ってくれたら、果物は好きだけさしあげます」

と言った。するとウサギは、

「どんなご用？ おいらに手伝えるかな」

と聞いた。三人は、

「この先を行くと家があります。そこにいる娘の名前を盗み聞きしてぼくらに教えてほしいんです」  
と伝えた。するとウサギは、

「そんなのおやすいご用さ。さっそく行ってくるよ」

と言い、その家へと向かった。窓の外に座ってウサギが聞き耳を立てていると、老いた母親が娘に話しかけた。

「ラサ・メト、ラサ・メト、雨が降りそうだから屋根の上に干してあるチーズをとりこんでおくれ」

それを聞いて、娘の名はラサ・メトだということがわかった。忘れないように名前を繰り返して唱えながら魔物たちのもとに向かった。道の途中で、なにかが木から落ちてきた。ウサギはびっくりしてピョンとよけたがよくよくみると、キュルの実（ミロ balan）だとわかり食べたくなった。しかし、魔物に頼まれた用事をすますのがおくれではいけないと思いがまんだ。ところが、気がゆるんだせいで、娘の名前の前半分を忘れてしまい、いくら首をひねってもメトしか思い出せなかった。仕方がないのでキュル・メトと唱えながら魔物のところに戻り、

「あの家の娘の名は、キュル・メトだ」  
と伝えたので、三兄弟はまた結婚の申し込みに行き、こう言った。

大地が盛り上がれば石があらわになる  
川がかれれば水滴があらわになる  
娘さんの名前がなんというのか  
とうとうぼくらにもわかりました  
娘さんをぼくたちのおよめにください  
この家にも幸せの太陽がのぼるでしょう

老いた母親は言った。

聖山カイラスが千の光をはなつとも  
まことの光をはなつのは水晶だけ  
私の娘の名がなんというのか  
ご存じならばおっしゃってください

と言うので、魔物の三兄弟は、

「娘さんの名はキュル・メトです」  
と言った。母親は、

「ちがうちがう。娘はそんな名前ではない。知らないの

ならとつとどこかに行っておくれ」

と言った。魔物の三兄弟はしかたなくひきかえした。道すがら、キツネに会ったので、

「キツネのお姉さん、お願いをひとつきいてくれたら私たちの家の肉を好きだけきみにあげる」

と言った。キツネは、

「いったいどんなご用かしら」

とたずねた。魔物たちは、

「あの家へ行って、娘の名を盗み聞きしてぼくたちに教えてほしいんです」

と言った。キツネはその家に行き、扉の近くに隠れていた。するとしばらくして、母親が娘に「ラサ・メト、日が暮れたよ。まだらの雌牛に草をやりなさい」というのが聞こえた。キツネは、ラサ・メトと口ずさみながら魔物のもとへと向かう途中、小川が流れていたので飛び越えると、水の中に大きな魚が泳いでいるのに気づいた。魚をとりたくなかったが、魔物たちの頼みごとをはやくすませねばと先をいそいだ。しかし、そんなことを考えているうちに娘の名前を半分忘れてしまい、ラサだけ覚え

と返したので、魔物たちは、

「おたくの娘の名はラサ・ニヤモだ」

と言うと、母親は、

「ちがうちがう。うちの娘の名はラサ・ニヤモではない」と言った。そこで、魔物の三兄弟は、しぶしぶ家に帰っていった。道すがら、カラスに出会ったので、

「カラスのおじさん、この先の家に行つて、娘の名をなんとするか盗み聞きして私たちに教えてくれないか。教えてくれたら感謝するんだけどな」と言った。カラスはそれを聞き、飛んでいった。家の旗竿の上にとまっていると、老婆が娘に、

「ラサ・メトや、日も暮れて遅くなったから、松明を消しておくれ。毛織物を織るのはもうやめにしよ、ターラー菩薩のお経を唱えてもうやすみなさい」

と言うのを耳にし、カラスはひそかに「おお、ラサ・メトというのか。ラサに咲く花という意味だな」と思い、ラサ・メトと唱えながら三兄弟の家に飛んで行き、あの家の娘の名はラサ・メトだと伝えると、魔物たちは、  
「ウサギはキュル・メトと言ひ、キツネはラサ・ニヤモ

ていたが、ラサのあとがなんだったか何度考えても思い出せない。そこで、ラサ・ニヤモと口にしながら魔物のところに帰り、魔物たちに、

「あの家の娘の名前はラサ・ニヤモよ」

と言った。魔物たちはまたもや結婚の申し込みにと向かった。

いくども歩けば道はわかるもの

天にきらめく星の数もふえていく

娘さんの名前がわかりましたので

どうかぼくたちのおよめにください

と言うと、老いた母親は

空が雲におおわれても雨は降らない

丸い石の上に作物は育たない

無駄口をたたくのはもうやめにして

うちの娘の名を言ってみてください

と言った。しかし、それらはまちがっていたのだから、ラサ・メトというのにちがいない」

と思い、再び結婚の申し込みに行った。老婆は自分の言ったことを後悔したが、言ってしまった言葉は、放たれた矢のように元には戻らないと思い、魔物が娘の本当の名前を言ったら結婚させるという約束を破るわけにはいかず、泣く泣く娘をよめにやることにした。

こうして娘は持参金がわりの真つ白な馬一頭とともに魔物の三兄弟のもとによめ入りした。魔物のよめとなった娘は、昼も夜もなく、魔物たちになぐられたり、のしられたり、奴隸のようなひどい目にあわされた。

ある日、魔物の三兄弟は娘に、

「いいか、出歩いたりするんじゃないぞ。家事はすべていつものように終わらせるんだ。奥の壁の上にある小さい扉はあけるんじゃないぞ」と言つて、出かけていった。娘は出歩く気はさらさらなかったが、壁の上の扉をあけてのぞいてみたくなった。そこで、ゆっくりと扉をあけてそっとのぞいてみると、なんと、中は人間の白い骨でいっぱいだったのだ。しかも驚いたことに、がいこつ



山の中に、やせこけて骨と皮ばかりになった自分の母親がいるではないか。母親は言った。

「やさしい娘や。今すぐここから逃げなさい。魔物の三兄弟に取って食われるかもしれないよ。おまえに私の皮をあげるから、この皮をかぶって老婆にはけるのです。持参金として渡した白い馬に乗ってお逃げなさい」

娘は母親の言う通りにして魔物の家を逃げ出し、とある家庭の水くみやたきぎひろいをして飢えをしのいだ。

毎朝早く川辺で髪をとかず時だけ、かぶっていた皮を脱ぎ、もとのうつくしい娘の姿を現した。しかし、誰かが近づくとすぐにまた皮をかぶって老婆の姿になったので、誰にも気づかれることはなく、魔物に追いつかれて連れさられる心配もなかった。

ある日の早朝、娘が髪をとかしているところを王宮の馬飼いが見かけ、川のほとりにこの世のものとは思えないほどうつくしい娘がいると王様に伝えた。王様はすぐに見にきたが、老婆しかいなかったもので、でたらめを言うんじゃないと、馬飼いをたたいた。馬飼いは、たしかにうつくしい娘をこの目で見たのに、急に老婆に変わっ

てしまったのはなぜだろうと思った。たたかれたことにもなっとくできず、次の日、しのび足で川のほとりに行ってみたとくで、皮を脱ぎ、髪をとかず娘の姿をみてしまった。馬飼いはその皮を奪い、川底に投げ捨てた。そして、娘を宮殿に連れて行き王様に差し出した。こうして娘は王様のお妃になった。

しばらくして、王様は、一年間のおこもり修行のために山のほこらに行かなくてはならなくなった。ちょうど、お妃となった娘は出産間近だったが、王様は厄除けのためにどうしても山ごもりをしないわけにはいかず、出かけていった。王様が山に行つてほどなくして、お妃は王子を産んだ。お妃は手紙を書き、王様に届けさせるために馬飼いをつかいにやった。馬飼いは手紙をもって、大きな橋のたもとまでたどりついた。そこで、三人の人間が酒もりをしているのを見かけた。馬飼いは酒のためなら命も差し出すような人間だったので、その中にまじって酒を飲んだ。「酒を飲めば舌もなめらか」ということわざのとおりで、自分の主人である王様がいかに

してお妃を迎えたのか、そのお妃が老婆の皮をかぶっていたことなど、自分が目にしたことをひとつのこらず話してしまった。その三人は他でもない、魔物の三兄弟だった。いなくなった妻を探しまわっていたが、なかなかみつけれず、そこで待ちぼうけをくらっていたのだ。馬飼いの話を聞いて、妻の居場所を知った魔物たちははげしい怒りが込み上げてきた。馬飼いが酔いつぶれたのを見はからって、封筒から手紙を取り出して読んでみたところ、「王家をつぐべき王子が生まれたので、あなたが戻ってくるのを待っています」などと書かれていた。魔物の三兄弟はその手紙を、「頭が牛で体が人間の魔物の子が生まれてしまいました。どうしたらいいでしょうか」と書いてすりかえた。馬飼いは酔いから醒めると、あわてて起き上がって王様のもとへと急いだ。王様がお

こもりをしているほこらに着くと、その手紙を王様に渡した。王様が手紙をあけて読むと、「頭が牛で体が人間の魔物の子供が生まれて、あなたが見たら愛せるわけがありません」と書いてあったので、心がずっしりと重くなり、いったいこれはどういうことなのだろうと考え

た。そして、手紙を書き、「とにかく悲しまないで私の帰りを待っていてほしい」と書いた。馬飼いがその手紙を持ってまた橋のたもとまで行くと、三人はまだそこで酒を飲んでた。酒好きの馬飼いは酒を見るや何も言わずにぐびぐびと飲みはじめた。そして馬飼いが再び酔いつぶれたのを見はからって、魔物たちは封筒から手紙を取り出し、「お前は心ない悪い女だ。さっさと赤ん坊を捨てて出ていけ」と書いて手紙をさしかえた。馬飼いは酔いから冷め、宮殿に手紙を運んだ。お妃は手紙をあけて読み、悲しみにくれた。王様が私にこんなにつらくあたるのはなぜなのかしらと考え、息子を連れてよそに行くしかないと思い、よめ入りの時にもたされた白馬に乗って逃げた。人のいない荒れ野にたどりつくと、馬が話しかけてきた。

「ご主人さま、私を殺してその皮を地面にしてください。四つのひづめを四隅に置き、骨は中央につきあげ、たてがみをまわりにまいてください。そして心臓と肺、肝臓、目玉はひとつにまとめて置くのです」

娘がどうしてもそうしようとしないので、馬はみずか

ら地面に身を投げて死んでしまった。そこで、娘は馬に言われたとおりにした。そうして一晩をすごし、目を覚ますと、そこに大きな城壁がそびえていた。四方をみどりの木々がおおい、城の四隅には塔が、中央にはひさしのついた城ができていた。庭にはひんやりときよらかな泉がわき、蔵はつきることのない品々であふれかえった。娘は息子とともにそこで暮らした。

それから長い歳月が経ち、おこもり修行が明けた王様は、晴れ晴れとした気分で歩いていくうちに、その場所にとどろつき、神の館のような素晴らしいお城をみておどろいた。中に入ってよくよくみると、そこにいたのは自分の妻だった。喜びと悲しみがまじりあった感情がわきおこり、おたがいこれまでのできごとをつつみかくさず話し、とうとう手紙を誤解していたことがわかった。それから三人は幸せな暮らしをおくった。

よこしまな心がおさまらない魔物の三兄弟は、三人の商人にばけ、上等な絹織物を売ると言って城にやってきた。しかし、一番若い男の耳にある印をひと目みたお妃が魔物だと気づき、王様にこっそり耳打ちした。王様は

人をつかいにやって広間に深い穴を掘らせ、たくさんの敷物をしいた。そして、広間に招かれた魔物たちが腰をおろした瞬間、穴に落ちた。王様はすぐに穴を土砂で埋めさせ、その上に黒や白など色のちがう九つの仏塔を建てさせ、二度と出てこれないようにしたとき。

デチュー・サンボはそこまで話を聞くと、

「馬飼いは罰せられたんだろうか。とんだ酒飲みだよな」と口をすべらせたので、しかばねはふたたびピューンと墓場に飛んで行ってしまいました。

ラサ版「しかばねの物語」より第九話  
ラガランチュンマ  
**仙人のおかげで鍋娘が命びろいし、赤い鳥がツェン鬼の国から救い出されて、二人して王座につく物語**

三浦順子 訳

またしても王子デチュー・サンボは墓場のかの樹の根もとに行き、「俺のお師匠さんが龍樹さまなら、この俺は王子デチュー・サンボさまだ。剣が石をも断ち割る剛刀なら、網は呪法が籠められた九つ目の鉄の網だ。棍棒が紫梅檀できていいるなら、縄には魔法の輪っかがついていいる。食料のマルセンはいくら食べても尽きることはない。おい、しかばね、下におりてこい。でないど樹を切り倒すぞ」と呼ばわると、しかばねがおりてきたので、棍棒でなぐって網の中に放り込み、縄でぐるぐる巻きにして、背中に背負って歩き出した。ところが七歩ほど歩いたところで、しかばねが「王子よ、王子よ」と話しかけてくるではないか。

デチュー・サンボが口をつぐんでいいると、「王子よ、

お前も運のないやつだなあ。話ひとつできないなんて。俺がひとつ話をしてやるから、聞かがいい」

\*\*\*

あるところに、爺さんと婆さん、そして娘が三人暮らしていましたとき。一家は羊の群れを飼っていて、爺さんは毎日羊の放牧に行ってたんだ。ところがある日、爺さんは山の頂で一匹の鬼に出くわし、食われちゃった。黒い羊が一匹いたが、これまた鬼に殺されて食われちゃった。鬼は爺さんの頭の皮を剥いでかぶり、さらに帽子やら靴やら衣服もまとして、爺さんのふりをして、脂ののった肉をかついで家に戻ったんだ。まあそれは爺さんその人の肉だったんだけどね。婆さんが羊の群れを迎えにやってくる時、鬼は「今日、わしは一番上の娘っ子を向こうの谷の金持ちの家に嫁にやることにした。契りのお茶やら酒やらを酌み交わしたよ。うちの黒い羊も屠った。これはお前さんにお土産だ」とのたまひ、婆さんに脂ののった肉を渡した。婆さんが火で肉をあぶって

いると、肉がこんな言葉を浴びせかけてきた。「亭主の肉を食らうつもりか、この人食いばあめ」

「おやまあ、何をほざく、そんなわけないだろう」

「そいつは口をきく肉なんだ、食べちまいな」と鬼が言うと、婆さんは言われたとおり肉を食べちまった。

翌日、爺さんに化けた鬼は、長女を連れだして殺して食らい、また一家の羊の中から、白い大羊を一匹殺して食っちまった。長女の首は穴の中、父親の首の傍らにおき、長女の脂ののった肉は婆さんに手みやげとして渡したんだ。婆さんが肉を火であぶっていると、肉が嘆いた。

「おかあさん、自分の娘の肉を食べるなんて」

「え、何だつて？」

「そいつは口をきけるってことだな、食べちまいな」

「それでだな、今日、真ん中の娘っ子も嫁にやることにした。元気のいい白羊を一匹屠って、契りの肉を食らい、酒を酌み交わしたよ」

翌日爺さんに化けた鬼は、次女を連れ出してこれまた殺しちまった。さらに大きな羊も一匹殺して食らった。

そして次女の首は穴の中の長女の首の傍らにおいて、次

女の肉を手土産に羊の群れを追って家に戻っていったんだ。婆さんが羊の群れを出迎えにくると、鬼は次女の肉を手渡し、「今日は末の娘っ子も嫁にやる取り決めをしたよ。契りの酒を酌み交わしたし、契りの肉も食べた。婆さんや、これがおまえに土産にと持ってきた肉だ」と言った。

婆さんは愚痴った。「末娘は、何年か手元において、わしら夫婦の世話をしてもらおうつもりだったんだけどね」

すると鬼は言った。「わしら元気なうちに独り立ちさせんな」

翌日婆さんは末娘に持たせる大きなマルセンを練ってつくり、「末っ子だつていうのに、かわいそうに。爺さんもこんな強引なことをしなくてもいいのに」と別れるのに忍び難い様子だったが、爺に化けた鬼は強引に末娘を連れだしていった。

昨日の穴のそばについたところで、鬼は娘に「お前はここで待ってる。わしは相手方が来たかどうか見てくる」と言つて、どこかへ行つてしまった。しばらくして、

ぶちの小犬が一匹、娘の足元にやつてきてこう言った。「そのマルセンを一口くれない？ 一口くれたらひとつお話をしよあげるよ。二口くれたら二つお話をしよあげるよ。全部くれたら、全部話してあげるよ」

娘は母親と引き離されて、悲しみのあまりろくに食欲もわかない有様だったので、小犬にマルセンを全部やっただんだ。すると小犬ときたらこんなことを言うじゃないか。「今あんたがお父さんだと思つている人はお父さんじゃなくて鬼だ。あんたの本当のお父さんと二人の姉さんの首はその穴の中あるから見せてやるよ」と小犬は娘を連れて行き、父親と姉二人の首を見せた。

その光景を目にした娘はすっかり震え上がつて「なんとか命が助かる方法はないのかしら」と訊くと、小犬は「かわいそうにね、じゃ、教えてあげるよ。鉄鍋を持つて、山の上に逃げるんだ。鬼が『娘よ、わしはここにいろぞ』と呼び掛けてきてもひたすら逃げる。山頂のあたりで捕まりそうになったら、後ろを振り返ることなく、鍋をこころがして、『私の鍋！ 私の鍋！』と叫びながら、鉄鍋のあとをこけつまろびつただひたすら追いかけてい

くんた。そうすれば命は助かるよ」と言つて消えてしまった。

娘は言われた通り鉄鍋をもつて逃げ出したところ、鬼が、「娘よ、わしはここにいろぞ、どこに行くんだ」と言いながら追いつがつて来るじゃないか。娘は後を振り返ろうともせず、ひたすら逃げていった。山頂にたどりつくころ、あやうく捕まえられそうだったので、鉄鍋を転がし、そのあとを「私の鍋！ 私の鍋！」と叫びながらこけつまろびつ下りていくと、鉄鍋は燃料糞をつめた毛織物の袋の下に入り込んでしまった。

娘もその後を追つて袋の下に潜り込んでみると、そこには木の扉があった。扉を開いて入つてみると、次に鉄の扉があった。これまた開いて入つてみると、数々の宝石や金でできた扉があり、それまた開けて中に入つてみると階段があった。その階段を下りていってみると、一羽の鳥が止まり木に止まっているじゃないか。

鳥が男の声で「娘さん、ようこそ」と声をかけてきたので、娘が挨拶を返すと、鳥は「娘さん、疲れてるんじゃないかい？ 柵から肉やバターを取り出して、食べるよ

いい」と言ってくれた。そこで娘は腹がいっぱいになるまで食べた。

一日が過ぎ、鳥は娘にこんなことを言った。「娘さん、蔵の奥、上の方に服や靴があるよ。谷の下で大きな祭りをやっているから、着飾って祭り見物に行くがいい」娘は蔵の中に入って、自分に似合う服や靴を見つけてそれを着込み、装身具で身を飾り、祭り見物に出かけていった。

娘が出かけてしまうと、鳥は暗い馬小屋から駿馬を引き出し、自分の翼をはずして折りたたんで梁の隙間に隠し、若者の姿となって全身着飾り、駿馬にうちまたがって、谷の祭りへと出かけて行ったんだ。

若者は人混みの中をぐるっと右にまわって見たものの、これほど容姿端麗な娘はいなかった。左にぐるっとまわって見たものの、これほど好ましい娘はいなかった。娘も右にぐるっとまわって見たものの、これほどの眉目秀麗な若者はいなかった。ぐるっと左にまわって見たものの、これほど格好のよい男はいなかった。祭りが終りかけると、若者は袋一杯の黒砂糖と灰を撒き散らした。

人だかりの中で見ると娘をしのぐ魅力的な美人はいなかった。娘にとっても若者をしのぐ好男子はいなかった。集まった人々は口々に言った。「チャポツアルときたら美青年すぎたから、その昔、鬼のツェンにかどわかされちまったんだよな。だからあの美人もこれからどうなるやら」

祭りがおわると、青年はまたしても群衆の中で、黒砂糖と灰を天高くまき散らした。あるものは黒砂糖を必死になんてかき集め、あるものは灰で目つぶしをくらわされてるうちに、当人は谷の奥地へと戻っていった。

そして前と同じように馬と衣装を隠し、翼をつけて止まり木の上に陣取っていると、娘が戻ってきた。鳥は「娘さん、おかえり。祭りは楽しかったかい。祭りに来ていた若者たちの中で、一番格好がよかったのは誰だったかい？ 娘さんの中で一番美しかったのは誰だったかい？」と尋ねた。

た。あるものは黒砂糖をかき集めにはしり、あるものは灰で目つぶしをくらわされているうちに、若者は馬に鞭をあてて、たちどころに谷奥にたどりついた。

それから馬から鞍をはずし、暗い馬小屋に馬を繋ぎ、鞍や装身具を隠して、前のように鳥の姿となって止まり木に止まっていると、娘が戻って来た。

「娘さん、戻って来たのかい？」

「ええ、お兄さん、うちにずっといてて退屈だったんじゃないですか」

「祭りに来ていた若者たちの中で、一番格好がよかったのは誰かい？ 娘さんの中で一番美人だったのは誰かい？」と鳥は尋ねた。

「若者の中で、もつとも恰好よかったのは、谷奥から来たという赤い鳥さんだったわ。女の子のほうは美人がたっくさんいたわ」

鳥は言った。「腹が減つただろう？ 肉とバターをお食べ」娘は自分でも食べ、鳥にも食事を出した。

数日たって鳥はまたしてもこんなことを言った。「娘さん、今日もこの前の場所です祭りがあつたよ。見に行つた

「若者の中で、もつとも素敵だったのは、谷奥のチャポツアルさんだったわ。若い女の子で可愛い子はたくさんいたわ」そして娘は柵から食べ物を出してきて、鳥にも出し、自分でも食べた。

数日して、またしても鳥は言った。「今日も谷の入り口で祭りがあつたよ。行つてみたらいいんじゃないか」そこで娘は着飾って出かけようとしたが、ふと頭にこんな考えがひらめいた。ひよっとして谷奥のチャポツアルさんってこの人なんじゃないかしら。そこで隅に身を潜めていると、若者は一式着飾って、翼を梁の間に押し込んで出かけて行った。

町についた青年はぐるっと右にまわって見たものの、娘の姿が見当たらない。ぐるっと左に回って見たものややはり娘の姿はない。一方娘は若者が出かけているすきをねらって、翼を取り出し、火にくべて燃やしてしまつた。

青年はこれまでのように、目くらましの黒砂糖と灰をまきちらして家に戻ってきてみると、なんと翼が火の中に投げられて燃やされているではないか。



ろう」

娘は谷の入り口に下りて行って、言われた通りの家を探しあてた。若者の母親は彼女の姿をとらえて言った。

「おや、向こうから見知らぬ娘が来るじゃないか」

娘は二匹の犬に、「私が敵と思うなら噛みつくがいい、味方なら歓迎するがいい」と呼ばわった。すると二匹の犬が飛んできて、しっぽをぶんぶん振っただけで噛みつくうとはしなかった。その様子をみた母親はすぐさま立ち上がり、歓迎してくれた。

「娘さん、よくいらしたね」

「どうかお気遣いなく」

「娘さん、どこからいらしたのかね？」

「私は故郷から追われて、物乞いをしているんです」

若者の母親は、娘を家の中に招き入れて「ご飯をお食べ」とすすめた。娘がつい長い溜息をつくとも母親は、「おやおや、何か悩み事でもあるのかい。私には心から慈しんでいた息子がいたんだけど、どこにいったのやら、行方がわからなくなってもう五年もたつよ。こんな悲しいことがあるかしら。娘さん、あなたの身に何が起きたの



「ほくたちふたりは連れ添う運命にはなかったんだね。」「ほくはその昔、ツェン鬼にかどわかされそうになったんだが、この翼のおかげでなんとか逃げ延びることができていたんだ。」この翼が十年燃やされずにすんだら、二人は一緒になれたはずなのに。「こうなったらツェン鬼がぼくを連れ去ってしまうだろう」

娘は泣いて、「何とかならないの?」と訴えたものの「こうなったら手の打ちようもない」という返事がかえってくるばかりだった。娘は青年にすがって言った。「それでもなんとかならないの、なにか手だてはないの?」

若者は言った。「君の村の入り口にキンロボイの枝を積み重ねた壁のある、東向きの家があるだろう。そこにぼくの守り本尊の馬頭観音を持って行きなさい。君にはぼくの身体の匂いがついてるから、犬たちは味方だと思つて歓迎してくれるだろう。敵だと判断したら噛みつくようなやつらだ。離れに暮らしているぼくの老いた母親が出てきた君を迎えてくれるはずだ。これまでの経緯を打ち明けたら、ここにいなさいと言ってくれるだろう。ぼくと君、しばしの間あいまみえることは難しいだ

かい?」

娘は思わず涙をはらはらこぼして、「私は本当に福分のない人間なんです。親も姉たちも鬼に食われてしまつて、私自身は命からがら逃げてきたんです」と言った。

母親は「え、それは本当かい」といつて自らも涙をこぼした。そして「私の大切な息子は遺体すらみつけれなくてもう五年だ。あんたもかわいそうな境遇のようだから、私のところに住むがいい」と言つて、機織りと糸紡ぎの仕事を与え、娘を小屋に住まわせてくれた。

しばらくたったある日の夜のこと、娘の夢枕に仙人が現れて、こんなことを言うではないか。「親も姉さんたちもなくしたかわいそうな娘さん、望みがあるならなんでも言つてみるがいい」

「私は頼りにできる親も姉たちもみな失くしてしまつたんです。夫のチャポツアルとどうか早く再び連れ添うことができるように助けてください」と娘は訴えた。

すると仙人は「夫と再びめぐりあえるよう、なんとかしてあげよう」と言つて消えていった。

娘がこの地に来て何か月か過ぎたところで、目に見え

て腹が膨れ始めた。仲間の下働きの女たちが頭にきて母親に告げ口した。「うちにいるあの娘ときたら、妊娠してるみたいですよ」

母親はこの話をきいて、娘にこう問いただした。「おまえさん、妊娠しているみたいだけど、お相手はうちの馬飼ひ、羊飼ひの誰なのかね。打ち明けてごらん。二人だけの秘密にしておくから」

娘は言った。「わたしには神様がついていらつしやるみたいなんです。このあいだ家の壁を修理するといつたおめでたい夢を沢山みました。疑うんだったら馬飼ひや羊飼ひに聞いてみてみればはつきりするでしょう。人は勝手なことをあれこれ言い立てるけど、嘘ばっかり。私のお腹が膨れているのも病気のせいなんです」これを聞いた母親は戻つていった。

数日たつて、娘が東に面した扉の前にはいたところ、赤い馬にうちまたがり、赤い犬を引き連れた赤い人が現れて、「娘さん、君は鍋娘かい? ちゃんしたベッドに寝ているかい? ちゃんと枕をもらつているかい? ウールの掛け布団はあるかい? 枕元に糖蜜が置いてあ



るかい？ 食事にツアンパとバターはもらっているかい？」と尋ねてきた。

そこで娘は答えた。「あなた、チャポツアルなのね、お帰りなさい。寝ようにも、ベッドもないから、小屋の床に寝ているだけ。頭をのせる枕もないので、帯が枕のかわりです。ウールの掛け布団もなく、昼も夜も着たきり雀、ふかふかの敷布団などなく、ズボンを敷物の上に敷いてます」

若者は家の中に入ってきて、二人はこんな会話を交わした。

「今までどうして戻ってこれなかったの？」

「どうして戻ることなどできようか。君がぼくの翼を火にくべてしまったおかげで、ツェン鬼に連れていかれてしまったんだ」

「ならどうして今、戻ってくるのができたの？」

「連れ去られてから、容姿がすぐれているという理由でツェン鬼の宮殿のお茶係に任命されたんだ。それからほとんどん拍子に出世して執事になれたんだけど、最近になって、主人の寝酒を二度ほど切らしてしまった。その

たそうじゃないか。包み隠さず正直にお言い」

「歌を歌って私を口説きにくる人なんかいるわけじゃないですよ」

「いるのはわかっているんだからね。正直にお言い」

「前世からのよきご縁でせっかく愛しい人に巡り合うことができたのに、たった一度の過ちのせいで、私はこんな辛い目に遭う羽目になったんです」

それを聞いた母親は納得して床にベッドをおき、ベッドの上には敷布団を敷き、その上にはウールの掛け布団をのせてくれた。枕元には枕、さらに糖蜜が一杯入った器もおき、食事にはツアンパをバターで練った団子を出してくれた。夜になると、青年がやってきて「この間ぼくがここに来てから、事態はぼくがいったとおりに変わったかい？」と訊いてきたので、娘は答えた。「ベッドに敷布団を敷いたものが寝床となりました。枕元には枕が備えてあります。ウールの掛け布団もあります。枕元には糖蜜があります。ツアンパをバターで練ったものが食事に出るようになりました」

青年は家の中に入ってきて、「無理してやって来たけ

時は何も言われなかったけど、昨日の夜も寝酒を切らしたら、すっかり怒られて、執事は馱になって馬飼いに格下げになった。おかげでここに来ることもできるようになったんだよ。これからは時々会いにくるよ」

「え、会いに来るんじゃないくて、戻ってこれないの？」

「戻ってこれるかどうかはわからない。ぼくの母親に、これまでの経緯を正直に打ち明けて、寝床に敷く敷布団やウールの掛け布団、それにもっといい食べ物や服をもらうといい」

空が白み始めると、「そろそろ戻らないと」と若者は言って去っていった。娘は、「吉夢がそのまま叶えられたんだわ」と思い、心の底から喜んだ。その日、馬飼いや下男たちが女主人である母親のもとにやってきて、「おかみさん、わしらのことを意味なく叱りつけましたよね。あの娘はどうみたって妊娠している。夜、あの娘の家から、歌を交しあったり、どったんばったん騒いでいる音が聞こえてきましたよ」と告げ口した。

母親は、娘のもとに足を運び、問い詰めた。「あんたこの前の夜半に、歌を交わし合ったり、どたばた騒いでど、もう会えないかも」と言い、糖蜜を器一杯飲み、ツアンパをバターで練ったものを食べた。「ようやく御飯が食べられて人心地がついたよ。この前ここにやってきたせいで叱責されて、今度は水汲みに格下げになってしまったよ」

「逃げだすことはできないのかしら」

「馬にうちまたがったツェン鬼たちはとても鼻がきくので、そんなやつらからどうして逃れることができよう。でも手をかしてくる人がいれば、逃げ出すことはできるかも」それを聞いて娘は大喜びした。

その日の晩、娘の夢の中にせんだつての仙人があらわれてこう告げた。「娘さん、かわいそうに。明日、正午をすぎたところに、鹿の角を手にしてビヤクシンを積み上げた山の真ん中に座りなさい。口には小さなトルコ石を含んで、決して失くしてはいけません。手にもった鹿の角も失くさないようにして、自分の頭頂に私の姿を観想しなさい。すると、右には馬にうちまたがった赤いツェン鬼が百人ほど、左には馬にうちまたがった赤いツェン鬼が千人ほどあらわれることだろう。その赤いツェン鬼

たるや、大きいことまるで山かと思紛うほど、おまけにサソリ頭だ。そんなやつらがやってきて、家を太腿のあいだに挟んで、押しつぶそうとするだろうが、それでも、じっと私の姿を頭頂に観想したままでいなさい。そうすれば、娘さん、あなたの願いは今日かなえられるよ」翌日の正午がすぎたころ、娘は口に小さなトルコ石を含み、手には鹿の角を握って、言われた通り頭頂に仙人の姿を観想した。

一方仙人は自ら灰色の駿馬に変身して、泉のほとりで待ちうけていた。すると青年が背中に銅の水がめを背負い、悲しみの歌を歌いながら、水を汲みにやってきた。泉のほとりにつくと、待ち受けていた駿馬がこのように話しかけるではないか。

「若者よ、かわいそうにな。おまえさんの連れ合いがおまえさんのことひたすら待ちわびているよ。駿馬の私の背中におのり。そして決して後ろを振り返ることなく、おのれの故郷に戻るんだ」

青年は喜び勇んで、駿馬にうちまたがり、まもなく故郷に戻る事ができた。すると、ツェン鬼の国から送り

こまれた騎手で故郷はいっぱいになってた。赤いツェン鬼はサソリ頭で、その大きさをや山かと思紛うほど、両の触肢でもって青年の家をつかんで、時には空にもちあげ、時に地に打ちすえていた。

娘は怯える様子もみせず、サソリ頭の鬼にこう言い放った。「サソリ頭の悪鬼め、おまえたちの来世は地獄落ちよ。さっさと消えるがいい」

だが、周りの人々には、娘が鹿の角を握りしめ、積み上げたビヤクシンの中に座っている様子しか見えず、「おかみさん、あの娘っ子ときたら、誰かに話しかけていますよ。先ほどからこの家が揺れてるけど、あの娘の仕業じゃないんですか？ こんなことじゃ、俺らは逃げようにも逃げられない。おかみさんの大切な息子さんをその昔かどわかしたのもきつとあいつの仕業にちがいない」と文句を言い始めた。ところが娘がビヤクシンの山から下におりてくると同時に、チャポツアルが現れ、めでたく二人は再会することができましたとさ。

二人は望みが叶って欣喜雀躍、しばらくのあいだ抱き合ったままだった。母親も、息子をひしと抱きしめて、

一時気を失っていた。息子が戻ってきたことを目にした家族は、ひとところに集まって関の声をあげ、村人もその場に集まって喜びを共にした。その場に集った人々はこぞって、息子が戻ってきたことに、ひたすら感謝の祈りを捧げた。

それから二人は息子三人と娘三人の子宝に恵まれましたとさ。

その国には大王様がいたんだが、たまたまその王族の血統が途絶えてしまったんで、この夫婦が王位につくことになった。臣民たちは前にもまして幸せを享受しましたとさ。

\* \*

そこで王子デチュー・サンボがつい、「その息子は本当に肝もすわってる上に福分にも恵まれているなあ」と口をすべらせると、しかばねは「ははは、口をすべらしやがった」といって、ひゅーっと飛んで逃げてしまった。

王子は、「お師匠さんからさんさんしかばねに返事は

してはいかんと釘をさされていたのに、つい惑わされて返事をしてしまった。しかばねを持って行けなければどうしようもない」と思い、再び墓場に戻って行き、しかばねたちが「ふるふるくふるふる」と喋っている中に入っって「はらはらくはらはらく」と言っている連中を棍棒でぶちのめしていった。

※「」の部分は訳者による補い



# しかばねの物語にまつわる エッセイ



「しかばねの物語」には諺による知恵の伝達のほか、様々な創作に影響を与えるエッセンスが含まれています。ここでは、「しかばねの物語」収録の「石の獅子」をもとにしたアニメーションや諺などについてのエッセイを紹介します。

## 本描きに入る前のキャラ作り

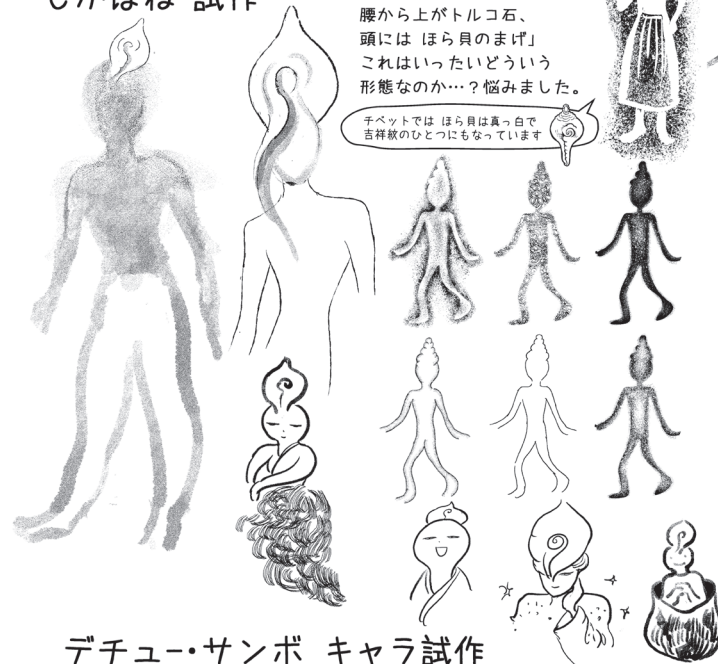
絵・文 蔵西



### しかばね 試作

「腰から下が黄金、腰から上がトルコ石、頭には ぼら貝のまげ」  
これはいったいどういう形態なのか…？悩みました。

チベットでは ぼら貝は真っ白で吉祥紋のひとつにもなっています



### デチューン・サンボ キャラ試作



星泉先生の『しかばねの物語』に絵を描かせて頂けることになった時、すごい！と心躍りました。しかも児童書なので、もしかしたら小さい人達が初めて触れるチベットになるのかもしれない。嬉しいことだけれど、心して描かねば。資料に当たり、星先生、編集の佐藤さんと相談を重ねました。そして、のびのびと好きに描きたいように描かせて頂き、詰め込みたいことが一杯なのでこつこつと進めました。小さい人達だけでなく、大きくなった人達もこの本でチベットを近く感じて下さったら素敵だな、と思っています。

しかばねのはっきりとした姿は登場させないほうが良い、と星先生、編集の佐藤さんと相談して決めました。しかし出さないにしてもキャラ造形はしておいた方が全体の説得力につながると思い、用意しておいたのです。



## 短編アニメ「いしのしし」

『しかばねの物語』の「石の獅子」から発想を得て作ったアニメーション

制作・ウジャ・パクパジャブ

松尾みゆき

音楽・音響効果・ばばまさみ

テーマ音楽・ゾンディジャムツオ

背景・声の出演・ルチュ・パクパジャブ

指導・眞賀里文子、山本真由美、小中紗洋子

二〇二〇年 チベット語 5分

〈あらすじ〉

昔、あるところに貧しい男がいた。山に薪集めに行く道の途中に、石の獅子の像があり、男はいつも友だちのよう<sup>に</sup>に接していた。その優しさに心を打たれた石の獅子は、口から金を出し、男に受け取るように促す。男ははじめ、金を少しだけ受け取っていたが、豊かになっていくにつれ欲望が膨らんでいき……。



## たくさん縁から生まれたアニメ「いしのしし」

松尾みゆき

### 奇跡の再会

私は二〇〇六年に中国青海省（アムド・チベット）に日本語教師として派遣されました。最初に受け持った日本語クラスの学生の中に、のちにアニメ「いしのしし」の共同制作者となるウジャ・パクパジャブさん（以下、パクパさん）がいました。当時、パクパさんは北京電影学院の受験を希望していて、入試科目に日本語があるという<sup>こと</sup>で勉強に来ていましたが、家庭の事情で夢半ばにして故郷に帰っていきま<sup>し</sup>た。

その後、チベットでは口頭伝承の昔話が忘れられつつあることを知りました。その原因のひとつがテレビやインターネットの普及だと知り、それならば、昔話のアニメを作って、テレビやインターネットで放送したらいいのではないかと考えるようになりました。しかし、当時チベットでは本格的にアニメを作っている人がいなかっ

たので、チベット人のアニメーターを養成する必要があら<sup>と</sup>と感じました。そこで、私は日本語もしくはチベットの伝統的な仏教絵画（タンカ）を勉強している人に「昔話のアニメを作ることに興味はないか」と聞いて回るようになりま<sup>し</sup>た。志を同じくする人には出会えませんでした。したが、いつか仲間に出会えた時に私も力になれるようにと、アニメの勉強を始めました。

二〇一五年の夏、青海省の中心地である西寧でソントルジャ監督の映画「河」（邦題「草原の河」）が上映されました。「観ないと一生後悔する！」と友人に言われ、高熱を押して劇場へ行きましたが、チケットはすでに売り切れていて中に入る<sup>こと</sup>ができませんでした。入口でどうしても観たいと騒いでいたところ、後ろから日本語で「先生！」と声をかけられ、振り向くとパクパさんが立っていました。なんと、パクパさんはソントルジャ監督の映画のスタッフになっていたのです。そして、パクパさんが私と同じ夢を持っていることを知り、私たちは共にチベットのアニメーションを作ろうと歩み始めました。

## イメージを共有・具現化することの難しさ

同じ志を持って一緒にアニメーションを学びながら作品を作り始めたものの、一番難しかったのはイメージの共有とそれを具現化することでした。

キャラクターやセットのデザインはパクパさんが担当したので、パクパさんの頭の中にあるものをそのまま作りたいと思ってはいたのですが、「百年前のゴロク地方の人」や「チベットの伝統的な服装や住まい」と言われても、同じイメージを思い描くことは難しく、写真を探してももらったり、絵を描いてもらったりしました。

当時、私は仕事をしながら、パクパさんは全日制のアニメの学校に通いながら「いしのしし」の制作を毎日数時間ずつしていました。ただでさえ時間がない中で、イメージのすり合わせに多くの時間を割かなければなりませんでした。しかし、たとえイメージを共有できたとしても、私たちにはそれを具現化する技術が全く足りず、人形もセットも何度も何度も作り直さなければならず、本当に完成するのか、不安と焦りに満ちた一年間でした。

ていくよりも暗くなっていくほうが、その心理状態に合うのではないかと考えました。人間の止まらない欲望を表現するために、この部分も変更しました。

### ここにも注目してほしい！

① 男の顔：いろいろな角度から光を当てながら作り、顔のどこかにいつも影ができるようにしました。目玉も手作りです。

② 石の獅子の髪：全てに針金が入っていて、全部動かせるようになっていきます。まずは、ウレタンを青緑色に染め、針金の周りにそのウレタンを巻いて一本の毛を作り、それを三本ずつにまとめて、独特な巻き髪を作りました。単純ですが作業量が膨大だったので、友人たちに手伝ってもらい、なんとか全ての髪を作ることができました。

③ 音：音の多くは、主にチベットの金剛鈴や太鼓などを使って、音響効果のばばまきさんに作ってもらいました。また、ヤクや羊、鳥などの声は友人にアムド・チベットで録音してもらい、その音を使っています。

## 原作からの改変

人形やセットを作りながら、同時進行で、具体的にどのようなシーンを撮っていくか、カメラのアングルや人形の動きを決めなければなりませんでした。初めは原作と同じように、善良な男と欲深い男の二人を登場させる予定で、人形も二体作っていました。しかし、具体的にどう映像化するかなかなか頭に思い浮かばず、行き詰まっていたある日、パクパさんが「実際には、善良なだけの人でも欲深いだけの人もいませんけどね」と言ったことから、試しに「二人の人間の性格」を「一人の人間の心の変化」にしてみようということになりました。すると、面白いように具体的な映像のアイデアが次々と溢れてきたので、男は一人にすることにしました。

もうひとつ、原作から大きな改変をした部分があります。原作では、金を取るきことができるのは「夜が明けるまで」（早朝）となっていますが、私たちのアニメでは「日が落ちるまで」（夕刻）に変えました。これも初めは原作通りにするつもりでしたが、善良だった男が豊かになるにつれ欲深くなっていくので、だんだん明るくなっ

### 多くの方々に支えられて

アニメ「いしのしし」は、多くの方々に支えていただき、なんとか完成させることができました。丁寧に指導してくださり撮影にも何度も立ちあつてくださった先生方、技術も時間も足りない私たちの作業を手伝ってくださった先輩方や友人たち、そして、何年も家や会社を留守にして勉強することを心よく応援してくれた家族とソニタルジャ監督。この中の一人でも欠けたら、実験的なチベット・アニメ「いしのしし」を作ることはできませんでした。また、完成後もたくさんの方々に応援の言葉をかけていただき、励みになっています。

まだまだ未熟な私たちには、これからも多くの方々のご支援が必要ですが、いつか私たちの頭の中にあるチベット・アニメーションがしっかりと具現化できるように、そして、応援してくださる皆さんの期待に応えられるように、これからも頑張っていきたいと思っています。

## 短編アニメ「いししし」を制作して —チベットの昔話とアニメーション

ウジャ・パクパジャブ

### アニメーション制作への夢

大学生活が終わりを迎える頃、私はチベット人の手で初めて作られた映画「静かなるマニ石」(監督:ペ・ツェテン)の撮影に美術助手として参加しました。この時、チベット映画の誕生を目の当たりにし、それまで抱いていた「映画は遙か遠い存在」という考えが打ち砕かれ、それ以来、ひとつの思いがぼんやりと浮かぶようになりました。「いつか私にもアニメーション映画が作れるのではないか」と。しかし、当時はまだチベット映画も歩み始めたばかりで、先行きも不透明だったので、チベットのアニメーションへの道のりは、まだまだ遠いものでした。その後、続けて「陽に灼けた道」、「草原の河」、「巡礼の約束」(監督:ソントルジャ)などの映画の撮影に参加し、映画の制作過程は徐々に分かってきましたが、

くなり、お年寄りが語る昔話を聞く忍耐力もなくなっています。そのため、就寝時に昔話を聞く機会もどんどん減ってきています。

昔話は、どれも濃厚なファンタジー色を帯びています。アニメーションの持つ創造性の力を借りれば、自由に生き生きとした物語を余すところなく表現できるだけでなく、芸術的特性も十分に発揮することができます。だからこそ、昔話という題材は多くのアニメーターに愛されています。私も共同制作者の松尾みゆきさんもチベットの昔話が大好きです。私たちは常々、チベットの昔話をアニメーションの独特な表現方法で再構築し、忘れられつつある昔話を新しい形で子どもたちに届けたい、チベット・アニメーションという樂園に子どもたちを連れていきたい、そして、長らく眠っていた大人たちの童心を呼び起こしたいと願っているのです。

### 文化の伝承としての『しかばねの物語』

『しかばねの物語』(Mi ro tse sgrung)のお話のほとんどは、チベット人が幼いころ就寝時に聞いてきた物語

アニメーション制作は依然として夢のまた夢でした。

アニメーションへの入口が見つけれられず、どうしたらこの夢を叶えられるのか分からずにいた頃、二〇一五年に松尾みゆきさんと再会し、ずっと諦めきれずにいた夢——チベットのアニメを作りたい、身の回りの日常生活や昔話からアニメを作りたい——について話をしました。幸いなことに、松尾さんも全く同じ夢を長年抱き続けていて、私に日本でアニメーションを学ぶことを勧めてくれました。そして、私は二〇一七年に来日し、日本で勉強を始めました。

### チベットの昔話をアニメに

映像メディアが隆盛を極める時代、伝統的な物語の伝承方法は苦境に陥っています。口頭伝承や文字に魅力を感じなくなり、子どもたちは映像や音声による娯楽を喜んで受け入れ、誰もがインターネットを通じて様々な種類のアニメやテレビドラマを目にするようになりました。このファストフードのように手軽な娯楽にあふれた文化の中で、子どもたちは退屈な昔話を読むことが少ないです。

若い主人公デチュー・サンボが、しかばねを背負って目的地まで進む中、しかばねは物語を語ります。その間、デチュー・サンボは話をしてはいけません。その間、話に引き込まれ、うっかり言葉を発してしまいます。すると、しかばねは元いた墓場へ飛び戻ってしまうので、デチュー・サンボもまたその墓場へと戻り、しかばねを再び背負って話をしないことを固く心に誓い、再出発します。道中、しかばねはまた物語を語り、デチュー・サンボはつい口を開いてしまい……。このやり取りを幾度となく繰り返していきます。

しかばねが語る物語は、それぞれ一つの物語として独立していますが、それらがデチュー・サンボの物語と合わさって大きな物語となっています。物語の中に物語が隠されており、まるでロシアのマトリョーシカ人形のようにです。この構造は大変おもしろく、東洋の昔話の興味深い特徴のひとつです。物語の構造だけでなく、内容も素晴らしく、平易な言葉と深遠な観念の共存、現実と空想の境界の曖昧さ、人間と自然界とのコミュニケーション



ンの壁の消失など、チベット文化の特性が色濃く出ています。

『しかばねの物語』をアニメーションにするとということ、単にストーリーを伝えるだけではなく、文化の伝承という意味を持っています。ですから、私たちは『しかばねの物語』をアニメーションにしたいという思いをずっと持ち続けています。

### なぜ「石の獅子」を選んだのか？

今回は一作目なので実験として『しかばねの物語』の中からストーリー構成の完成度が高く、登場人物が少ない話を選びました。また、「石の獅子」は、人間と自然物の境界を打ち破ったユニークな設定のファンタジーで、比較的自由度が高いと思いました。

しかし、アニメ化にあたっては、多少の変更を加えました。元々の物語で登場する善と悪の二人のキャラクターを一人にまとめ、外的要因によって変わっていく人間の心を表しました。そうしたことで、より現実近く、より生き生きとした作品になったと思っています。

トにはまだそのようなアニメーション・チームは存在せず、設立しようとしてもアニメーターの育成には時間がかかり、大変難しいです。これに対して、ストップモーション・アニメーションの場合は、人形の骨格と制作はプロにお願いしなければなりません、それ以外の作業——例えば、人形の衣装、道具、背景、セットなど——プロでなくてもできる作業がたくさんあります。これらはストップモーション・アニメーションの重要な部分ではあります、アニメーションの特別な専門技術が必要とせず、美術を学んだ人ならできることも多いでしょう。そのため、チベットでアニメーションを制作する初期段階では、ストップモーション・アニメーションのほうが比較的早くチームや創作環境を形成することができるので実現する可能性が高く、若いアニメーターが次々と現れると信じています。

### アニメ「いしのしし」の制作を通して学んだこと

短編アニメ「いしのしし」は、私と共同制作者の松尾さんが余暇の時間を使って制作したものです。当時、松

### ストップモーション・アニメーションの可能性

私たちのアニメ「いしのしし」は、人形を使ったストップモーション・アニメーションの手法で制作することにしました。世界中のアニメーションが、ほとんどコンピュータで制作される傾向にある中、手作りのストップモーション・アニメーションの黄金時代は遠くなりつつありますが、そのかけがえのない魅力は、今も多くの制作者に支持されています。私たちも、ストップモーション・アニメーションが持っている生き生きとした動きや素朴な質感が昔話を表現するのに適していると感じています。また、将来チベットで『しかばねの物語』のアニメを作ることも考慮に入れて、ストップモーション・アニメーションの手法を選びました。

チベットのアニメーションはまだ萌芽期なので、あらゆる面で条件が限られています。もし二次元のアニメーションを制作するのであれば、プロのアニメーション・チームが必要であり、特別にアニメの技術を学んだ人たちがいなければ絶対に実現できません。しかし、チベッ

尾さんは仕事をしながら、私は全日制の平面アニメの専門学校に通いながら、夜間のアニメの学校でストップモーション・アニメーションを学んでいました。

一年間で脚本作りから人形・セット制作、撮影・編集、サウンドデザインをしなければならず時間が全く足りなかったもので、多くの場面やストーリーを簡略化しました。それにも関わらず、私たちは経験も足りず技術的にも未熟だったため、最終的に完成した作品には多くの問題点があります。キャラクターの演技は繊細さに欠け、カメラのアングルも適切ではなく、音や光と影の使い方、考えが足りなかったため、全体的に映像や音による表現力が乏しくなっていました。

しかし、一年間頑張り続けて、この短編アニメを完成させることができ、非常にうれしく思っています。また、制作過程で学んだこともたくさんありました。例えば、人形を作る前にどのように動かすかよく考えておかなければ複雑な動きを表現することができないということに、石の獅子の人形を作った後で気づき、作り直すことになりました。実際に手を動かしてみないと身につか



ないことも多く、このような失敗の連続が私たちを成長させたので、制作の過程が最も大切だと感じました。

まとめると、このアニメを実験的に制作したことで、昔話をアニメーションにすることに對する考えが明確になりました。これが最大の収穫だと思っています。



## 牧畜にまつわる動物の諺

小野田俊蔵

### はじめに

本稿は、小野田 (2022) では扱わなかった牧畜にまつわる動物の諺に関して、その原文と拙訳を並べ、若干の説明を加えながら解説したものである。日本語訳は基本的に原文から筆者が独自に草したものであるが、すでに英訳・漢語訳が出典に添えられている場合にはそれらも参考にして翻訳した。チベット語原文末尾に添えられた「(DG:56)」等の記号は本稿末尾に列記された出典の略号とその頁番号を示す。本稿に添えられた動物のイラストは、しろのゆみさんにお願ひして描いていただいた。イラストの元となったモティーフはモンゴルの寺院に残存している近世の壁画から採られている。

### 犬が登場するチベット語の諺

Ebihara (2018) は諺に登場する犬に関して、“something weak, which behaves badly” という特徴が結び

けられていると説明の中で指摘している。確かにネガティブな要素、犬の劣っていて不潔だというイメージが詠み込まれた諺は多い。何故そのような犬のイメージは、作り上げられてきたのだろうか。旧約聖書からでた諺に、「生きている犬の方が死んでいる獅子よりもまし」(伝道書九章四節「コヘルトの言葉」とあるそうだ。チベットの諺にも、

འགྲུ་ལྔ་ལྔ་ལྔ་ལྔ་ལྔ་ལྔ་

འབྲུག་པ་ལྔ་ལྔ་ལྔ་ལྔ་ལྔ་ (DG:55)

雪山の獅子の立派なたてがみと

汚らしい黒犬の尻尾を比べるなんて

とある。ちなみに獅子と対比させるというスタイルの諺は多い。

འགྲུ་ལྔ་ལྔ་ལྔ་ལྔ་ལྔ་ལྔ་

འབྲུག་པ་ལྔ་ལྔ་ལྔ་ལྔ་ལྔ་ (DG:367)

獅子は雪山についてこそ獅子でもある

獅子が平地に降りてきたらただの老犬だ

འགྲུ་ལྔ་ལྔ་ལྔ་ལྔ་ལྔ་

འབྲུག་པ་ལྔ་ལྔ་ལྔ་ལྔ་ལྔ་ (TP:198)

獅子の威風を犬が真似てみたが

犬の耳には雪が溜まってしまったとき

老犬や黒犬という薄汚いイメージの対極として

選ばれるのは、獅子のみではなく、白馬も登場する。

འབྲུག་པ་ལྔ་ལྔ་ལྔ་ལྔ་ལྔ་

འབྲུག་པ་ལྔ་ལྔ་ལྔ་ལྔ་ལྔ་ (DG:41)

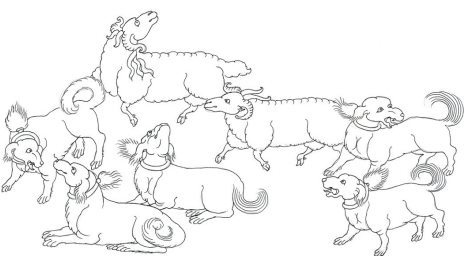
薄汚い黒犬の為に

純白馬の眼を取り出す

上記の諺の「眼」(མེ)を「ひびぬ」(མེ)と綴った例もあり、それを採ると、

འབྲུག་པ་ལྔ་ལྔ་ལྔ་ལྔ་ལྔ་

འབྲུག་པ་ལྔ་ལྔ་ལྔ་ལྔ་ལྔ་ (TP:25)



黒犬の為に

白馬のひづめを取り去る

となる。いずれにせよ大して益のない事の為に、大切なものを傷つける必要はないというのが諺の意味だと思われる。

犬は本来人間が家畜化して造った動物であって、その過程の中で、人間にとって望ましい性格を残し、望ましくない性格や特徴を消し去るように交配を重ねた結果である。ただし、その期待する複数の要素が相互に矛盾するということも多い。獐猛さと従順さの微妙な綱渡りを交配で作りましたのである。

アジアの中でも犬食を忌避する民族とそうでない人たちが存在する。その忌避が近代人の多くの反応と同様に、犬への博愛から発する動物福祉的な発想なのか、あるいは穢らわしいものを口にしたくないという感情なのかは簡単には判断できない。馬食を犬食と同様に避ける一群のチベット人たちの述べる理由がその足の形状(奇蹄)だということによく聞くが、その考えの起源は定かでは

としての犬の大きな特徴であり、望まれる要素は、人への親近性と人の情動の感知であるという。

शुभ्रान्तिरुत्तमस्य (TP:132)

善い人だという事は犬でも子でも分かるものだ

しかし、牧畜生活の補助としての犬には、親近性とは逆の排他性や、表面上の情動に騙されない独個性や懐疑性が必要である。

チベット文化の中の犬にも愛玩性のみを追求した種類もある。僧侶たちはペキニーズをこよなく愛玩する。独身生活の中で愛情の発露として愛玩犬が一定の役割を果たしてきたのである。

タクブンジャの『ハバ犬を育てる話』の表題作に登場する主人公の犬は、育てられた飼い主に対して、本来愛玩犬に期待される「飼い主への絶対的な従順性」からほとんど逸脱していき、やがて飼い主を踏み台にして出世を目論んでいく。もちろんそういう犬は実際にはいないにせよ。ここには、犬という存在に対して創造主として

ない。犬に関する諺としては次のようなものもあるが、これが犬の身体への嫌悪や忌避と関連を持つのかどうかは分からない。

शुभ्रान्तिरुत्तमस्य (TP:167)

傷に効くのなら犬の脂身でも構わない

शुभ्रान्तिरुत्तमस्य (TP:142)

豆以外の穀物は醸して酒にする

犬以外の家畜は屠って食にする

最近の犬に関する論説を見ると、犬をコンパニオン・アニマルと捉える考え方が支配的だ。つまり愛玩用のペットとしての犬がイメージの中心になっているのである。犬がオオカミの交配や狐の交配などの試行が繰り返された末に創造されてきた種であることは良く知られたことであるが、人間が犬に望んだ特性はどのようなものであったのだろうか。前述のコンパニオン・アニマル

の人間が持つ勝手な思い込みの視点が語られていて面白い。

犬に対するネガティブな評価を数え上げてみると、前述した「卑しい」「汚らしい」の他にも「価値が低い」「無能」「頭が悪い」などがある。

शुभ्रान्तिरुत्तमस्य (TP:114)

困った時に役に立たない連れ合いは犬より劣る

餓えている時に腹の足しにならない食べ物など意味がない

शुभ्रान्तिरुत्तमस्य (TP:109)

鈍な犬を屋上に繋いだら

お空の星に吠え続けた

शुभ्रान्तिरुत्तमस्य (DG:173)

犬の吠え続ける星

恩返しをしないなら、

ものを考えない犬同然だ

ལྷོ་རྒྱལ་གྱི་ལྷོ་ཀློང་།

ལྷོ་རྒྱལ་གྱི་སྐྱེ་ལྷོ་ཀློང་། (DG:259)

人がもし羞恥心をなくしたら、犬と一緒に  
犬がもし尻尾をなくしたら、猿と一緒に

ちなみに、犬を特徴づける要素のひとつであり、犬を  
価値づける重要な部位でもある尻尾を詠った諺も多い。

ལྷོ་ལུང་རྒྱལ་གྱི་རྒྱལ་ལྷོ་ཀློང་། (TP:25)

犬は寝床に尻尾を忘れてくることなどない

ལྷོ་ལུང་རྒྱལ་གྱི་རྒྱལ་ལྷོ་ཀློང་།

身中に自信があるなら犬の尻尾を踏み付けても

構わないし、

心の強さに自信があるなら借金の保証人になっ

ても構わない

「犬へのポジティブな評価には、「役立つ」「頼りになる」  
など犬の忠誠心に繋がる肯定的な捉え方が存在し、それ  
は諺にも詠われている。犬の交配の基となったオオカミ  
はその所属する群れの中での序列・社会的順位に忠実に  
行動する。犬の飼い主への忠誠心は倫理的なものではな  
くて動物的な本能に基づく行動なのである。つまり支配  
性と従属性を完璧なものにするために攻撃性が発出す  
る。」

古代チベットにおいては、戦争に犬が使われた事も  
あったようで、ヤルン王家の祖先の物語の中の有名な  
一節「ロガムタジ (Lo ngam ta 'dz) の暗殺」に使われた  
二頭の大犬、オンスク (On zugs) とズレ (Zu le ma) は  
毛に毒を塗られて放たれた軍事偵察犬であった。(Bacot  
et al. 1940: 124)

実際チベットで見かける番犬は非常に獐猛で危険であ  
る。ダライラマ六世の詩に次のような獐猛犬の呼称が登  
場する。

ལྷོ་ལུང་རྒྱལ་གྱི་རྒྱལ་ལྷོ་ཀློང་། (TP:26)

犬が群れをなして戦えばドン（野生のヤク）も  
殺せる

好ましい特性のひとつであるはずの従属性をネガティ  
ヴな要素と捉える場合もある。「権力者の犬」とは批判  
的精神を発揮しない悪しき従属を象徴している。諺の中  
には、次のような表現もある。

ལྷོ་ལུང་རྒྱལ་གྱི་རྒྱལ་ལྷོ་ཀློང་། (TP:136)

ラマのバターはラマの犬が喰った

ラマの財産をラマの親戚が使ってしまったことを指して  
こう表現される。

生業との関連もあるが、犬に期待される役割の代表的  
なもの、番犬と獵犬であろう。番犬で多分一番有名な  
犬は、ダライラマ六世の詩に出てくるシオルの歡樂街の  
入り口で番をしていた「ギャウ」であろう。

諺の中にも犬の獐猛さを詠み込んだものが多くある。

ལྷོ་ལུང་རྒྱལ་གྱི་རྒྱལ་ལྷོ་ཀློང་། (TP:25)

犬に近付くということは傷に近付くという事だ

ལྷོ་ལུང་རྒྱལ་གྱི་རྒྱལ་ལྷོ་ཀློང་།

財産を欲しいと思わない人間はいないし、

血を好まない犬はいない





故郷に居た時は馬が百頭いたものだ  
しかし去る時には自分の足だけだった

མཁུ་ལྷན་པ་ལྷན་པ་ལྷན་པ་རྩ་མཁུ།  
མཁུ་ལྷན་པ་ལྷན་པ་ལྷན་པ་ལྷན་པ། (TP:100)

財産が馬ほどの大きさだったら苦難も馬ほど  
財産が犬ほどの大きさだったら苦難も犬ほど

百頭の馬を放牧するためにはその所有権や放牧権を持つ  
必要があるので人間の度量を連想させる言葉でもある。

མཁུ་ལྷན་པ་ལྷན་པ།  
ཕར་ལྷན་པ་ལྷན་པ་ལྷན་པ། (DG:220)

ひとりの人間のお腹の中には、  
百頭の馬が駆け回るほどの広野が存在している

མཁུ་ལྷན་པ་ལྷན་པ་ལྷན་པ་ལྷན་པ།  
ཕར་ལྷན་པ་ལྷན་པ་ལྷན་པ། (DG:260)

一人でも知り合いが居れば百人が水の供与を受

嫁はお迎えしているものだ

つまり、馬は食用や乳用が目的ではないので、乗用としてチベットの諺に現れることが多い。乗用が主であることから上記の所有価値に関しても当然、脚力のある年齢の馬ほど大きい。

མཁུ་ལྷན་པ་ལྷན་པ།  
ཕར་ལྷན་པ་ལྷན་པ། (TP:150)  
人老いれば権力なし  
馬老いれば価値なし

ཕར་ལྷན་པ་ལྷན་པ་ལྷན་པ།  
མཁུ་ལྷན་པ་ལྷན་པ་ལྷན་པ། (DG:153)  
馬は肉がしっかりと付いている時に売るべし  
人は名声の高い時に付き合うべし

ཕར་ལྷན་པ་ལྷན་པ།  
མཁུ་ལྷན་པ་ལྷན་པ། (DG:350)

け得る

一頭でも仲間がいれば、百頭の馬が草を喰める

いずれも馬を百頭所有するということはきわめて裕福な生活であることを言う表現である。しかし通常は一頭ないしは数頭が限度であろう。そしてその価値は、羊やヤクなどの蓄財的な価値とは違って、伴侶を娶るような、あるいは伴侶と比較するように表現される。

མཁུ་ལྷན་པ་ལྷན་པ།  
ཕར་ལྷན་པ་ལྷན་པ། (DG:304)

乗用馬は乗り換えていけば  
だんだん良いのにあたるが、  
妻は娶り替えていけばいくほど、  
だんだん悪くなる

ཕར་ལྷན་པ།  
ཕར་ལྷན་པ་ལྷན་པ། (TP:72)

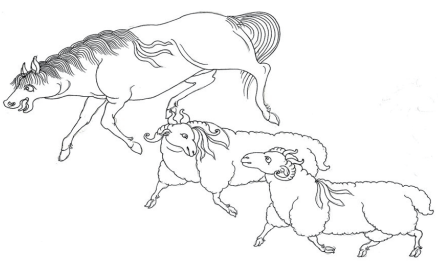
馬は買ったものだけど、

肉の痩せた馬は価値が低い  
経験の少ない若輩には人望がない

མཁུ་ལྷན་པ་ལྷན་པ་ལྷན་པ།  
མཁུ་ལྷན་པ་ལྷན་པ་ལྷན་པ། (TP:31)  
賢者にとつての翼は功德  
庶民にとつての翼は駿馬

ཕར་ལྷན་པ་ལྷན་པ་ལྷན་པ།  
ཕར་ལྷན་པ་ལྷན་པ། (DG:190)  
病気が治ったらもう医者の事は忘れてしまふ  
峠を通り過ぎたらもう馬の事は忘れてしまふ

ཕར་ལྷན་པ་ལྷན་པ་ལྷན་པ།  
ཕར་ལྷན་པ་ལྷན་པ། (DG:2)  
困難を迎えた時に友の善し悪しは判明する



長い道のりを行く時に馬の実力が分かる

ལུ་ཕྱིན་ཏན་ཅན་ལ་ལྷིང་ལམས་པ་དེ།

དུ་གྲོན་པ་ཅན་ལ་ས་གཞི་པེད། (TP:127)

徳のある人物にとって極楽往生は容易  
よく慣れた馬にとって平原闊歩は容易

馬の特質のひとつに、地に伏したり横たわりながら寝る姿を滅多に見せないという点がある。

ཞེས་པ་ས་པལ་ལ་འཇུག་པའོ།

དཀྱིལ་མཉམ་ཞུལ་དུང་འདུ། (DG:304)

朝になっても起きないのは牛のよう  
晩になっても寝ないのは馬のよう

ཞེས་པ་པ་པལ་དུས་ཚིང་པ་ལག་དང་འདུ།

དཀྱིལ་མཉམ་ཞུལ་དུས་ཚིང་པ་རྩ་ཅན་འདུ། (TP:180)

朝一向に起きないのは豚と同じ  
夜一向に寝ないのは古馬と同じ

馬は他の畜獣とは異なり、個性が強調されることが多い。つまり癖が或る意味で評価されているのである。

ཞིག་ཞིག་ལྟར་ཞིག་ཞིག་ཞིག་ཞིག་

ལྟ་ཞིག་ལྟར་ལྟ་ཞིག་ཞིག་ཞིག་ (DG:261)

人間であることは同じであっても、その考えは  
一様ではない

馬であることは同じであっても、その歩みかた  
は一樣ではない

ཞིག་ལྟར་ཞིག་ཞིག་འདུ།

དུང་འདུར་ཅན་ཞིག་འདུ། (TP:155)

人は姿が似ても心持ちは一緒ではない  
馬は姿が似ていても歩み癖は一緒ではない

歩み癖は時として予期せぬ病氣へと繋がること  
と諺は教える。

ཞིག་ལྟར་ལྟར་ཞིག་ཞིག་ཞིག་

དུ་ལྟར་ལྟར་ལྟར་ལྟར་ལྟར་ལྟར་ (TP:176)

良い家畜追いは動物達の父母のように振る舞う  
優れた馬は飼い主の心を推し量る

馬は頭が良く、乗馬者が誰であるかを判別しその癖を  
相互に理解しながら歩むのが常である。他人の馬に乗る  
ことは危険を伴う行為でもある。

གཞན་རྒྱུ་རྒྱུ་དང་གར་ས་འབྲེག་

གཞན་གཞན་དང་གར་ས་འབྲེག་ (DG:305)

他人の馬に勝手に乗るな  
他人の矢を勝手に射るな

ཅལ་ཚིང་དུ་པ་དང་གཞན་རྩིང་ལག་ཅན།

ལྷི་ཚིང་ཅན་ལྷི་པ་དང་གར་རྩིང་ལྷི་པ་དེ། (TP:169)

技量もなく馬に慣れなれしくすると骨折する  
財産のないもてなし好きは乞食になってしまふ

馬の個性の現れ方として、飼い主の情動に対する感知能力が高く評価される。

ཞིག་པ་ཅན་ལ་ཚིག་ལོན་གཞིག་

དུ་འཕྲོ་ལམ་དེ་ལ་ལྷན་ལན་གཞིག་ (DG:150)

理解力を持つ人には一言言えばよい  
脚力のある馬には一鞭ひよこ

ཞིག་པ་ཅན་ལ་ཚིག་གཞིག་

དུ་གྲོན་པའི་ཞིག་ཅན་ལ་ལྷན་གཞིག་ (DG:257)

聡明な人には一言で十分通じる  
良く訓練された馬には一鞭で通じるように

乗馬の折に裸馬を乗りこなす猛者もチベットには多いが、大抵の場合は鞍を載せて乗馬する。馬もやがて歳を重ねて退役するが、乗馬者は使い慣れた鞍を次の代の馬でも使用する。ここに大きな感慨が起こるようだ。

ལེགས་ལེགས་ལྷོ་མཚོ་ལྷོ་མཚོ།  
ལེགས་ལེགས་ལྷོ་མཚོ། (TP:158)

良い人には良い評判が相応しい  
良い馬には良い鞍が相応しい

ལེགས་ལེགས་ལྷོ་མཚོ།  
ལེགས་ལེགས་ལྷོ་མཚོ། (TP:161)

人は死んでも家系は絶えることはない  
馬は死んでも鞍は引き継がれる



### 牛やヤクが登場する諺

日本語ではオスでもメスでも牛であるが、牛にせよヤクにせよチベット語では両者は厳然と区別され異なった呼び方をする。動作の緩慢さからか「鈍重」という印象

が牝牝共通して持たれているようであるが、牝牝それぞれのイメージも異なっている。概して乳を提供してくれる牝には親近感があり、牝には瘡猛かつ愚鈍で下品なイメージが付与されているようだ。

ལེགས་ལེགས་ལྷོ་མཚོ། (DG:231)

牝牛は屠るより搾るほうが賢明

ལེགས་ལེགས་ལྷོ་མཚོ། (TP:123)

母牛には夏にしっかりと栄養を蓄えさせ、冬に搾乳するのがよ

ལེགས་ལེགས་ལྷོ་མཚོ།  
ལེགས་ལེགས་ལྷོ་མཚོ། (TP:24)

愚鈍な老いた牝牛には、  
王の命令より鞭のほうがよく効く

ལེགས་ལེགས་ལྷོ་མཚོ།  
ལེགས་ལེགས་ལྷོ་མཚོ། (TP:166)

孔雀とカラスと一緒に仲良く居ることは出来ない  
象と牛と一緒に飼う事は出来ない

牛やヤクについて民衆の関心の中心は、放牧の後に見  
つからなくなる恐れが多いということであろうか。

鈍重のイメージと同列には語れないが、よく眠るとい  
う印象が牛に結び付けられることは多い。

ལེགས་ལེགས་ལྷོ་མཚོ།

ལེགས་ལེགས་ལྷོ་མཚོ། (DG:304)

朝になっても起きないのは牛のよう  
晩になっても寝ないのは馬のよう

牧民の思い通りにはそう簡単に扱えないもの、と認  
識されているようだ。

ལེགས་ལེགས་ལྷོ་མཚོ།

ལེགས་ལེགས་ལྷོ་མཚོ། (DG:234)

ロバに対してなら有効な計略も、ヤクに対して  
は効かない

木製の錐では、鉄には歯が立たない

ལེགས་ལེགས་ལྷོ་མཚོ།  
ལེགས་ལེགས་ལྷོ་མཚོ། (TP:97)

病の神に眼を付けられれば  
医者之母でも病気になる  
遺失の神に眼を付けられれば占い師の牛でさえ  
見つからない

ལེགས་ལེགས་ལྷོ་མཚོ།  
ལེགས་ལེགས་ལྷོ་མཚོ། (DG:296)

逃げ去るゾには気付かない  
逃げる虱シラミは目に付くのに

些細な事に拘って、大きな事を見逃してしまふことを戒  
めた諺らしい。

ལེགས་ལེགས་ལྷོ་མཚོ།  
ལེགས་ལེགས་ལྷོ་མཚོ། (TP:188)

とは呼ばない

ヤクを九頭失って死なせてしまうか  
はたまたチャンタン地方の上質の塩を手に入れるか

འགྲུང་མཁན་གཞོན་དུལ་པ་ལ།  
ལྷན་པོ་མཁའ་ཀྱང་ཕྱོག་ཏུ་མེན། (TP:123)

遺失の恐れが常にあるということから、個体の識別知識の必要性が高くなる。個体識別の語彙が多様で複雑な

牛の老若を見分ける作業に、  
庶民は長けているが、それは学問ではない

体系を持つことは、海老原志穂氏の様々な論考で明らか

になっているが、そもそもその原因は逃亡や遺失が他の

畜獣より多いことなのである。諺の中にも個体

牛もヤクも牝からは搾乳をし、その加工品はチベットの  
牧畜民の主要な食糧となる。したがって乳牛や乳ヤク  
はまさしく一家の重要な財産と考えられている。

རིའལྱེ་པ་རྒྱུ་ལ་འབྲུག་པ་འབྲུག།  
མཁའ་ལྱེ་པ་རྒྱུ་ལ་མེན། (TP:151)

འཇེ་ལྷོ་མཁའ་ལྱེ་ལ་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ། (TP:123)  
母牛を可愛がっていると、

人が百人居れば百通りの考え、  
ゾが百頭居れば角は二百通り

自然と子牛のほうも懐いてくる

ལྷོ་མཁའ་ལྱེ་ལ་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ།

ལྷོ་ལྱེ་ལ་ལྷོ་ལྱེ་ལ་ལྷོ་ལྱེ་ལ། (DG:250)

蜂には縞模様があっても虎とは呼ばない

カタツムリには角があってもドン(野生のヤク)

前述したようにチベット人はモンゴル人とは違って一  
般に馬からは搾乳したり加工したりしないので、牛やヤ  
クの位置付けは馬とは自ずと異なる。馬は個人に所属す  
るかのように考えられているのに対して牛は一家の持ち

物であり家族のようなものである。

གསལ་མཁའ།

རྩ་ལྷན་པ་ལྱེ། (DG:351)

肉が少々腐ったのは薬になるが

乳の腐ったのは毒

མཁའ་ལྱེ་ལ་ལྷོ་ལྱེ་ལ་ལྷོ་ལྱེ་ལ། (TP:38)

隣の家が死んでも三日くらは喪に服せ

牧畜民女性が生活の中で搾乳に割く時間は多く、搾乳

作業に関連する諺は少なくない。

རྒྱུ་ལ་ལྱེ་ལ་ལྱེ།

མཁའ་ལྱེ་ལ་ལྱེ་ལ་ལྱེ། (DG:285)

百の言葉も要約すれば一言

百頭のゾも一本の綱に繋げる

རྒྱུ་ལ་ལྱེ་ལ་ལྱེ་ལ་ལྱེ་ལ་ལྱེ། (TP:175)

年老いたゾは、体力はないけれども、路は良く

知っている

རྒྱུ་ལ་ལྱེ་ལ་ལྱེ་ལ་ལྱེ།

འགྲུ་ལ་ལྱེ་ལ་ལྱེ་ལ་ལྱེ། (DG:288)

人を非難する厳しい言葉には確固たる根拠が必要だ

乳房のある牝牛だとしても実際に乳が出なければ

མཁའ་ལྱེ་ལ་ལྱེ་ལ་ལྱེ།

མཁའ་ལྱེ་ལ་ལྱེ་ལ་ལྱེ། (DG:295)

ゾが山中で死んだとしても、

皮は家に持って帰れ

乳といえは次のような諺もある。



शुभ्रान्तरा

शुभ्रकर्मन्तरा

शुभ्रान्तरा (TP:155)

人は正直であるべし

神は靈驗あらたかであるべし

そしてヤクの毛で作ったテントは重くあるべし

羊と山羊の諺

羊の飼育で最も気を使うのは、子羊を襲う狼や豹の存在である。

शुभ्रान्तराशुभ्रान्तराशुभ्रान्तरा (TP:107)

狼は年老いても子羊を逃したりしない

शुभ्रान्तराशुभ्रान्तरा

शुभ्रान्तराशुभ्रान्तराशुभ्रान्तरा (DG:205)

狼と羊とは同居不能

牡馬とヤクとは相性が悪い

羊は、夜は牧畜民が抱き抱えて世話をする。柔らかくてか弱い子羊の印象を表現した諺もある。

मृदुशुभ्रान्तराशुभ्रान्तरा

शुभ्रान्तराशुभ्रान्तरा (DG:129)

柔らかか言ったらまるでツアル (子羊の皮) のよう

心地よさといったらまるでカッコウの声のよう

मृदुशुभ्रान्तराशुभ्रान्तरा

मृदुशुभ्रान्तराशुभ्रान्तरा (TP:185)

誠実で控えめにしていれば、羊毛より柔らかい

人になり

悪事でのし上がれば、樹肌よりゴツゴツした人になる

羊と山羊との対比は馬とロバとの対比と同じように世界中に類例が多い。羊は常に追従を行動の主眼とするので、山羊と一緒に飼い山羊を誘導することによって羊を移動させる。これが山羊と羊のイメージの差を作り上げ

शुभ्रान्तराशुभ्रान्तराशुभ्रान्तरा (TP:108)

狼に食われたら羊は二度と戻ってこない

शुभ्रान्तराशुभ्रान्तरा

शुभ्रान्तराशुभ्रान्तरा (TP:167)

薬入れの中に毒

山羊の囲いの中に豹

शुभ्रान्तराशुभ्रान्तरा

शुभ्रान्तराशुभ्रान्तरा (DG:302)

森の荊

羊の中の狼

शुभ्रान्तराशुभ्रान्तरा

शुभ्रान्तराशुभ्रान्तरा (DG:231)

草原を焼きつくす猛烈な火のこゝろ

羊の群れに突入した凶暴な狼のこと

子羊を狼など害獣から守るために、生まれてすぐの子

ている。

शुभ्रान्तराशुभ्रान्तरा

शुभ्रान्तराशुभ्रान्तरा (TP:108)

利発さは山羊ほどではないが、

羊ほど鈍ではない

शुभ्रान्तराशुभ्रान्तरा

शुभ्रान्तराशुभ्रान्तरा (TP:191)

山羊を殺すと羊が震え出し

犬を打つと豚が逃げる

人を「迷える羊」に例えることは多いが、羊のイメージはそれを超えて、無口で自分の意見を言わず盲従するものと捉えられることがある。ただし犬のように人にこざかしく取り入ろうとする態度を見せないの、ひたすら庇護し保護する気持ちを起こさせる存在なのである。

शुभ्रान्तराशुभ्रान्तरा

शुभ्रान्तराशुभ्रान्तरा (TP:176)

未熟な羊飼いは安全な羊の行路を阻む

悪しき行路は羊の蹄を痛める

རིམ་མ་མཚན་མེད་མེད་མེད་མེད་མེད་མེད་

ལག་པ་ལམ་མེད་མེད་མེད་མེད་མེད་མེད་ (DG:370)

心に想いを抱かないのは盲従する羊のようなもの  
口に意見を言わないのは門に鍵をかけたようなもの

これに対して山羊や岩羊は単独行動を好み、勇気や創造性を感ぜさせるようだ。

མཚན་མེད་མེད་མེད་

མ་ལོ་མ་མེད་ (DG:254)

幸せな状況に安住出来ない人はいる

山羊は平坦な場所には住みたがらない

མ་ལོ་མ་ལོ་མ་ལོ་

ལག་ལག་ལག་ལོ་ (DG:326)

彼らは家畜と共に余生を過ごしその命と同化しながら生活するのである。

མ་ལོ་མ་ལོ་མེད་

མ་ལོ་མ་ལོ་མེད་ (TP:111)

父は老いて羊守りになり

母は老いて子守りになる

མ་ལོ་མེད་མ་ལོ་མེད་མ་ལོ་

ལག་ལོ་མ་ལོ་མེད་མ་ལོ་

ལག་ལོ་མ་ལོ་མེད་མ་ལོ་མ་ལོ་ (TP:113)

豚の世話をして、食事の仕方を忘れる

馬の世話をして、ゆっくり歩くことを忘れる

羊の世話をして、落ち着いて留まることを忘れる

མ་ལོ་མ་ལོ་མེད་མ་ལོ་མེད་

ལག་ལོ་མ་ལོ་མེད་མ་ལོ་མེད་ (DG:80)

年寄りの頭髪はふわふわのツアル（山羊の毛皮）のよう  
身体も歳喰ってよれよれの立木のよう

山羊が好むのは岩山であり、  
羊が好むのは草山である

ལག་ལོ་མ་ལོ་མེད་

ལག་ལོ་མ་ལོ་མེད་ (TP:52)

競走の場所を岩山にすれば、  
馬より山羊のほうが早い

ལག་ལོ་མ་ལོ་མེད་

ལག་ལོ་མ་ལོ་མེད་མ་ལོ་ (DG:153)

馬が柳の葉を食べるのは

山羊が馬に教えたのだ

ལག་ལོ་མ་ལོ་མེད་

ལག་ལོ་མ་ལོ་མེད་ (DG:233)

娘は幸せな生活に安住せず

山羊は安穩な平原に安住しない

「羊守り」は老齡の牧畜民にはびっつりの仕事である。

### おわりに

本稿は、筆者が参加した東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「チベット・ヒマラヤ牧畜文化論の構築」(jrp00258)の研究会において発表した内容をもとに多くの有益な意見を聞きながら加筆修正したものである。

チベット語の諺に関する学術的研究成果としては、  
は、Cippers and Sorensen (1998) が有名で、合計一〇、七五六首のチベット語の諺が集められ、種別や系譜が検討されている。日本に於ける研究成果としては、Ebihara (2018) があり、そこでも青海地区を中心としてチベット語の諺が集められ、類型や言語学的特徴が検討されている。しかし、それらの諺を日本語で紹介したものは多くない。西田 (1992) や、武内 (1995) に八十首ほどの解説があるが、残念ながらいずれも原文が添えられていないので微妙なニュアンスを掴みにくい。本稿は原文を添えながら、その諺が伝えようとしている奥の意味を何とか日本語で表現したいと模索したのであるが、筆者の力量が足りず、ねらいは達成されていない。

- DG 毛継祖 未剛編 (1988) 『藏族諺語選編・藏漢文对照本』 (*Bod kyi gram dpe 'dem bsgrigs*), 蘭州: 甘肅民族出版社.
- DS Sorensen, Per K. (1990) *Divinity Secularized: An Inquiry into the Nature and Form of the Songs Ascribed to the Sixth Dalai Lama* (Wiener Studien Zur Tibetologie Und Buddhismuskunde, Heft 25), Wien: Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien, Universität Wien.
- TP Lhamo Pemba ed. (1996) *Tibetan Proverbs (Bod kyi gram dpe)*, Dharamsala: Library of Tibetan Works and Archives.
- TZ 麻加・朝果・達果搜集, 青海民族出版社整理 (1981) 『藏族諺語選』 (*Bod kyi gram dpe mthong ba 'dzum shor*), 西寧: 青海民族出版社.

参考文献

- (欧文)
- Bacot, Jacques et al. (1940) *Documents de Touen-Houang relatifs à l'histoire du Tibet* (Annales du Musée Guimet 51), Paris: P. Geuthner.
- Cüppers, Christoph and Per K. Sorensen. (1998) *A Collection of Tibetan Proverbs and Sayings: Gems of Tibetan Wisdom and Wit*, (Tibetan and Indo-Tibetan Studies 7), Stuttgart: Franz Steiner Verlag.

ぶたとチベット民話

鈴木博之

チベット文化圏において、ぶたという表象には概してマイナスイメージがつきまとう。仏教思想では、三毒(最も根本的な三つの煩惱)のうちの癡(無知)を象徴する。日常生活においても、ぶたは不浄であることが強調される。ただし、母ぶたをかたどったドルジェ・パクモという仏教図像があり、信仰の対象になっている。また、チベット人名に用いられるパクモもここに由来する。

さて、民話に目を向けてみよう。チベットの民話にも、世界の民話の例にもれず、動物寓話がある。特に「うさぎ」「きつね」「虎」「ライオン」がよく登場する。ところが、ぶたが現れる例は少ない。不浄なものと考えられているからだろうか。その中で、ぶたの登場する数少ない物語の一つが、「しかばねの物語」の中の「ぶた頭の占い師」である。この物語に出てくるぶたは、主人公に嫌われた挙句、とかく理由をつけて殺される、かわいそうな脇役

gart: Franz Steiner Verlag.  
Ebihara, Shiho (2018), 'Linguistic Features of Tibetan Proverbs with a Focus on Ando' 『チベット言語文化論集』 (20), pp. 47-70.

(和文)  
海老原志穂 (2016) 「牧畜文化とチベット文学研究会編『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』 vol. 3, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, pp. 64-65.  
小野田俊蔵 (2022) 「チベットの諺と庶民の生活」 『佛教大学宗教文化』 77号「チベット紀要」 (18), pp. 1-23.  
タクブンジンヤ (2015) 海老原志穂・大川謙作・星泉・三浦順子「訳」 (2015) 『ハバ犬を育てる話』 東京外国語大学出版会.  
武内紹人 (1995) 「チベットのことわざ」 柴田武・谷川俊太郎・矢川澄子編 『世界ことわざ事典』 大修館書店, pp. 277-287.  
西田龍雄 (1992) 「チベットの諺」 『学術月報』 45(1), p.72.

である。ここでは青海民族出版社刊行のチベット語版刊本「しかばねの物語」 (*Mi ro rse sgrung*, 一九九四年版) に収録された「ぶた頭の占い師」 (“*Mo ston phag mgo*”) をもとに、そのあらすじを五つの場面に分けて紹介してみたい。

(一) ぐうたら男が妻に家を追い出され、狩りに出かける。きつねを狩ろうとするも失敗し、連れて行った犬と馬にさえ逃げられる。犬と馬を探しに行くも、村々で不運な目に遭い、身ぐるみはがれて宮殿の前にたどり着く。  
(二) 宮殿の前にある干し草の山に身を潜めていると、ぶたも寝るためにそこに入ってきて、男の安眠を邪魔する。その夜、宮殿の召使いがトルコ石をヤクの糞の中に隠し、印をつける現場を目撃する。次の日、トルコ石がなくなつたと宮殿中で騒ぎになる。事を把握しているぐうたら男が、占いで見つけてやると王に進言する。男は王に対し、占いに必要だと言って、ぶたの頭を含む道具を要請する。男はぶたの頭を使って占いをするふりをしてトルコ石のありかを教える。王は占いが当たったと思

い込み、男に褒美を出す。

(三) ぐうたら男は占いがよく当たる人として評判になり、「ぶた頭の占い師」と呼ばれる。ある日、王の蔵で財宝の盗難が起き、その解決のために男が宮殿に呼ばれる。男は盗人が使う法术の判別に必要だとして、瞑想のための小部屋を用意させる。男は緊張のあまり夜な夜な声を挙げるが、その声が盗人の名と符合する。盗人は恐れをなし、男に盗んだ財宝をすべて返す。王は盗人が判明しただけでなく、財宝が戻ってきたことに歓喜する。

(四) ある役人の息子が病気になる、どのような法术も効かず、死にかけている。ぐうたら男が呼ばれるが、もとより占う力などなく、成果を挙げられず逃げ出そうとすると、門番に泥棒と間違えて捕らえられそうになり、牛小屋へ逃げ込む。夜中に牛小屋で数人が「息子は幽霊が怖くて眠れないのだ」と話すのを聞く。次の日、牛小屋にいた一頭の牛に悪霊が憑いていることにして、屠畜するよう進言する。すると、息子の病が回復し、男は褒美を受け取り、名声を高める。

(五) ある日、ある家の主人が狩りに行ったまま帰って

ビドラマになったこともあるほどである。少なくともアムドでは、多くのチベット人がこの物語を「しかばねの物語」の一部だと考えている。しかしながら、およそ民話というものは、すべて口承であった。その中で「しかばねの物語」は、採録・整理・校訂されて出版された、まれな作品といえる。口承である限り、語り手によって徐々に個人差が生じ、それが地域差を生みだすこともよく見られる。実際、口承を記録した「ぶた頭の占い師」には、刊本とは異なる描写がある。アムド地域で口承されるものの中には、物語のプロットはほとんど変わらないうち、嫌われる対象のぶたが、実は野良ではなく飼いつたであったとか、追い払った後しばらくして子ぶたを連れて帰ってきたとか、そういう違いが認められる。

さらに、この物語に似た筋書きの民話は、独立した一つの物語としてチベット文化圏の他地域でも語られているようだ。筆者がカム地域で聞いた物語は、「ぶた頭をひっくり返す儀式」として語られていた(注)。この話でも、ぶたが殺され、その頭が儀式に供されるが、ぶたの描写に異なりがある。先に示したあらずじを参照しつ

こないとうわさになる。ぐうたら男は占いをして、主人がすでに森で死んでいることをその妻に告げ、法事を執り行う。まさにその法事の最中に主人が獲物を手にして無事に帰ってくる。

「しかばねの物語」の中で語られる各物語は、このように結びの描写がない。この後何が起きたかは読み手・聞き手の想像に任せられる。ぐうたら男が直面している立場がどのようなものであるかは容易に思い浮かぶだろう。なお、この筋書きでは(二)でぶたが突然登場しているように見えるが、実は(一)冒頭で妻がぐうたらな夫を「犬のように食べ、ぶたのように寝る」と形容している。ここにぶたの登場を示唆する要素が入っているという見方もできる。チベット文化圏のみならず、漢文化圏でも人間を「ぶた」と形容するとき、それは「食べては寝ることを繰り返す怠惰な人」を意味し、容姿や清潔さは基準になっていない。物語の中に現れるぶたは、主人公の投影であるという読みも可能であろう。

この物語は特にアムド地域において有名であり、テレビ、その違いを前半と後半に分けて見てみよう。

「ぶた頭をひっくり返す儀式」では、(一)の場面設定を欠き、(二)の描写が王宮のそばにある牛糞をためておく場所に、大きなぶたと僧がいる設定で始まる。そこに、トルコ石を首につけたゾモ(ヤクと牛の交配種の雌)が通りかかって、トルコ石が外れて落ち牛糞に紛れ込んだところを見て、僧がその糞に印をつける。そこに王子が病にかかり、どんな治療も効果がないことが分かる。王が宮殿の横で寝起きしている僧に意見を求める。僧はこれを機会に、安眠を妨げられ不愉快を覚えるぶたを始末するために、ぶたの頭を切り落とせば王子は治ると言ったものの、王がその通りにしても王子の病は治らず、その後はぶた頭をひっくり返す儀式以外の儀式を知らないと言いつける。王がトルコ石を失くし、王子は瀕死、王の飼いつたぶたが屠畜されたことすべてが僧のせいになる。

ここまで見ると、刊本の「ぶた頭の占い師」と各プロットは似ているが、詳細なイベントや発生する順序に異なりが見える。「ぶた頭をひっくり返す儀式」は、刊本の



れる。

この物語の最後のイベントが、刊本の(二)にある最後のエピソードと共通する。火あぶりに相当する箇所は、刊本にはないが、悪霊が憑いたヤクについては類似のものが登場し、やはり殺すことで凶事が消えることになる。また、刊本は主人公のぐうたら男が名声を失う事態に直面することで結びとするが、「ぶた頭をひっくり返す儀式」では、僧が運よく土地を手に入れて締めくくられ、しかも物語は「運のよい人」の例を描いたと明言する。「ぶた頭の占い師」と「ぶた頭をひっくり返す儀式」はモチーフもプロットも非常に似ているが、細かい設定には地域差が内容の差に表れている可能性も否定できない。口承の性質については、もっと研究が必要だと感じられる。

さて、「ぶた頭をひっくり返す儀式」で登場するぶたは、「非常に大きなぶた」と描かれているが、チベットに昔からいるぶたは、小ぶりで黒毛であると考えられる。「ぶた頭の占い師」で想定されるぶたのイメージも、これに沿っていると考えてよい。最近では白くて大きい

(二)〜(四)をまとめて語り、僧はここまで何も解決できず、トルコ石が失われるというくだりは召使いの作為と王の財産の喪失をまとめて語っている。また、ぶたの頭を切り落とすことが王の財産を喪失させると理解されているのが独特である。物語の続きは次のようである。

その夜、僧が用を足しに行ったとき、召使いらがひそひそと「王子の病の原因はトルコ石にある」と話すのを耳にする。そこには悪霊が憑いたヤクもいて、『ぶた頭をひっくり返す儀式』が行われたら、自分たちの悪事がばれる」と恐れていることも同時に耳にする。次の日、事情を知った僧は、召使いと悪霊が憑いたヤクを火あぶりにすれば王子が回復すると王に進言する。そして、トルコ石を見つけたら領土の半分を自身に与えるよう要求する。王が火あぶりを実行すると、王子は元気になる。

そして、僧がぶたの頭をもって牛糞を順に指しながら、印をつけておいた牛糞を指し示し、トルコ石を見事儀式で発見したふりをする。こうして王が僧に領土を割譲し、僧の肖像が王家に奉納されることになる。物語は、「運の非常によい人とはこんな人である」と締めくく

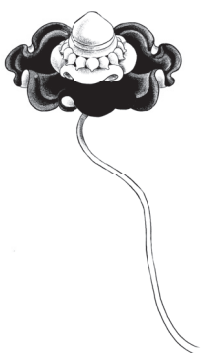
個体のぶたも見かけるが、それは西欧からの輸入品種である。もし個体が大きいことが特に意味を持つのなら、近代に導入された大きい個体の品種が語り手の中のイメージにあるかもしれない。一定のアレンジが入った可能性もある。

昨今東チベット、特にカム地域においては、ぶたをめぐって新しい取り組みが見られる。家畜や魚を自然にかえず放生の対象に、ぶたも選ばれている。その方法はさまざまで、たとえば、家の中で殺さずに番犬ならぬ番豚として庭にくくりつける場合、山や寺院のそばに放す場合、また、ぶたを食さないことで知られる村の中に放す場合が見られる。特に最後の事例では、村人がぶたの食事の世話をするため、ぶたは村から離れることなく、数か月すると村の中で子ぶたが生まれて増え始める。これらはみな、筆者が実際に見て確認したことである。

こういう新しい環境があれば、民話で描かれるぶたについても自然と変化が見られても疑問はない。しかしながら、社会の変化とともに口承が機能しなくなりつつあり、民話は忘れ去られていく。民話の変化が話題になる

前に、それ自体が消えてしまう可能性が高い。幸い、最近ではチベットでチベット文語による民話の絵本も出版されている。それに親しみを持つ人が増えれば、刊本の形で物語は残るだろう。ぶたを描いた絵本が出ているかは未確認であるが、チベットの伝統的なぶたをイメージするかぎり、その色は黒であってほしい。

(注) この物語の詳細は、Suzuki, Hiroyuki & Sonam Wangmo (2017) King's pig. *Himalayan Linguistics* 16(2), pp.129-163. を参照。



## チベットからきた私とアニメとの出会い

ルチュ・パク・パジャブ  
海老原志穂記

私は、チベット仏教ゲルク派の大本山のひとつで、中央チベットの仏の教えの流れをくむ一大拠点ラプラン・タシキル大僧院と、その支院の一つであり、アムド地方南部の一大部族であるチュンコルの十二氏族集団の菩提寺であるガンデン・シェードウブ・チュンコルリン・シーツァン新寺にまもられた牧畜村で産声をあげました。野生の血を引くたくましいヤクたちの角の間から気骨を学び、とびはねる羊たちから愛情というものを知りました。色とりどりの花をつみ、山や谷、草原で家畜たちを追いかけて幼少期を過ごした後、チベット語の教科書を背負い、馬にまたがり風と競うようにして、村から少し離れた小学校に通いました。

子供の頃から絵を描くことが一番の楽しみで、自宅の制作にも参加しました。これらの三作品はいずれも制作方法が異なっています。『My Sister』は、一枚の絵からイメージをふくらませ、絵筆で描いた絵を直接、アニメーションにしたため、制作期間も三、四カ月ほどしかかかっていません。編集は、音楽の部分以外は最初から最後まで私がひとりで行いました。他の二作品は、チベットに伝わる民話をアニメ化したもので、どちらも共同制作です。『ヤクになった神さま』は平面アニメーションで、『いしのしし』は立体アニメーションです。それぞれ制作方法が異なるため、制作プロセスも違ってきます。これまでの作品の制作方法がすべて異なるということは、とても重要なことだと私は考えています。なぜなら、機械の歯車に巻き込まれるような現代において、これらの特徴的な制作技術が日本のような場においても徐々に衰退しているからです。ですから、優れた先生にご指導いただくこの短いながらも貴重な機会に、どうにかしてこの方法を習得しようと思ひにちかいました。

その他、今年、制作している作品に『クラ神』という

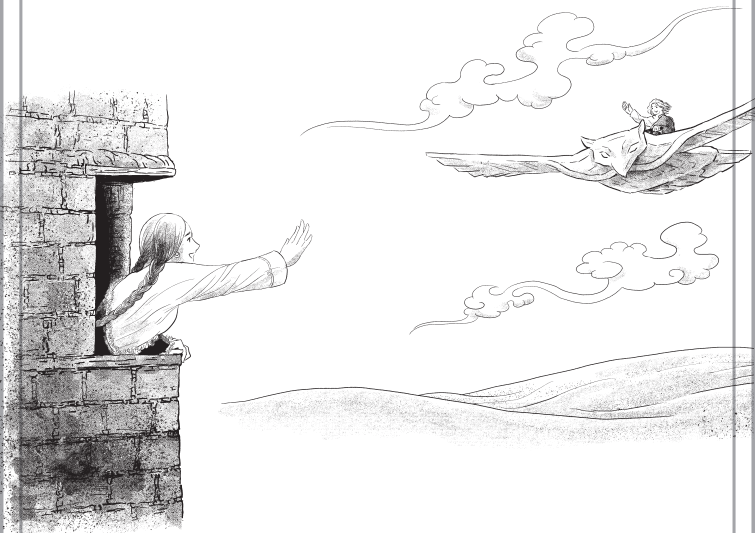
仏間にかけてられたタンカ（仏画）や、教科書にのっている絵をかたっぱしからまねして描いていました。それを見ていた両親のすすめで、学校の長期休暇の際に近くのお寺にタンカの描き方を学びにも行きました。中学校では、絵が動く「パラパラ漫画」に衝撃を受け、何度も何度もめくってはながめていました。それがアニメーションに興味をもつ最初のきっかけとなったのです。だんだんと、日本のアニメーションやアートなども楽しめるようになりまし。

二〇一六年、来日の機会にめぐまれました。日本というアニメーション技術の聖地への想いは言葉には表せないほどで、このあこがれの地のすみずみまで目で見て、心で味わいました。夢という馬が理想なる翼を得てはるか遠くの地へ舞い降り、勇気を持って、曲がりくねった道を進んでいきました。そして、アニメーション専門学校と出会い、敬愛する大橋学先生に師事し、アニメーション制作に邁進しました。大橋先生のありがたいご指導のもと、短編アニメ『My Sister』そして、民話を題材とした『ヤクになった神さま』を制作した他、『いしのしし』

ものがあります。山頂の清らかな場所で行われるお祭りについての話です。私の産土神であるアムニェ・クラ（クラ神）をテーマにした作品です。これも、最初に数枚の絵を描いて直接アニメーションにしたものです。

ひっそりとした夜の草原。黒テントの外には番犬のほえる声がひびきわたる。吹きすさぶ寒風の中、天窓からのぞくきらめく星々はまるで凍えているかのよう。そんな時に祖母はいつもおとぎ話を話してくれました。時々、おばけの話もしますが、私はこわがりなので、おばけの話をきいている時にテントの裾が風でゆらめいているのを目にすると、ゆっくりと祖母に近寄っていくのが常でした。おばけ話がこわすぎる時は、「おばあちゃん、もうやめてよ」と言って頭を布団にうずめ、そのまま眠ってしまったこともあります。父は学校に通ったことはないのですが、ことわざやライー（情歌）がとても好きで、チベット文字も自分で勉強したそうです。私も子供の頃から、父が持っている雑誌『月光（ダセル）』やライーの歌集、『ダライ・ラマ六世詩集』、そして、『し

## 現代文学への誘い



今のチベット文学の活況を支えているのは、幼少期にお年寄りの語る昔話に胸を躍らせていた経験のある作家や詩人たちです。そんな彼らの小説と詩を味わってみましょう。

かばねの物語』などを読むこともありました。こうした、謎めいていて理解の域を超えるほどゆったりとした生活も急ぎ足で遠のいていき、もはや遠い昔の出来事となりました。それにつれ、民間伝承は、理解する人々がいなくなり、草原にぼつんととりのこされています。だから、私の祖母のような上手な語り手がいなくても、アニメーション技術を用いることで、これらの物語をききたいという人たちの耳や目を楽しませることができると願っています。



『My Sister』より



## 松の木の香り

ペマ・ツエテン

大川謙作 訳

息を切らしながら階段を三階の踊り場まで上がってみると、オフィスのドアの前で皮衣を身につけた牧畜民が一人、しゃがみこんで煙草をふかしているのが目に入った。

ぼくはドアのところまで行き、立ち止まってこの男を見下ろした。見たところ二十代くらい、巻き毛で褐色の肌の青年であった。

青年が立ち上がり、「あんたはこの部屋で働いてるんだろ?」と尋ねてきた。

ぼくは男を見つめながら小さく頷いた。

青年は何やら物言いたげな様子で、手首のデジタルウォッチに目をやってからこう言った。「なんだって二十三分も遅刻したんだ?」

ぼくも自分のアナログの腕時計を確認してみたが、確

かに二十三分の遅刻だ。この職場は午後は二時半から勤務開始になるが、今は二時五十三分になっている。

ぼくは彼に尋ねた。「何か用でも?」

青年は責め立てるように「あんたら国家公務員ってのは好きに遅刻していいのか?」と言った。

ぼくは一歩前に踏み出し、鍵を取り出してドアを開けようとした。

ドアを開けても、青年は煙草をふかし続けていた。

ぼくがオフィスに入ると、青年も一緒に部屋に入っようとするそぶりを見せた。手にはまだ吸いかけの煙草があった。

ぼくはドアのところで彼を押し留め、「まずは煙草を消すんだ!」と言った。

彼はぼくにチラリと目をやり、煙草をドアの前のコンクリートの床に投げ捨てると、爪先で踏み潰した。吸い殻は粉々に踏みにじられ、煙草の匂いが立ち昇った。それから彼は部屋に入ってきた。煙草の匂いと彼の汗の匂いが入り混じり、なんとも言えない匂いがした。

仕方なく、ぼくは部屋の奥まで行って窓を開けた。窓

の外は陽光で眩しくらいだったが、冬の寒風がヒューヒューと激しく吹き込んできた。

青年は部屋に入ると、壁際に設置してあるソファに悠然と腰を下ろした。

すると、青年のデジタルウォッチが鳴り響き、どこか奇妙な女性の声で「北京時間で十五時になります」と告げた。

ぼくがその不思議な女性の声に惹かれて振り返ってみると、彼もぼくのことを見つめていた。

ぼくは布巾でデスクを拭きつつ、「何の用事なんだ?」と尋ねた。

「俺の村の人間が亡くなった。俺はここにそいつが死んだってことを証明するものを取りに来たんだ」と青年は言った。

「そいつは死亡証明書って言うんだ」とぼくは言った。

「ああ、それだ」と青年がぼくを見つめながら言った。

ぼくはさらに尋ねた。「その人はどこで亡くなったんだ?」

「病院で亡くなった」

「だったらまずは病院の死亡証明書をもらわないと。それがないとこちらの書類も出せないんだ」

「そいつは身分証明書も戸籍登録証も持ってなかったんだ。だもんで、病院は俺たちに、まずは役所にいって役所の死亡証明書を取ってこいと言うんだ」

「その人の身分証明書と戸籍登録証はどこにいったんだ?」

「見つからなかった。多分なくしたんだろうな」

「その人の年齢は?」

「三十二歳だ」

ぼくは警戒しながら尋ねた。「どうして亡くなったんだ?」

「酔ったままバイクを運転して、トラックと衝突したんだ。病院に運ばれてすぐに息を引き取った」

「その人とあんたの関係は?」とぼくはさらに尋ねた。

「同じ村の者だ」

ぼくはデスクを拭く手をとめ、尋ねた。「通報はしたのか?」

「いや、俺は病院から直接ここに来たんだ」



「事故を起こした運転手は今どこにいる？」  
「運転手とうちの村長は今病院にいるよ。運転手は呆然として、魂を抜かれたみたいになってる」

「亡くなった人の家族は？」

青年はため息をついた。「家族なんていないよ。もうみんな死んじゃったんだ」

「では病院はどうやってあんたたちに連絡を？」

「そいつの携帯電話にうちの村長の電話番号が入ってたんだ」

ぼくは椅子に腰を下ろし、パソコンを起動した。

「亡くなった人はどこの村の人？ 名前は？」

「ドジエタルという。村はナロン村だ。」

パソコンで検索すると、すぐに探し当てることができた。

ぼくは青年に尋ねた。「こっちに来て。この人かな？」

青年は立ち上がり、ぼくの後ろに立ってパソコンを覗き込んでディスプレイに映った写真を見つめ、「ああ、こいつだよ」と言った。

ぼくはしばらく写真を見つめてから、「おや、ぼくの

知り合いじゃないか」と言った。

青年は傍からぼくを見つめ、言った。「どうしてこいつを知ってるんだ？」

「小学校の同級生だった」とぼくは答えた。

「そういうことか。確かにこいつ、両親を亡くした後、京都の役所で局長をしていたおじさんの世話で街の小学校に通っていたよ」

「彼は小学校を卒業する前に村に戻っていったけどね」

「ああ、街のおじさんが亡くなったんで、村に戻って来たんだ」

ドジエタルとぼくは小学校の同級生だった。彼がクラスにやって来たのは確か二年生の時だったはずだ。彼の漢語はひどいもので、自分の名前さえ書くことができなかった。

先生はドジエタルの漢語での表記である「多傑太」という三文字を黒板に書いて彼に読ませようとした。先生はその三文字で黒板がいっぱいになるほど大きく書いてくれた。

笑った。でもその笑顔にはどこか不自然なところがあった。

「多<sup>ドクオ</sup>、多い少ないの『多<sup>ドクオ</sup>』だ」と先生が言った。  
「多<sup>ドクオ</sup>、多い少ないの『多<sup>ドクオ</sup>』とドジエタルが繰り返す。  
「傑<sup>ジェ</sup>、傑出の『傑<sup>ジェ</sup>』だ」と先生が言う。  
「傑<sup>ジェ</sup>、傑出の『傑<sup>ジェ</sup>』とドジエタルが繰り返す。  
と、ドジエタルがここでこう質問した。「先生、『傑出』ってどういう意味ですか？」  
同級生たちは爆笑し、先生はドジエタルを睨んで「意味はどうでもいいから、私と一緒に発音しなさい」と言った。  
「太<sup>タイ</sup>、太好了<sup>タイハオラ</sup>（素晴らしい）の『太<sup>タイ</sup>』だ」と先生が続けた。  
「太<sup>タイ</sup>、太好了<sup>タイハオラ</sup>の『太<sup>タイ</sup>』とドジエタルが繰り返した。  
それからと言うものの、同級生たちは彼のことを「多は多い少ないの多、傑は傑出の傑、太は太好了の太」と呼ぶようになった。とても長いあだ名で、事情を知らない人はなんだってそんなあだ名になったのかを知りたがった。ドジエタル自身も当時はそのあだ名を面白がっていた。

青年もこの話がちょっと面白かったのか、ふふっと

当時、ぼくの成績はかなり良くて、大体いつも学期末試験ではクラスで一番だった。ドジエタルは成績を上げるため、家からお菓子やおやつやらを色々と持ってきてぼくに取り入ろうとした。ぼくも普段は食べることもできないようなお菓子をもらったので、頑張ってドジエタルの勉強を見てあげた。奴が一体どこからあんなにたくさんのお菓子を持ってきているのか、ぼくにはわからなかった。何しろ毎回いつも新しいものを持ってくるのだ。君のおじさんの家は売店でも経営してるのかいって尋ねたこともあるけど、奴は笑いながら、違うよ、おじさんが買ってくれたんだよと答えた。だからぼくは当時、その局長のおじさんの家ってのはずいぶん金持ちなんだなって思ったもんだ。

だけど、思いもよらなかったことに、小学校三年の前期の期末試験で、ドジエタルはクラスで一番の成績を取った。チベット語は九十八点、算数は九十一点、そし

て驚いたことに漢語は百点満点だ。ぼくはクラスで三位に落ちていた。担任はしきりに奴を褒め称え、成績の良くない生徒たちにドジュタルを見習うようにと言っていた。「多傑太」という漢字名の書き方を教えたあの先生も、奴に親指をグツと立てて見せ、この調子でいけば大学進学だって問題ないぞと言った。その頃はぼくらの所では大学まで行く人は少なく、どここの誰々が大学生になったなんて聞くと、みんな驚いて口も利けなくなってしまうほどであった。そんなことになって、ぼくは奴を激しく恨み、それまでの二年間、おやつに釣られて奴の勉強を助けたことを強く後悔した。それからも奴のぼくへの態度は変わらなくて、たびたび例のおじさんの家からいるんなお菓子なんかを学校に持ってきてぼくに渡そうとしていた。でもぼくはもう奴がくれたお菓子は飴玉ひとつだっただけに口になかった。奴はいつも、気にしないで食べなよ、食べたからってまた勉強を見てくれなんて言わないからさと言っていた。だけどぼくは、憎々しげに「ぼくだって君の勉強の手伝いなんてしたくなかったさ。あの時、君がずっと厚かましく頼ん

ここまで話した時、青年は煩わしげにぼくの言葉を遮って、「わかった、もういいだろ。何にせよ俺の言っているのが誰か分かっただろ。急いでこいつが死んだって証明を発行してくれよ」と言った。

ぼくはもう「そいつは死亡証明書って言うんだ」と訂正しようとはしなかった。

証明書を作成していると、青年がこう言った。「それから、こいつはもう勉強を続けるのはやめてしまつて、村のごろつきみたいになつていたよ」

ぼくは手を止めて青年の目を見つめた。

青年はそれ以上言葉を続けようとせず、急にくしゃみをした。

ぼくは、こいつの様子はどこかおかしいぞ、と思った。

青年はさらに続けてくしゃみをしようとしていたが、ぼくがじつと見つめているのに気づいたようで、なんとかそれを我慢した。

外では風が強くなつていたので、ぼくは窓を閉めた。

青年は言った。「急いでくれよ。ドジュタルの遺体はまだ病院の霊安室に置いたままなんだ」

できたから仕方なく見てやっただけだよ」と言ってしまった。三年の後期の期末試験でも、奴は一位だった。しかもぼくは五位まで落ちていた。それから、ぼくは奴のことを無視することにした。奴のほうもぼくのことを相手にしなくなった。そして、元々は奴のことを馬鹿にしていた同級生たちは手のひらを返して奴と仲良くするようになったんだ。

青年は笑った。「街の子供たちは単純なんだな」

ぼくも少し笑った。「今にして思えば、そういうことなのかもな」

「ああ、考えが足りないってことさ」

ぼくは話題を変えようとして、話を続けた。「それから、もうすぐ小学校を卒業しようって時に彼は村へと帰っていった。先生たちはみんな、奴がこんな風に勉強を続けられなくなったのは本当に勿体無いつて言っていた。でもぼくは密かに喜んでいたんだ。奴がいなくなつたその学期の期末試験で、ぼくはまたクラスで一番の成績を取ることになつたよ」

ぼくは突然ペンを置き、「書類を発行するために、まずはこの所長のところに行つて許可を取らないといけないんだ」と言った。

「あんたらの仕事は本当にまどろっこいんだな！」

ぼくは彼に構わず、部屋を出ていった。

所長のオフィスは二階だ。所長は部屋でお茶を飲みながら本を読んでいるところだった。ぼくは彼に事情を説明した。

所長は言った。「証明書を発行するためには、君がそいつを連れて県の交通警察に報告しにいかないといけないな」

ぼくと青年はパトカーに乗って県庁のある街へと出発した。

車が走り出すとすぐ、青年は「俺は人生でパトカーに乗ったことがないんだ。ちょっと怖いな」と言った。

「悪いことをしていなければ怖がることはないよ」

「こいつは悪い奴を捕まえるための車だろ。悪いことしなくてたつてやっぱ怖いさ」

街への道中、ぼくは青年にドジュタルの話をした。

三年ほど前、ドジェットルがぼくを訪ねてきたことがあった。

その日の午後、ぼくが仕事をしていると、前触れもなく、一人の牧畜民がぼくの部屋のドアを開けた。

ぼくはギョツとした。

牧畜民はドアのところに立ってぼくを見つめている。

「何の用事だ？」とぼくは尋ねた。

そいつはドアのところに立ちながら、突然大声で笑い始めた。

「何の用事なんだ？」とぼくは繰り返した。

するとそいつは急に真面目な顔になり、こう言った。

「『多は多い少ないの多、傑は傑出の傑、太は太好了の太』だよ」

ぼくは立ち上がって、こう叫んだ。「ドジェットルか！」

ぼくは彼の名前を呼びはしたのだけど、でも本当に彼なのかはよくわからなかった。目の前に立っているこの男は、ぼくの記憶にあるドジェットルとはだいぶ雰囲気違っていた。彼が昔のやり方で名乗ってくれたからなん

とか思い出して名前を口に出せただけのことだ。

「なんとか思い出してくれたみたいだね、ははは」

「君は変わったよ。危うく思い出せないところだった」

とぼくは言い訳した。

「君の方はあんまり変わってないね。街で会ってもすぐ思い出せる」

それから彼は、今日は奢ってやるから飯を食いに言うと言った。

ちょうど午後には仕事がなかったので、ぼくは彼と出かけることにした。

その日の彼はこざっぱりとした服を着ていて、顔色も良かった。

ぼくらはなかなか小綺麗なチベット料理店に行った。

その日はどうしたわけか、店には客がかなり多かった。

店主はぼくの知り合いで、澁刺とした若者だ。彼は笑顔で、今日は食事が出るまでちよつと時間がかかりますよと言った。ぼくは、大丈夫、ゆっくり待つことにするよと応じた。店主は、良かったです、できるだけ急いで用意しますと言った。ぼくはドジェットルに何を食えるか聞

いたが、奴は任せるよと言うばかりだった。そこでぼくは羊肉を二斤（約一キロ）とヤク肉まんを一皿注文して、これで足りるかなと奴に尋ねた。奴は、十分だよ、食べきれなかったらもつたいもないもんなと答えた。

店主はぼくらにまず乳茶をポットで持ってきて、「先にこれを飲んでいてください。こんなものでもないよ、待っててもイライラしちやいますからね」と言った。

「ありがとう」とぼくは言った。店主は「気にしないでください。このお茶はお店からのサービスってことで」と答えた。

お茶を飲みながら、ぼくはドジェットルに尋ねた。「小学校の頃、君は成績がすごく良かったよな。どうして勉強を続けなかったんだ？」

ドジェットルは嘆息し、「運命だよ。人には皆それぞれの運命ってものがあるんだ」と言った。

「君はあんなに頭が良かったんだから、勉強を続けるべきだったと思う」

「自分でも俺の頭脳はかなり優秀だったと思うよ。でも、こうなる運命だったんだな」

「だけど、運命ってのは変えることができるものじゃないかな」

ドジェットルは笑った。「本当のことを言えば、君は俺ほど優秀じゃなかった。それは認めるだろ？」

ぼくも笑って、言った。「認めるさ。小学校の頃、君はあつという間にぼくの成績を追い抜いていったもんな。そんなことになるなんて、想像もしてなかった」

ドジェットルはまた笑いながら、「後になってやつとわかったことがあるんだ。あの時、君が俺を無視するようになって、俺のあげた菓子を食べなかったのは、俺のことを妬んでいたからなんだろう？ どうなんだ？」と言った。

「大学に進学した後で、子供の頃のことを思い出してみると、そうだな、確かにあの時、俺は君に嫉妬していたんだと思う。君みたいな牧畜地域からやって来た自分の名前も書けないような奴に、なんでぼくは追い抜かされたんだらうかってね」

ドジェットルは笑った。「とうとう認めたな。俺は君が認めないんじゃないかと思っていた。君らみたいな学士

様はやっぱり違うな。度量がでかい」

「認めないなんてことがあるか。あれはぼくらが子供の頃の話なんだし」

ドジュタルは笑いながら尋ねた。「それじゃあ、今はどうだ。今でも俺のほうが君よりも賢いって認めることができるか?」

ぼくは笑いながら答えた。「それはわからないな。ぼくらが大学でも一緒に勉強できていたら答えられたんだろうけど」

奴はすぐに傷ついた様子になり、「そうとも。だから言ったら、それが俺の運命ってやつだ。もし俺が君くらい恵まれていたら俺だって大学に行きたかった。そして俺も国家公務員になれていたはずだろ?」と言った。ぼくは慌てて「もちろんさ、絶対にそうなっていた」と言った。

奴はすぐにまた朗らかな調子に戻って、「もういいさ。こんなこと言っても何にもならないもんな。運命でそう決まっていたことなんだ。運命は誰にも変えられない」と言った。

その日の昼下がり、食事を終えてもぼくたちは取り留めもない話をして過ごした。

最後に、ぼくは奴に尋ねた。「君は運命を信じているの?」

「もちろん信じている。さもなきや、どうして俺たちの人生はこんなにも違ったものになったって言うんだ」

ぼくは奴を見つめ、言うべき言葉を見つけられずにいた。

奴は「人にはそれぞれの運命ってやつがある。それは変えることができないものなんだ」と言葉を継いだ。

「そんなことを言わないでくれ」

「人にはそれぞれの運命がある。そうして俺は、こんな風にしか生きられない定めだったんだ」

ぼくはもう何も言わなかったし、何を言うべきかもわからなかった。

青年が突然、尋ねてきた。「奴は金を借りたいと言いきなかつたのかい?」

ぼくは答えた。「いや、奴は金の話はしなかつたよ」

ぼくは目の前にいるかつての面影を無くした小学校の同級生を見つめ、何と言えばいいのかわからずにいた。

奴はぼくを指差し、こう言った。「本当なら俺は今日、君にご馳走してやるつもりだったんだ。だけどよくよく考えてみたら、今日は君の奢りってことにしようや。君は今じゃ堂々たる国家公務員だし、俺みたいな庶民の同級生に飯くらい奢っておくべきだぞ。はは」

ぼくは急いで「わかった、もちろん大丈夫だ、問題ないよ」と言った。

ぼくたちが乳茶を飲み終わった頃、ようやく注文した料理が運ばれてきた。店主は羊肉は半斤ほど、肉まんも六個ほど多めに持つてきて、こいつはお店からのサービスですよと言ってくれた。ぼくは「ありがとう、そんなことしてくれなくてもいいのに」と言った。

ドジュタルはもっぱら羊肉を食い、ぼくは肉まんを何個か食った。

奴は羊肉を食いながら「この羊はうまいな。肉まんも悪くない」と言った。

ぼくらは料理と一緒にビールを七本ほど飲み干した。

「そいつは良かった。あいつ、みんなから借金して、しかも誰にも返していないんだよ」

「あいつ、そんなにたくさんの人間から金を借りて、何をしていたんだ?」

「ああ、ドジュタルは何年か前から賭け麻雀をやるようになってね。うちの村にもあいつみたいなのが何人かいるんだが、麻雀じゃあみんな奴の敵じゃなかった。何ヶ月かしたらそいつらの金は全部ドジュタルの手に渡ったよ。それからドジュタルは街に出かけて行って、街のごろつきたちとの勝負に明け暮れていた。俺たちはドジュタルが身ぐるみ剥がれて追い返されるんじゃないかと心配していたんだが、なんと奴は街でもだいぶ勝ちを積み上げたらしい。結構な大金を手にして、中古のサンタナを乗り回し、街の女と付き合って、都会人の生活ってやつを堪能していたらしい。一度そのサンタナに乗って女連れで村に帰ってきたことがあったけど、そりや堂々たるもんだった。村のみんなは羨望と嫉妬がなймаぜになつたような目つきで奴を見ていたよ」

ぼくは運転しながら尋ねた。「それじゃあ、どうして



その後で落ちぶれてしまったんだろう」

「その後か。その後はもうダメだったんだ」

「どういうことだ？」

「後になって聞いたところでは、奴は街の裏社会の親玉に目をつけられたらしい。そいつは蘭州からわざわざ賭け麻雀の達人を呼び寄せて、勝負の場を設けて奴をペテンにかけたんだ。金額を聞いて俺たちは驚いたんだが、その時ドジュエタルの懐には百万元もの現金が入っていたらしい。でも奴は三日三晩も麻雀を打ち続けて、最後には素寒貧にされたらしい。百万元は全て吐き出し、中古のサンタナも奪われた。女も奴のもとを去っていったらしい」

青年はため息をつき、ぼくは運転を続けた。

青年は言葉を継いだ。「その時から奴はあちこちで金を借りるようになった。負けた分は絶対に取り返すって言ってね。でも、それから幸運の女神が奴に微笑むことはなかった。賭ければ賭けただけ負けて、最後には大きな負債を抱えこんで酒に溺れるようになった。奴は賭け事はやってたけど、昔は酒なんかそんなに飲む奴じゃなかった」

かった」

ぼくは運転しながら、それじゃあ前に会った時、奴は賭けで無一文になっていたんだなと思った。でもどうしてぼくに金の無心をしなかったのかはわからなかった。まあ借金を申し込まれたところで、あの頃のぼくには人に貸せるほどの金はなかった。あの頃、ぼくは三年間付き合った彼女と結婚するために金をかき集めて家を買ったばかりだった。

ぼくが黙り込んでいるのを見て、青年はこう尋ねてきた。「それから奴とは会うことはあったか？」

「ないね。奴と会ったのはあれが最後だった」とぼくは答えた。

「あと少しで、もう一回奴に会えるな」と青年は言った。

ぼくは小さく頷いた。

青年は言った。「聞いたところじゃ、奴は高利貸しかも借金していたらしい。最後には金を返せなくなつて、右手の指を一本切り落とされたっていうんだ」

ぼくは何も言わず、車を走らせた。その日は雪が降っていて、道路は滑りやすかった。

病院に到着すると、青年は一人の中年の牧畜民を指差し、「うちの村長だ」と言った。

その中年男がやって来て、ぼくの手を握った。チベット服に身を包んだ男の表情は哀愁を帯びていた。額には皺が深く刻まれ、疲れ切っているように見えた。

青年はまた別の男性を指差して「こっちが事故を起こした運転手だ」と言った。

運転手は地元の人間ではない。おそらくは甘粛省の者だろう。非常に緊張した面持ちだ。

ぼくたちは証明書を提示して病院での手続きを行なった。

遺体を目にして、ぼくは意外の念に打たれた。遺体にはこれと言って目立った傷跡はなく、最後に会った時の彼のままのように見えた。

ぼくは事故を起こした運転手に尋ねた。「あんたが轢いたんだな？」

運転手は弁明がましく「俺が轢いたんじゃないんです。この人が自分から俺のトラックに突っ込んできたんですよ」と言った。

「どういうことだ？」とぼくは尋ねた。

運転手は少しナーバスになり、「俺はお寺にセメントを運んでいたんですが、その帰り道のことでした。バイクに乗った誰かがこっちに突っ込んでくる姿が突然バックミラーに映って、それでそのバイクがそのまま車に追突してきたんです」と言った。

「それから？」とぼくは言った。

「それから、車を停めて見てみたら、バイクとこの人が道端に倒れていました。バイクのフロントガラスが粉々になっていて、この人は地面に倒れ込んだままびくりともしませんでした」と運転手が言った。

「それから？」

「それから、この人を病院まで運んできたってわけですよ」と村長が口を開いた。「それから俺に病院から電話があつて、急いで駆けつけてきたんだが、到着した時にはこいつはもう亡くなっていたんだ」

運転手が言った。「あの日、この人は酒を飲んでいました。俺が病院まで運んできた時、全身から酒の匂いがしてたんです」

村長がこう付け足した。「医者もこいつは酒を飲んで  
いたって言ったな。俺たちが病院に駆けつけた時も、  
体中から酒の匂いがしていた」

ぼくは霊安室に安置されている裸の遺体をじっくりと  
眺めた。確かに、彼の右手の指は一本欠けていた。

ぼくは村長と青年に「先に火葬場に行つて手続きをし  
ておいてくれ。ぼくはこの運転手を連れて交通警察に行  
くから、その後に火葬場で合流しよう」と告げた。

それから運転手には「あんたはトラックを運転してぼ  
くの車の後についてきてくれ。見失わないように気をつ  
けて」と言った。

運転手は頷き、こう言った。「道を間違えることはな  
いですよ。俺も交通警察の場所は知ってます。何度か行っ  
たことがあるんです」

午後五時半、火葬場に到着したぼくと運転手そして交  
通警察のタシに向かって、村長がこう告げた。「ちよう  
どいい時間に着いたな。お寺の化身ラマに占ってもらっ  
たところなんだが、うまいことに今夜の八時に火葬する

のが吉つてことだ。そんなに待たなくても済みそうだ」

ぼくは間髪入れず尋ねた。「遺体はどこだ？」

村長は「もう火葬の準備を済ませておいたよ」と答え  
た。

それから彼はぼくたちを火葬場の遺体安置所に案内し  
た。

遺体はもう包帯でぐるぐる巻きにされ、合掌して胡座  
をかいた状態で部屋の片隅に安置されていた。首には礼  
布カターがかけられていた。

ぼくは「なんだってこんなに急いで準備を済ませ  
ちゃったんだ？」と尋ねた。

村長は「火葬の前にはこんな風に支度しとくのがいい  
んだ。三十分もすれば火葬できるかな。さもないと弔い  
ができないからな」

ぼくが交通警察のタシを見やると、彼は「いや、今夜  
は火葬できませんよ。この人は死因不明でしょ。監察  
医の検死報告書が必要になるんです」と告げた。

「そんな、ダメだよ。もう包帯で巻いちゃったんだ。こ  
れ、解けないぞ」と村長が言った。

タシはぼくに向かつて「あなた、この人たちに説明し  
てあげてください。検死報告書がないと火葬はできない  
んですよ」と言った。

村長と青年の態度は頑なで、「フン！」と鼻を鳴らし  
てぼくたちの説得を受け入れようとしなかった。

タシは二人を見つめて、こう尋ねた。「亡くなった人  
は事故の前に酒を飲んでいただけと聞いていますか？」

村長は「ああ、俺たちが病院に着いた時には酒の匂い  
がしていたな」と言った。

運転手も急いで「俺がこの人を病院まで運んでいた時  
も、全身から酒の匂いがしましたよ！」と言った。

「事故の前、この人は誰と酒を飲んでいただけですか？」  
とタシが尋ねた。

村長と運転手はすぐに首を振って、「わかりません」  
と答えた。

「だったら、必ずきちんと調べないといけないですね」  
とタシは言った。

「だけど、こいつはいつも呑んだくれていたんだ！」と  
村長が言った。

「調査の前に適当なことを言わないでください。罪に問  
われることもありますよ」とタシが言った。

村長と青年は顔を見合わせ、それからぼくを見つめて  
きた。

ぼくは二人を部屋の隅まで連れて行って、事態の重要  
性について説明した。だけど二人はあまり納得していな  
いようだった。

ぼくはただ「とにかく今夜中に火葬を行うのは無理だ  
よ」と言うことしかできなかった。

村長はぼくとタシに言った。「あんたら二人だつてチ  
ベット人だろう。遺体を一旦こうやって包んだら解い  
ちやいけないし、弔いの時間だつて簡単に変わるわけ  
はいかないんだ。あんたら若者はそんなしきたりは知ら  
んのかもしらんが、年寄りたちに聞いてみればわかるよ」

「しきたりはしきたりで、法律は法律です。今の時代は  
法律に則つて処理しないといけないんです」とタシが言っ  
た。

ぼくは村長に「電話で化身ラマに説明してくれ。さも  
ないと、何かあった時に誰も責任を取れないぞ」と言っ

た。

村長は青年を連れて化身ラマに電話をかけたに行った。

二人は携帯電話を手にし、ペコペコしながら長いこと話していた。

電話が終わると、村長はこちらにやって来て「今夜を逃すと、次に火葬できるのは七日後になる」と言った。

タシは何も言わず、煙草を取り出した。

「そうするしかないな」とぼくは言った。

「今はどうしたらいいんだ？」と青年が言った。

「二人は先に帰ってください。何かあればまた連絡しますから」とタシが言った。

運転手は部屋の片隅に立ち尽くし、哀れを誘う様子で「俺はどうすればいいんですか？」と言った。

「調査が終わるまで、あなたはこの街を離れてはいけません」とタシが言った。

運転者は口をぼかんと開け、もう何も言わなかった。

翌日、ぼくはドジュエタルの飲酒問題についての調査を開始した。まずは携帯電話を調べ、最後に通話した番号

に発信することで、奴が生前最後に会話をした相手と話すことができた。

ぼくがその相手にドジュエタルが亡くなったことを告げると、彼は、とても信じられない、そんなことはありえないと言った。

でもぼくが警察の者だと知ると、彼もすぐにぼくの言ったことを信じてくれた。

彼は電話で、人生は無常だなどか何とか言っていた。

ぼくは尋ねた。「ドジュエタルはどうしてあなたに会ううとしてたんでしょう？」

「金を借りに来たんだ」と彼は答えた。

「これまで彼に金を貸したことは？」

「いや、ないね。みんな、奴に金を貸すのはドブに金を捨てるようなもんだってわかっていたからね」

「あなたはどうかやって彼と知り合ったんですか？」

「州都で知り合ったんだ。その頃は奴もまだ金を持っていて、周りからの評判も良かった。俺たちは知り合っていて、一緒に飲み歩く仲になった。奴は金払いが良くて、俺たちが一緒に飲み食いする時にはいつも奴が奢ってく

れた。一度も俺たちに払わせたことはなかったよ。そうそう、あの頃は俺も街で小さな商売をやっていたんだけど、それがうまくいかなくなったんでこっちに帰ってきたんだ」

彼はいったん口をつぐんでから、こう続けた。「本当のことを言えば、俺は奴のことをよく知っていたわけじゃなかった。俺たちは一緒に飲み食いするだけの仲間だったんだ」

「彼は何のために金を借りたと言ってましたか？」

「何でもある女に出会ったとかで、その人と結婚したいんだと言ってたな」

「その日、彼は酒を飲んでましたか？」

「飲んでなかったと思う」

「その女性の話を聞いたことは？」

「いや、知らなかった。俺が知っていたのは、金を持っていた頃、奴が街の女と二年ほど付き合っていたってことだけだ。その後、奴が賭けに負けて素寒貧になったら、女には捨てられちゃったんだけど」

「他には何か言っていましたか？」

「俺が金を貸すのを断ると、奴は女の写真を取り出して、『きっとお前は俺が嘘をついていると思ってるんだらう。でも、三宝に誓ってもいい、本当なんだ。俺はこの女と出会ってから寺に行って、もう二度と賭け事はしないで真っ当に暮らしていきますと仏様に誓ったんだ』と言っていたな。女の写真は見たよ。三十過ぎの素朴な雰囲気の中で、ほっぺなんか真っ赤でね、真面目そうな感じだったな。俺が、それじゃあお前がこれまで他の奴らから借りていた金はどうするつもりなんだと尋ねたら、奴は『将来とにかく何とかして返すさ、何か方法はあるはずだ』って答えてたよ」

「いくら貸してくれと？」

「十万元だ。十万元で足りるって言ってた」

ぼくは咳き込んでしまったが、彼はこう続けた。「あの日の奴は嘘をついているように見えなかったよ。それでも奴に貸すわけにはいかなかった。それまでにあいつが重ねてきた借金はすごい額だったからね」

ぼくは煙草に火をつけた。「他に何か思い出せることは？」

「そういや、あの日、奴は着古した黒のスーツ姿で、赤いネクタイまでしていた。ちよつと変な感じだったよ。普段の奴とはちよつと違っていた」

「他には？」

男は少し考えてから、こう言った。「そうだ、そういうばあの日、奴は酒の瓶びんを持っていったっけな」

ぼくは急いで尋ねた。「それで？」

「それだけだよ。金が借りられないとわかると、奴はバイクに乗って去っていったんだ」

「立ち去る前に、その酒を飲んでいたんじゃないですか？」

「いや、立ち去る前には瓶を開けていなかった」

「その時、何か言ってみせませんでしたか？」

男はまた少し考え込み、こう言った。「立ち去る前、奴はリュックからその酒瓶を取り出して、『俺たちは長年の付き合いで、親友だと思っていた。ここに来る前には、お前から金を借りられることになったら一緒にこの酒を飲み干して祝おうと思ってたんだ。だけど、どうやらこの瓶を開ける必要はなさそうだな』と言ってたよ」

「他には？」

男は確信に満ちた口調で、こう言った。「いや、それ以上はもう何も言わなかった。奴は酒瓶をリュックに戻すと、バイクに乗って去って行ったよ」

「医者によると、救急に運び込まれた時、彼は飲酒していたということですが？」

「それは俺にはわからないよ。多分途中であの酒を飲んだんじゃないかな」

「どうしてそう思うんですか？」

「想像しただけだよ。俺が金を貸さなかったから悲しくなって飲んだのかもな。立ち去る時、奴は確かにちよつと沈み込んでいたかもしれない」

調査の最終的な結論として、奴は途中の道でその酒を飲んだのだということになった。

月曜の午後三時、検死報告書が完成した。

交通警察のタシは報告書をぼくに手渡し、こう言った。「完全に単なる交通事故でしたよ。その他の可能性は排除できました。死亡者の自己責任ですね。バイクの

スピードメーターを調べてみたら、規定速度を超えた状態

でトラックに突っ込んで、脳内出血で死亡していました」

ぼくは色々と聞いてみたいことがあるような気がしたが、結局何も聞かなかった。

タシは言った。「火葬の許可はあなたから村の人たちに伝えてくれますか？」

数日後、村長と青年がピックアップトラックに乗ってやってきた。

彼らはぼくと話そうとせず、直接遺体を受け取ろうとしていた。

長期間安置していたために遺体はすっかり硬直していた。それでも彼らは何とか遺体に合掌して座禪を組むような姿勢をとらせることができた。

火葬場の管理人は足の不自由な四十代から五十代くらいの男だった。彼は油の匂いが染みついた服を身にまとい、足を引きずりながらやって来て、軽油で燃やすか、それとも松の木で燃やすかを我々に尋ねた。

「どう違うんだ？」と村長と青年が尋ねた。

「まずは値段の違いだね。軽油なら六百元、松の木なら千円だ」と管理人が答えた。

村長と青年はしばらく相談し、「軽油でお願いします」と言った。

管理人は軽く頷き、足を引きずりながら焼き場の方に向かって行った。

ぼくは管理人を呼びとめ、「松の木にしてくれ。金はぼくが出すから」と言った。

村長と青年がぼくを見つめた。まるでぼくの考えを押し量ろうとしているかのように。

ぼくは彼らに軽く頷いて見せただけで、口を開こうとはしなかった。

ぼくらが遺体を仏塔の形をした火葬炉の中に収めると、管理人が火をつけた。炉の中からパチパチという不思議な音が聞こえてきた。

すぐに、鼻を刺すような匂いが部屋に満ちてきた。ぼくは我慢できなくなって、鼻を手で覆った。

ぼくは村長と青年と一緒に外に出て煙草を吸い始め



た。

ぼくは煙草に火をつけ、村長たちに「あいつが亡くなる前、誰かと結婚するなんて話をしなかったか？」と尋ねた。

青年は呆気に取られた様子で首を横に振った。

村長は少し考えてから、「そういやいつだかの夜、突然俺に電話をかけてきて、ある女と付き合うことになって、結婚するつもりだと言っていたな。女の方もそれを望んでいるってことだった」と言った。

「それから？」

「村に戻って来たいと言っていた。昔住んでいた家を修繕するにはいくらかかるんだって聞いてきた。それから、結婚の時のあれやこれやでどれくらいの金が必要になるかってこともだな。ざっと十万元くらいはかかるだろうって答えたら、まあ大体のところはわかったなんて言ってたよ。俺が、どうしてまた急に戻ってこようと思っただと尋ねたら、もう若くないからそろそろ帰りたいんだって言っていた」

すると青年が「あんな奴が村で大人しく堅実に暮らす

な松の芳香が鼻をくすぐる。それは本当に特別な香りだった。

管理人、村長、そして青年は不思議なものを見るような目でぼくを見つめていた。

ぼくは松の枝を村長に手渡した。彼も枝に鼻を近づけて匂いをかぎ、「こいつは本当にいい香りだな」と言った。

村長は松の枝を青年に手渡し、匂いをかぐように言った。

青年も匂いを確かめ、「ああ」と言った。

管理人はぼくたちを見ながら「松の木はそりゃあいい匂いにするよ。軽油は匂いがきつくてね。俺も慣れないんだ」

ぼくたちはもう何も言わなかった。青年は松の木を管理人に手渡し、管理人はそのまま焼き場の中に入っていた。

それからぼくたち三人は皆それぞれ新しい煙草に火をつけた。誰も何も言おうとしなかった。ぼくたちが煙草を吸っているところからは、焼き場の煙突から黒い煙がもくもくと立ち昇るのが見えた。村長は突如としてお経

なんて無理な話じゃないか。あいつに嫁いでもいいなんて、物好きな女もいたもんだ」と言った。

村長は「わからんよ。そうとも言えないさ。どんなことでも起こりうるのがこの世の中ってもんだ」と言った。

突如、青年がぼくに尋ねた。「あんた、なんでそんなこと聞くんだ？」

「特に大した理由はないよ。ちよつと聞いてみただけだ」とぼくは答えた。

二人はもう何も言わなかったし、ぼくもこれ以上彼らに何も尋ねようとしなかった。

ぼくたち三人が煙草を吸っていると、木の枝を手にした管理人が焼き場にやって来て、「ついさっきこの枝が落ちて来たんだ。こいつも燃やしちゃうよ」とぼくらに告げた。

ぼくは管理人を呼びとめ、彼の手から枝を受け取ってしげしげと見つめた。それは松の木の枝で、見たところまだ乾ききつてはいないようだ。

風は吹いておらず、空気は澱んでいた。とても寒い。

ぼくは松の木を顔に近づけて、香りを確かめた。ほのか

を唱え始めた。

煙草を吸い終えると、村長は青年に「じゃあ俺たちは奴のためにバター灯明をあげに行くことにするか」と言った。

それから二人は火葬に来る遺族のために設けられた小さな仏堂へと入っていった。ぼくはその場に留まり、さらにもう一本煙草を吸った。

三時間ほどで、ドジェタルの遺体は小さな袋一つ分の灰になった。青年は遺灰の袋を手にしたまま、管理人が焼き場の扉を閉めるのを無表情で眺めていた。ぼくは青年が手にしている遺灰の袋を眺めながら、不思議な恍惚感に浸っていた。

村長と青年は、この辺りで遺灰を撒くのにいい場所はあるかと尋ねた。

管理人は火葬場の右手にある小さな丘を指差し、あそこに撒くといいと言った。なんでもその場所はかつてこの地方の有名な化身ラマが加持祈祷を行ったところだという。

「遺灰は村に持ち帰ってもいいんだよね？」とぼくは

言った。

村長は「いや、これは異常死だからな。こういう時、俺たちは遺灰を村に持ち帰ってはいけないことになってるんだ」と言った。

ぼくは吸いさしの煙草を投げ捨て、彼らについて歩き出した。風はほとんど吹いておらず、ぼくたちはゴミの散らばるその丘の上で遺灰を撒いた。細かな遺灰がぼくたちの手に、顔に、髪に、そして服に吹き付け、まわりつついてきた。

遺灰の一部はぼくたちの肺の中にも入っただろうな、と思った。

遺灰を撒き終え、手や顔や髪や服についた灰をはたき落とすと、その灰を吸ってしまったぼくたちは咳き込み始めた。

「ゴホ、ゴホゴホ、ゴホ、ゴホ……」

ぼくたちの咳は短くも力強く、豊かなりズムを刻み続けていた。

## 詩人結社ロラン

レール  
星泉 訳

「なんであたしのことそんなに邪険にするの」

「あんたの何でも知ってるみたいな態度が嫌いなよ」

最初のセリフはのっぽで短髪の女の子で、返事をしたのは背の低い長髪の女の子だ。

その場面はこんなふうだ。背の低い方が公園を飛び出す。のっぽの女の子が後を追いかけてきて、「なんであたしのことそんなに邪険にするの」と叫ぶ。すると、背の低い方が怒りもあらわに振り向いて、「あんたの何でも知ってるみたいな態度が嫌いなよ」と言い返す……と、そこまで来たところで、ぼくのスマホが鳴って、<sup>メッセージ</sup>微信（<sup>微信</sup>）のメッセージの着信を知らせた。

さっきのセリフと場面は「海上にて」という日本映画のワンシーンだ。ぼくがゆったりした雰囲気韓国の映画や日本映画が好きなのを知っている友人が、今日、微信

ペマ・ツェテン

一九六九年、中国青海省海南チベット族自治州ティカ（貴徳県）生まれ。幼少の頃より映画と小説に親しむ。小学校教師を経て西北民族学院（現・西北民族大学）にてチベット学を学び、在学中に小説家としてデビュー。大学卒業後は地方公務員として勤務した後、北京電影学院に入学して映画制作について学ぶ。卒業後、友人たちと会社を立ち上げて数々のチベット映画を作成し、チベット語母語映画の創始者とみなされるに至る。映画監督として著名であるが、チベット語と漢語で小説を執筆するバイリンガル作家でもあり、また翻訳者でもある。短編小説の名手であり、近年では小説家としてもその名が知られるようになっていた。二〇二三年五月、映画撮影中に急死。邦訳作品集として『チベット文学の現在 テイメー・クンデンを探して』（勉誠出版社）、『風船ペマ・ツェテン作品集』（春陽堂書店）がある。本作品は中国の著名な文芸誌『十月』の二〇二三年第一期に掲載された著者の生前最後の小説「松木の清香」の全訳である。

にこの映画のリンクを送ってくれたのだ。ぼくは日が暮れて暗くなってからスマホでその映画を観はじめた。ちようど半ばにさしかかったあたりで着信音が鳴ったので、映画に没入していたぼくはしばし狼狽えた。しかしもしかすると何か重要な知らせかもしれないと思って映画を一時停止し、メッセージを開いた。

それは「希望」と名乗る知らないアカウントからの、「やあ、お前、北京にいるのか？」という漢語のメッセージだった。その人物の友だちリストを確認すると、同郷の幼なじみの一人だとわかった。メッセージの前身よりへたくそな漢語の方が気になって、思わず読み直した。

ぼくは帰省しても一日か二日しか滞在しないのが常だったし、思い返して指折り数えてみても、ここ三年ほどは故郷に帰っていなかった。故郷の人たちは、ティンレー・スバという名前の赤ん坊が産声を山谷にとどろかせて人間界にやってきたことなどとうに忘れてしまったらしい。老人たちが日向ぼっこをしながら思い出話に花を咲かせていると、ロディじいさんがまるで自分の家の山羊や羊のように地元の若者たちを数え上げてみせ、一

人足りないことに気づいた。じいさんがまわりの老人たちに「おや、おかしいな。子どもは六人いたはずなのに」と言う、すぐさまユムツオばあさんが割って入り、いやいや五人ですよ、彼らは今どこにいて何々をしているんですよと説明してみせるので、ロディじいさんと何度となく言い争いになる。二人の口論を見ているうちに、まわりの老人たちもいつの間にか引き戻されて、小さい頃のぼくの印象が呼び覚まされていく格好になった。ああ、正月のときにストーブの中に爆竹を放り込んだあいつか。おお、小鳥用のばちんこでうちのガラス窓を割ったくそガキか。はいはい、客が来るとわざと番犬の鎖を外す悪ガキね……。こうして老人たちはやんちゃな悪ガキの存在をほんやりと思いがすことができたようだが、名前が何だったか、長じて今どこにいるのかなどは、一切思い出せないのだった。

三年前、一度故郷に帰ったぼくは、着いた日の翌朝、畑のあぜ道に立ち、久しぶりに子どもの頃の遊び場を見つめていた。そんなぼくの姿を、山に牛の放牧に向かう村の若い女性たちが見かけたらしく、半日のうちに「う

ちらの村に漢人の子が来てる」という噂がひろがった。いたたまれない気持ちになったぼくは、翌日、たいして物も入っていないリュックを背負って早々に故郷を出た。県都に向かう道中、バスの運転手にまで「漢人の子にしか見えないよ」と言われる始末だった。

ぼくは普段から、ベッドでごろごろしながら寝起きのほんやりした頭で、自分と故郷の関係について考えてきた。故郷にとっては、ぼくはさしずめ峻険な崖から勇敢にも飛び立っていった鷲の子で、戻ってくるはずのない存在だ。ぼくにとって、あの枯れた茨のはびこる狭い谷は、果たして故郷と言えるのだろうか……。

ぼくは故郷と都会の間で白い雲のごとくふわふわと浮かんでいる。故郷も都会も、どちらも自ら進んで腰を落ち着きたい場所じゃない。ぼくは教室にどっしりと根を下ろすことのできる学生でもなく、学校と社会の間でも綿わたのようにふわふわと浮いた存在なのだ。

ぼくの幼なじみの「希望」だって、故郷の人びとと同じでぼくの存在など忘れていたに違いない。暇つぶしに

微信をいじっていたら、たまたまぼくを見かけて、口がよく回るやんちゃな悪ガキだったぼくという幼なじみを目指し出したというのが関の山だろう。それでさっきの「やあ、お前、北京にいるのか？」というメッセージを送ってきたというわけだ。

へたくそながらも漢語でつづられたメッセージに、ぼくは返信もせず、ただ驚いていた。彼の名前はロサン・ツェギエーという。今も憶えているのは、小学六年生のとき、チベット語の先生が彼に名前の綴りを読ませようとしたときのことだ。

「ロサン・ツェギエー、自分の名前の綴りを言えるか？」

「はい先生、できます」

「じゃあ、言ってみろ」

彼は真剣な面持ちで「ロ・タ・ロ、サン・タ・サン、ツェ・タ・ツェ、ギエー・タ・ギエー」とあてずっぽうに唱えてみせた。

六年生のとき、ぼくらのクラスには漢語のできる生徒は一人もいなかったし、ロサン・ツェギエーのようにチベット語の自分の名前の綴りすら言えない生徒も大勢い

チベット式の思考回路を漢語で表すのが難しいんだろうか。しばらく待ったものの、返事はなかった。チャット画面を閉じたとき、ツェリンツオからメッセージが届いているのに気づいた。彼女のメッセージはこうだった。「この間、ロランのコンパに来なかったね。どうしたの？」

そうか、また集いの多い季節になったなと思った。ぼくのような卒業を控えた学生にとっては賑々しくコンパをする時期だ。コンパが好きな学生は多いけれど、ぼくは人が大勢集まった場での喧騒や乱痴気騒ぎといった、何だか自慢大会のような場がすごく嫌いで、この四年間というものは、会費だけ払ってコンパには参加せず、その時間は自分の好きなことをして過ごしていた。

同じクラスの中にも、ぼくがコンパに出ているかどうかなど気に留める学生は誰ひとりいなかった。これはぼ

くにとってまったく好都合なことだった。ツェリンツォはぼくと同じクラスではなかったが、コンパがあるときはいつも前もってメッセージを送ってくれたし、コンパが終わったあとは、なぜ来なかったのかと、ぼくを問い詰めるのが常だった。でもぼくはそんな彼女のことが嫌ではなかった。

ぼくは、コンパのときばかりでなく、普段からクラス担任の教師や同級生にも忘れられた存在だった。大学の連中も、故郷の老人たちと似ているところがある。授業の際に出席をとるのに名前を呼ぶときだけ、教師も学生もはじめてぼくのことを思い出すのだ。彼らがぼくのことを思い出すときには、すでにぼくが授業をサボって抜け出してしまったあとで、教室にぼくの姿はない。授業をサボるのはぼくの習慣になっていて、次第に先生にとっても、出席をとるときにぼくがいないのが当たり前になった。そのうち教師によっては出席をとるときにぼくの名前を呼ぶこともなくなっていた。これも当たり前になってしまい、教師も学生もみんなティンレー・スパという名前の学生のことを早々に忘れたのである。

会をしようよ」というメッセージが届いた。

ぼくはメッセージを読むやスマホの画面を閉じて、枕の下につっこんだ。そのとき、ぼくのベッドの隅に干してある誰のものかもわからない靴下から、洗剤と足の臭いの入り混じった変な臭いが漂ってきた。思わず吐き気がして、棺桶のようなベッドを一刻も飛び出したくなった。

ぼくは身動きしやすいジャージに着替え、シャワー室に行って鏡を見た。汚れた鏡にぼんやりと誰かの姿が映った。顔をのぞき込むと、そいつはにこりとしてみせた。そいつに「顔を洗う必要なし。イケてる」と言われた気がしたので、洗顔もせずに寮を出た。

外に出ると、大雨が降り出しそうな空模様だった。その兆候ともいえるひんやりとした風に吹かれると、心が落ち着いた。体内に溜まっていた澱んだ空気を吐き出し、潤いのある新鮮な空気を思い切り吸った。さっきの靴下の臭いをぼくの記憶から追い出すと、さて、今日はどこに行くんだっけと考えた。そうだ、ツェリンツォを探しに行くんだった。探すといっても至極簡単な話で、

コンパが嫌いなぼくも、かつて「詩人結社ロラン」のメンバーだった頃は、ロランのコンパには欠かさず出席していた。ある日、ぼくがコンパに遅刻したので、他のメンバーに「ビール一本を一気に飲み干せ」と言われた。応じたぼくは雪花ビールの瓶を手にとると、無理やり一気に飲み干した。涙をぼろぼろこぼすぼくを見たメンバーは、ざまを見ろとばかりに腹を抱えて笑った。

ツェリンツォのメッセージにもあったロランとは、チベット語で「歩く屍」という意味で、「詩人結社ロラン」というのは大学一年のときにぼくと舞踊学部の張仄昂ジャズメケンがつくった詩のサークルの名前だ。大学一年から三年までの間、女子六人と男子五人の合計十一人のメンバーで活動していた。大学三年になったとき、ぼくと張仄昂がサークルを脱退してからは、メンバーが何人いるのかもわからない。

脱退後も、コンパがあるときはいつもツェリンツォが連絡をくれた。今日も彼女はぼくが返信してこないのをわかっていたようで、続けて「三日後には卒業して故郷に帰ることになるから、今日は二人でロランを振り返る

《七月七日》というバーに行けば、彼女はきっと赤ワインを飲みながらぼくを待っているだろう。

《七月七日》というバーは、ぼくらの学校の北側にあり、入り口に《七月七日晴れ》という看板掲げた店だ。ここはぼくらロランの拠点で、コンパをするときはいつでもここだった。ツェリンツォが「二人でロランを振り返ろうよ」と言ってきたわけだから、集まる場所がそこでないわけがない。

ぼくは大学の西門を出て、北に向かう通りを歩いていった。道の両側には食事を楽しむ人びとでこった返している。その食欲旺盛なさまを見ると、排泄という行為がなければ、世界のあらゆるものが人間の胃袋の中に呑み込まれて消えていくんじゃないかと思えた。そんなことを考えながら《七月七日》に近づいていくうちに、喧騒も収まっていった。

店の周辺はしんと静まり返っていた。ガラス扉を開けて中に入ると、マスターがぼくを迎えてくれ、「ずいぶん久しぶりじゃないか」と言った。ぼくも「ですね。ロランを脱退して以来だから、もう一年くらい来てないか



な」と答えて、話を続けようとすると、マスターが「さあさあ、無駄口をきいてる場合じゃないよ。ツェリンツオがお待ちかねだ」と言ってツェリンツオの待つテーブルにぼくを案内した。通路にのびるマスターの影を踏みながらその背中を見て、一年見ないうちに年を取ったなと思った。

ぼくがツェリンツオのいるテーブルに近づくと、彼女は手にしていたグラスをテーブルに置き、いつものように笑顔で「昨日はどうしてロランのコンパに来なかったのよ」と言った。

ぼくはそれには答えずに、彼女と向い合せに座った。テーブルの上のグラスの中身をよく見ると、泡立てたコーヒーだった。「ねえ、今日は赤ワインを飲まないの」と訊くと、「今日は思い出を振り返らなきゃならないからよ。だって赤ワインを飲んだら思い出に霞がかかって美化しちゃうかもしれないし、大事なことを思い出すのにさしさわりがあるもの」と言うのだった。彼女がコーヒーの表面に息を吹きかけると泡がグラスの片側に吹き寄せられた。そして美味しそうにコーヒーを口にふくむ

子を見物していた。ぼくがカラフルなスポットライトが交錯するステージを下りて、彼女のところへ行くと、彼女は微笑んで「どうも。ツェリンツオっていいです。コンピュータ学部です」とチベット語で自己紹介をしてきたので、ぼくは面食らった。

「チベット人なの？」ぼくはこう尋ねてから、彼女が返事をする前に「ああ、よかった。これでうちのサークル、チベット人が二人になった」とひとりごちた。彼女はたばこを一本取り出してぼくにくれた。緑色のライトのもとでそのたばこをよく見ると、××というブランドの女性用のたばこだったので「これは吸えないよ。女性用のたばこって男が吸うと体に悪いっていうだろ」と言った。すると彼女は吹き出した。ひとしきり笑ったあと、「ねえ、まだ二十歳そこそこのくせにアレの衰えが怖いわけ？」と言って、たばこをもう一本取り出して、ライターから赤い糸を爪で喜んで引き抜くと、ぼくにくれた。ぼくはさっきのたばこを彼女に返した。

ぼくたちは同じテーブルでたばこをふかし、赤ワインを飲んだ。

と、彼女の唇に泡がついた。

「さてと、思い出話を始めようか」彼女はぼくにインタビューをする記者のように、ぼくが何か切り出すのを待った。ぼくが「どこから話したらいいのやら」という顔で彼女を見ると、彼女は「あたしたちが初めて出会ったときのことを話してよ」と言った。ちょうどそのときマスターがコーヒーの入った大きなグラスをぼくのところに置いた。ぼくはグラスを揺らしてから一口すすろうとしたが、表面の泡しか口に入ってこなかった。その泡を見ているうちに、それがぼくの脳内に忍び込んで夕靄のように立ち込めた。

ぼくがツェリンツオを初めて見たのはロランのコンパのときだった。その日ぼくらはこのバーのステージに上がって踊っていた。張仄昂ジャンズアーンがぼくのそばにやってきて、「今日、新しいメンバーが来てるんだ。あっちに行って相手をしてやってくれよ」と言いながら唇を突き出した先にいたのが彼女だった。

彼女はたばこをふかしながら、踊り狂うぼくたちの様

しばらくして、ぼくがひとり言のように「あいつらのダンス、ダサくね？」と言うと、彼女も「遠くから見るとダンスっぽいけど、そばで見ると病人の群れが飛び跳ねてるみたい」と言ったので二人とも笑った。

すると張仄昂がその群れから抜け出し、つかつかとやって来て、ぼくのグラスの赤ワインを飲み干すと、「おまえら何話してたんだよ」と言った。

ぼくが「秘密さ」と言うと、張仄昂は「チベット人って変なの」とすねた。

あれから三年経った今、ぼくはコーヒーを飲んでるツェリンツオの前に、初めて出会ったときの思い出を語った。「こうやって振り返ってみるとさ、あたしたちの出会いもまるで昨日の晩の出来事みたいね」彼女はそう言うと、猫がミルクを飲むみたいにコーヒーをすすった。

今ぼくたちがいる《七月七日》というバーが三年前の音楽の鳴り響くバーと同じだと言っても誰も信じないだろう。今はだだっ広いバーに音楽ひとつ流れていない。

ぼくら以外の張仄昂テンヤスズキをはじめとする九人のメンバーの影も形もない。

ツェリンツォは「索沫達スオモトダのカメラがなくならなければ、あたしたちの思い出ももっと鮮明だったろうね」と言った。

ロランのメンバーだった索沫達は芸術学部所属の女の子だった。彼女は髪を柳の木のように揺らし、いつも首から小さなカメラをかけていた。彼女は自分の気に入ったものを見つけるとすぐにカメラを構えて写真を撮っていた。

彼女はロランの中で唯一の黒髪メンバーだった。ツェリンツォは金髪、ぼくはちよつとした赤髪、張仄昂は銀髪、他には青く染めているメンバーもいた。そんなわけである日ぼくらロランのメンバーが自転車に乗って北京の道路を走っていたとき、三人の警官に呼び止められた。

「きみたち職業は？」警官の一人がぼくたちに止まるように指示してこう尋ねた。

「詩人です」ぼくらのうちの誰かが返事をした。

それを聞いた三人の警官はははと笑った。笑いが収

まったところで最初に話しかけてきた警官が言った。「詩人は何度も見たことがあるよ。だいたい共通する特徴があるよな。髭が長くて、腹が出っ張ってて、眼鏡をかけてて、手には本を持ってる。でもきみたちは違うよな。頭のとっぺんから足の先まで、まるでちんぴらじゃないか」

その頃の索沫達はロランのメンバーの活動記録になるいい写真を撮たくさん撮っていた。彼女はそれを現像してアルバムを作ったらみんなに記念に配るねと言っていた。でもそれはかなわなかった。ある日ぼくらは自転車に乗って北京の郊外の農村に繰り出した。彼女はいつもと違ってよくおしゃべりをして、まるで子どものようにふざけ、春の花や遠くの山並みを撮影することもなかった。午後、帰路についたとき、彼女は急に泣き出した。どうしたのか尋ねると、首に手をやりながら「カメラがない」と言ってまた泣いた。確かに彼女の首からぶらさがるのが定位置になっていた小さなカメラがない。

「カメラ、どこでなくしたか思い出せる？」

張仄昂が尋ねると、彼女は「今日は一日じゅうカメラ

のこと忘れてた」と言った。彼女の悲しそうな顔を茫然として見つめているぼくたちにもなすすべがなかった。

ぼくは小さい頃から他人をなぐさめたことがない。そもそもどうやってなぐさめたらいいかもわからなかったが、その日ぼくは索沫達のそばに寄り添って、彼女の口に入っていた髪の毛を取ってやり、涙に濡れた頬に触れてやると、そのうち彼女も泣き止んだ。

そうか。もし索沫達のカメラがなくなつてなければ《七月七日》でぼくとツェリンツォが初めて出会ったときの様子が写真に収められていたはずだ。あの日、バーのステージにいた彼女はカメラをこちらに向けて、白い煙越しにツェリンツォとぼくを写真に収めたのだ。写真の中でツェリンツォは手で口元を覆って笑っており、ぼくは口をあけて笑っていた。たばこの煙に混じるグリー

ンのライトは、ぼくら二人の笑い声よろしくバーの中にひろがっている。ライトと紫煙の中、ステージを下りてぼくら二人に近づいてくる男がいる。その人物は張仄昂に違いない。そうか、ツェリンツォとぼくが笑っているのは、やっぱりバーの中で踊り狂っている彼らを皮肉る

彼女の言葉のせいだったんだ。索沫達がカメラをなくす前、ぼくは彼女の小さなカメラに収まっている写真を何度も見せてもらった。ぼくは索沫達に「きみの写真はさ、ぼくらロランの存在証明そのものだよな」と言ったことがあったけれども、彼女はにこりとしただけで何も言わなかった。もし何か言えばそれは自分らしくないとしてもいわんばかりだった。

今はもうその写真はツェリンツォとぼくの思い出の中にしかなく、この世から消え失せてしまったし、索沫達も芸術学部を除籍になった。ぼくがそのことを知ったのは、彼女が大学を去ってから二か月後のことだった。彼女が大学を去る前になぐさめの言葉一つかけてやれなかったことをぼくは悔やんだ。

ツェリンツォとぼくがロランの思い出を語りながらこのあたりまで来たところで、会話が途絶えた。彼女がグラスにキスでもするかのような感じでコーヒーを口にくんだとき、ぼくはバーの壁に目をやった。かつては白くてきれいだった壁は今や色とりどりだ。たくさんの絵

や文字が壁の色味を別の表情に変えている。壁面の絵はペニスとヴァギナだらけで、男と女の生々しいからみが描かれていた。ぼくは絵を直視できずに顔をそむけた。ツェリンツオはコーヒーを飲み終えると、壁面の絵をためつがめつしていた。彼女は真面目なのかふざけているのかわからない口ぶりで絵の印象を語り始めた。

「この絵を描いた人たち、芸術的なセンスが際立ってるよね」

それから記者のような態度を崩さずに「ロランのメンバー十一人の中で一番好きなのは誰？」と尋ねた。

ぼくはなんのためらいもなく「ぼくが一番好きなのは張仄昂ジャン・アング」と言うと、彼女の顔色はさっと変わったけれども「そうよね。彼は私たちロランの代表だもの。メンバーはみんな好きに決まってる」と言った。

ぼくたちのロランの思い出の話題は張仄昂に移っていった。コーヒーの香りが漂うバーで張仄昂について語り出したら、ぼくたち二人の頭はすっかり冴えてきた。

ある日、大学の片隅で読書に没頭していたときのこと

は明らかで、そいつの話題は神様仏様の教えよりも、むしろ魔物に関するものが多かった。「村でも町でも、経堂でも仏堂でも、魔物のいない場所は一つとしてないって、釈迦牟尼が言ってるだろ。だから俺たちの大学の教室も寮も食堂も魔物だらけに違いないんだよ」などと言い出したので、ぼくはぞっとして鳥肌が立った。さらにそいつは「俺たち人間の目は血と肉からできてるせいで、この世の一パーセントも見えてないんだぜ」と言った。

長ったらしい宗教哲学談義が終わると、そいつはようやく自己紹介をした。「俺は張仄昂っていうんだ。所属は舞踊学部」と言った。

「ぼくはティンレー・スバ。チベット学部の学生だよ」と言うと、そいつは「前に俺、チベット学部の学生に宗教の話をしたことがあるんだけど、話し終わる前にやつはぶち切れてさ。ぼくは追い払われちゃったよ。きみはなんで俺を追い払わないの？」と尋ねた。

ぼくは「そいつはおつむが弱いか視野が狭いんだろ」と言った。

だった。背の高い、髪に銀のメッシュを入れた学生がぼくに近づいてきて、「やあ、ちよつといいかい。宗教について語り合わないか」と声をかけてきた。

ぼくらの大学には、キリスト教や仏教の布教活動をする学生が大勢いた。だから、柳の木陰に腰を下ろしていたぼくは、どうせそういう連中の一人だろうと思つて目をぱちくりさせながら、陽の光を浴びて立つその男を見やつた。そいつの銀のメッシュはきらきらと光を放ち、普通の学生とはちよつと違う印象を受けた。ぼくはベンチに置いていたかばんをどかして自分の膝に抱えると、隣に座れよと言つた。

そいつはキリスト教の教義を立て板に水のごとく語つたかと思うと、仏陀の教えについても語り出した。おもむろに「もし仏陀の教えが誤りだったら、俺たち信徒はどうなるんだろうか」という質問を投げかけてきて、返答に窮したのを今でも憶えている。もつとも、しつこく食い下がっては来ず、「もしかしたら俺のこの問いかけも、大間違いだったりするのかもしれない」とつぶやいた。宗教について語りたがる他の学生たちとの違い

そいつは「じゃあ俺たちこれから友だちだ。スバって呼んでもいい？」と言つた。

「もちろん」と答えた。

そういや、子どもの頃、じいちゃんにスバと呼ばれてたっけ。張仄昂にスバと呼ばれるたびにぼくはあつたかい気持ちになった。同じ学部の同級生たちにはティンレーと呼ばれている。ぼくは連中に「ティンレーってのはぼくの名前じゃなくて、卵の殻より薄い身分証の名前にすぎないんだ」と何度も説明したけれど、連中はティンレー、ティンレーとしか呼んでくれなかった。それも物に名前をつけるみたいに、他の学生と間違えないように区別するためだけに呼んでいるだけで、連中にとつては「ティンレー」だろうが「スバ」だろうが「ティンレー・スバ」だろうがどうでもいいのだった。だからぼくが「ティンレー・スバといます」といくら自己紹介したところで無駄なのだ。

張仄昂はぼくに向かって「なあ、スバ」と呼びかけると、「俺さ、詩のサークルをつくらうと思ってるんだよね。手を貸してくれないか」と切り出した。

「ぼく、詩なんて書いたことないけど」

「みんな教室で試験にひいこら言ってるのに、涼しい顔して柳の木陰で小説を読んでるくらいだから、詩人の条件を完全にクリアしてるぜ」

「じゃあ手伝うよ。でも、本気なの？」ぼくがこう言うと、彼はからりとした声で笑って「ああ、もちろん」と言った。

ぼくたち二人は一週間ほど学内を回って詩人を探した。一週間後には八人の詩人が集まった。ぼくらは十人になった詩人のグループに「詩人結社ロラン」と名前をつけた。ぼくらは週に二回集まることにし、金曜日の夜は『七月七日』に集まって赤ワインを飲んだり踊ったりした。日曜日の昼は自転車に乗って北京を縦横無尽に走り回った。その後、とある金曜日の夜にロランに入ってきたツェリンツォを加えてメンバーは十一人になった。

ロランの代表となった張仄<sup>ジャズ</sup>昂<sup>ソング</sup>は、ぼくが初めて出会った詩人だ。しかも彼はマイケル・ジャクソンがロラン<sup>レ</sup>になって踊る「スリラー」のMVみたいなダンスがすごくうまかった。彼はいつも「このダンスを踊るときはさ、

とはある？」と訊いた。すると彼は「俺、かばんと教科書と試験問題をぜんぶ火葬場に持ってって灰にしたい」と言って、ペットボトルをぐびぐびと一気に飲み干した。

その日の午後、ぼくたちはインターネットで北京市内の火葬場の電話番号を住所を調べてスマホにメモすると、火葬場探しの旅に出た。

普段は死と無縁に見えるこの大都会だが、火葬場探しは実に簡単だった。ぼくらはバスを降りて、スマホにメモした十箇所ほどの中から最初のところに行ってみた。そこはずいぶんと大きな火葬場だった。それは北京によくあるような建物で、その辺のビルとよく似ていた。漂う空気にも遺体を焼くときの嫌な臭いはまったくなく、空に白い煙が立ち上っているわけでもない。

火葬場の中庭に入ると、この平凡な建物は人間界と地獄の間にもうけられた関所なんだと実感した。この関所では、ぼくら人間が血肉からできた肉体を領収書よろしく炎に検めさせた後、この世に白い煙すら上げることもできずに地獄という穴に落ちていくのだ。

火葬場の中には、頭のないもの、手のないもの、足の

俺の血肉が自然に詩を表現することができるから、文字なんていう言葉の干物にすぎたって詩を書く必要はないんだ」と冗談まじりに言った。

彼はぼくにこのダンスを教えてやるよとよく言っていた。ちゃんと教えてもらったのは出会って二年後のことだった。しかし、そのダンスの手ほどきが始まって十分ほど過ぎたとき、彼の電話が鳴った。担任の教師からの「急いで研究室に来るように」という呼び出しの電話だった。その翌日、彼が舞踊学部を除籍になったという知らせが届いた。退学処分になった理由は、欠席が多すぎることに、ある日クラスの重要な会議が開かれた際に酒に酔った状態で出席したことの二つだったという。

退学処分の話聞いて、ぼくがなぐさめの言葉をかけようとすると、彼は「この日をずっと待ってたんだ」と言っていた。そういうわけでぼくはロラン<sup>レ</sup>のダンスを憶えることはかなわず、血肉で詩を生み出すという言語を超越した体験もできずじまいだった。

彼が退学処分を受けた日、水が半分しか残っていないペットボトルを手渡し、「お別れの前に何かやりたいこ

ないものなどたくさんさんの遺体が整然と並べられていた。

こんなにたくさんさんの遺体が並んでいるのを見て、ぼくは北京で戦争か地震でも起きたんじゃないかと思った。遺体のまわりには白衣を来た医師と黒衣を着た焼却担当者、さらに警官がばたばた動き回っている。この三者は死とかかわる最も重大な三つの仕事なんだとそのときぼくは初めて理解した。黒衣の人びとは血まみれの遺体を左側の扉から中に運び込んで行く。右側の扉からは、目の落ちくぼんだ人びとが、遺灰の詰め込まれた骨壺を一つずつ抱えて出てくる。彼らは中庭に出ると「灰や煙の痕跡すら現世の空に残すこともかなわずに、故人は静かにこの世を去っていったのか」とでも言いたげな様子で、天を仰いでいた。今日の空は青く澄んでいる。飛行機雲すら見えないほどに。

いちどきにたくさんさんの遺体を見たので頭がくらくらしてきた。そのとき黒衣の男がぼくたちの方にやってきて、「おい、二人とも、遺体を火葬するなら登録を済ませてくれ」といってぼくらに書類を手渡した。

張仄<sup>ジャズ</sup>昂<sup>ソング</sup>は「あ、いや、ぼくたちはかばんと教科書と試



験問題を遺体として火葬したいんです。代金は倍支払うんで」と言った。するとその男は怒って、「なんだそりゃ、帰れ帰れ」と追い払う仕事をしたが、ぼくらがまだ突っ立っているので、「あのなあ、こういう遺体は警察でも名前がわからないんだぞ。この世に名前も残すことができないままに灰になっていくんだ」と、名もない遺体の方を指して言った。何匹かの蠅が遺体の眼窩に溜まった血液混じりの体液を吸っていた。その男は名前のない遺体を示しながら再びこう言った。「二人ともこの書類に氏名不明、住所不明、死因不明と書くがいい。そうしたら、あんたら二人とも、かばんの中の教科書だの試験問題だのと一緒に焼いてやるよ。そうしたら誰にもあんたらがどこへ消えたかわからないし、誰にも罪はない。そうすりゃ一石二鳥じゃないか」

「死んでなお試験問題の灰と一緒にたにされるなんて、ごめんこうむりたいよ。まだ死にたくないし、将来いつたくなるのか知りたいし」

ぼくらがこんなふうにくまかわして、彼の完璧な計画には乗らなかったため、黒衣の男は「おやおや、二人

とも取引ってもんを知らないんだなあ」と言って残念そうにしてみせた。

上長とおぼしき人物がぼくらとしゃべっている黒衣の男に「おい、いつまでしゃべってるんだ。手を貸せ」と呼ぶのでぼくらもその場を離れた。

ぼくたちは火葬場の近くの公園に行つて、花がたくさん咲いているところに大きな穴を掘ると、その中にかばんを埋めた。

張仄ジャンズンが自分のかばんと試験問題を埋めたところにおしっこをひっかけようとしたので、ぼくが「やめとけ。

おまえのおしっこは熱すぎてこのきれいな花がしおれちまうよ」と言うと、彼も下るそうとしたズボンを引っ張り上げた。

その日の晩、ぼくらはバスに乗って大学に帰った。途中ぼくが「さよならの前に二人で『七月七日』に行つて一杯やりながらロランの思い出を語り合おうよ」と言っただけでも、彼は投げやりな態度で「もうそんなことしなくていいさ」と言うので、ぼくらはそれぞれの寮に戻った。

「おい、スバ、起きてくれ」翌朝、誰かがぼくを起こす声がした。寝ぼけまなこで声のする方を見ると、張仄昂だった。

「早く起きてくれ。今日故郷こきやうに帰るんだ。見送りに来てくれよ」

その声を耳にしたぼくは、夢でも見ているのか、彼に冗談でも言われているのかと思いつながら、体を起こして着替え始めた。

洗顔する暇も、朝食を食べる暇もなかった。ぼくらは大学をばたばたと出て、大通りの十字路に立つてタクシーを待った。やっと止まったタクシーに二人で乗り込み、ふと隣を見ると彼はリュックも背負っていないので「持ち物はどうしたんだよ」と訊いた。

すると彼は漢語で「俺にや何もないさ」と言った。そのひと言には、人の心を動かす力強さがあった。ぼくは黒いサングラスの歌手がそのフレーズをメロディーに乗せて歌っているのを聴いたことがある。その歌手はさまざまな表情を浮かべながら「俺には何もない」と歌っていた(2)。でも、彼のような有名な歌手が俺には何もな

いと歌ったところで誰の心に届くというのだろう。何ひとつないというのはまさに張仄昂のような人間のことだろう。何しろ彼はリュックひとつ背負っていないのだから。

タクシーの中でぼくはずっと眠りこけていた。目が覚めたときはまだ北京市内のどこかを走っていた。そのとき朝日が窓から差し込んでぼくの顔にあたり、道端の柳の木々がふいにぼくの顔に影を落としたり消えたりしていた。目が覚めても目の前にひろがっているものはすべて夢みたいに思えたので、ぼくは張仄昂に「ぼくたちどこに向かっているの？」と訊いた。

「空港だよ」彼の言葉を聞いたとき、ぼくはぼうっとしていた。夢の中で空港に着いたのか、はたまた目が覚めたら空港に着いたのか、よくわからないほどだったが、いずれにせよぼくたちは空港に到着した。

「もうここでもいいよ。このまま帰ればいいから」張仄昂は何度かこう言っただけでも、ぼくは彼についていった。

「何だよ、一緒に来るってのかい？ 来るんなら俺の故郷に連れてってやるけど」彼がこう言ったとき、ぼくた

ちはちようと出発ゲートに着いた。さすがについていくわけにもいかず、ぼくはその場に立ち尽くしていた。

彼は茫然としているぼくを抱きしめてこう言った。「俺は詩のせいで大学を追い出された。お前も詩から足を洗わないと、いつか社会からつまみ出されちゃうかも」と言った。ぼくは真っ赤な血の涙がこみ上げてくるかと思うほど悲しかったけれども、涙は一滴もこぼれなかったし、言葉も何ひとつ出てこなかった。

ぼくが体を少し離すと、彼もこわばった笑みを浮かべた。そして踵を返して出発ゲートの中に入って行き、こつた返す人混みに溶け込んで見えなくなった。

彼と別れたあとに空を見上げると、たくさんの飛行機が飛んでいくのが見えた。しかし彼の乗った飛行機がどれなのかはさっぱりわからなかった。

タクシーに乗って大学に帰るとき、ぼくの脳内も目の前のあらゆる物も、まっさらな紙になってしまったように思えた。タクシーは右に揺れたり左に揺れたりしながら人びとの間を縫って進んでいく。ああ、早く寢床に倒れ込んでしまいたい。車のクラクションと人間界の塵芥

に包まれて、ぼくはまたしても眠りに落ちていった。

しばらくすると、運転手がぼくを起こして「着いたよ。降りるんだろ」と呼びかけた。

ぼくが寝ぼけまなこのまま「え、どこに？」と言うと、運転手は「中央民族大学の西門だよ」と言った。目の前がまたしても真っ白になったぼくの口から出たのは「中央民族大学……えっと……何のことでしたっけ」という言葉だった。それを聞いた運転手は車が少し揺れるほど豪快に笑った。

百元札を渡すと、運転手はお釣りを探しながら「ずいぶん長いこと泣いてたな」と言っただけでも、ぼくの頭の中はまっさらな紙と化しており、夢はかけらも思い出せなかった。

《七月七日》のロランを思い出す会の話題がここまで来たところで、ツェリンツォが突然泣き出した。張仄昂ジャンズイアンの話をしすぎたせいだろうか。「ツェリンツォ、泣くなよ」と言って、なぐさめの言葉でもかけようと思った。

「二日後にはこの大学ともお別れなんだね」彼女のすすの血潮はぼくらの骨の髄と心臓を駆けめぐっていた。「酔っ払って自分を見失ったら詩人じゃない」これは張仄昂が言った言葉で、ロランに対する戒めの言葉でもあり、ぼくたちを総括する言葉でもあった。集まるたびにぼくらは酔っ払うけれども、メンバーの間で喧嘩になったり関係が悪くなったりしたことはない。少しエキセントリックな行動といえ、狂ったように踊りまくることと、誰もいない街路を肩を組んで軍歌を歌うことくらいだった。

ぼくはテーブルの上のグラスを手にとってコーヒーを飲もうとしたけれどももう空っぽだったので、グラスをテーブルに戻した。ぼくは乾いた唇を軽くなめてから、ツェリンツォに「ぼくのこと一番印象に残ってることは何？」と尋ねた。すると彼女は「一番印象に残ってるのは、そりゃあ、ラサ到着間近のとき、列車の中で起きたできごとが決まってるわ」と言うと、彼女もぼくと同じように泡しか残っていないグラスをもって飲むそぶりをした。

り泣きは大きくなった。なんだ、張仄昂を思い出して泣いたのかと思ったら、ただ自分が悲しくて泣いていたんじゃないか。ぼくはちよっと腹が立って、「それじゃあもう一年この大学にいればいいさ」と意地悪を言った。彼女は泣くのをやめて、「なによ、人でなし」と言ってぼくのほっぺたを爪で引っ掻いた。

ロランのメンバーがこの店に入り浸るようになって二年あまりが経った頃のある夜、酒に酔ったメンバーが「こんなにしょっちゅう集まってるのに詩の一篇も書いてないし、詩について議論したこともないね」と言った。するとメンバーはみんな酔っ払っていたせいか、ともかくこの話題が出たとき笑わない者は一人としていなかった。ぼくも笑って言った。「ロランという詩のサークルが卓越している理由はまさにそれさ」

その晩、三時まで男子五人、女子六人からなるロランのメンバー十一人は、人影も車通りもない北京の街路をそぞろ歩きながら、軍歌を歌った。敵がいるわけではないし、ぼくらの進路は闇に包まれていたけれども、青春

ラサ到着間近のできごとというのは、ぼくも憶えている。夏休みに帰省する彼女と一緒に、二人で青蔵鉄道に乗ってラサに行くことにしたのだ。調子にのったぼくらは、彼女が父親へのお土産にと買った赤ワインを一本空けてしまった。夜が明けてくると、近くの人々がラサ到着まであと一時間だと言い始めた。ぼくはラサ出身のツェリンツォに本当なのかと訊くと、彼女も「そうね、あと一時間くらいだね」と言った。

そうこうするうちに頭がずきずき痛みはじめた。ぼくが頭をずつとさすっているのを見たツェリンツォが「どうしたの」と聞いた。

「高山病みたいだな。頭痛がする」

「高山病のわけないでしょ。昨日の晩、父さんのワインを飲みすぎたからよ」と言った。

昨晩の酒盛りのせいで、二人ともちよつと酔いが残っているみたいだった。あるいは二人とも酒のせいでよく眠れなかったのかもしれない。朝になって照明が消えたので、車内は薄暗く感じられた。そのせいか二日酔いの

くらい口づけしていたのかも定かではない。

トンネルの前方に光が見えたとき、ぼくたちは示し合わせたかのように唇を離し、何事もなかったかのように元通りに座った。

汽車がトンネルを出ると、周囲の人びとはぼくらの口づけ劇に気づいていないようだったので、ぼくは安心して、彼女に「キスしたとき目を閉じてた?」と訊いた。彼女が「閉じてなかった」と言ったとき、あたりはすっかり明るくなっていった。彼女の唇は濡れてつやつやしていた。これがぼくらの初めて交わした口づけであり、最後の口づけでもあった。その後ぼくたちはあの口づけの話を封印してしまったけれども、今、《七月七日》でラサ行きの列車の中の話になり、二人とも忘れられずにいたことがわかった。

あの日、ぼくがまた「頭が痛くなってきた」とこぼしたら、彼女は「父さんのワインを飲みすぎたせいでしょう。ただの二日酔いよ」と言い放った。さつきキスをしたばかりのひんやりと濡れた唇からこんな乱暴な言葉が飛び出してきたことに、ぼくは驚いたのだった。

せいか、ぼくらの意識はもうろうとしていた。

ぼんやりと薄暗い中にいるうちに、ぼくの頭痛も痛いんだかなんだかよくわからなくなった。そのかわりに頭の中で妄想がぐるぐると回り出した。ぼくはぶしつけに「ねえ、キスしたことある?」と尋ねた。すると彼女はぼくのこの質問がごくあたりまえのことみたいに受け止めて、「ないよ」と答えた。ぼくは彼女の顔をのぞき込んだけれど、照明が消えた上に夜も明けきっていないのでよく見えなかった。

彼女もぼくに「したことあるの?」と訊いてきたので「ないよ」と答えた。

しばらく沈黙が続いたあと、彼女はまた何か思いついたかのように「キスの味ってどんなのかな」と訊いてきたので、ぼくは「知るかよ。したことないって言ったでろ」と言い返したら、ちよつと列車は真っ暗なトンネルに入ってしまった。列車の中はすっかり真っ暗になった。

唇をわざと彼女の方に近づけると、彼女のひんやりした唇に触れた。

トンネルの長さがよくわからないので、ぼくらがどれくらい近づくにつれ、朝日に照らされた雲や霞が炎と違って広大な草原に燃えひろがっていくかのようだった。乗客たちはその様子を写真に収めようとスマホを向けて写真を撮りはじめたが、汽車の揺れで手ぶれが気になるのか、被写体が動くのできれいな写真が撮れないのか、そのうち諦めて雲や霞を見つめたまま茫然としていた。ぼくはぼくで、朝なんてものに実体は何もないというのに、どうしてこんなふうに雲だの霞だのが出てくるんだらうなどと考えていた。ちよつどそのとき、ぼくの右隣にいたツェリンツォが「詩を書いてよ」と言うのが聞こえた。見ると彼女は朝焼けの雲と霞を指さしていた。ぼくは窓を開けて二日酔いのせいで口の中にたまったつばや痰を雲と霞に向かって吐き出した。その瞬間、窓から冷たい風がびゅうと吹き込んできて、つばと痰がぼくとツェリンツォの顔にかかった。

ツェリンツォの顔をティッシュで拭いてやったちよつどそのとき、誰かが大きな声で「ラサに着いたぞ!」と叫んだので、思わずティッシュを落としてしまった。ぼくは窓の外に突然現れた高原の都会を目の当たりにしな

から、歴史の本で見たことのあるポタラ宮という仏殿のようでありながら宮殿のようでもある巨大な建造物を探したけれども、ポタラ宮は見あたらなかった。

「ポタラ宮はどこ？」と訊いたそのとき、チャクボリの向こう側に白いポタラ宮が姿を現した。でも、どんな祈願をしたらいいものやら、どんな経文を口にしたらいいものやら、思いもつかなかったので、ぼうっとしているしかなかった。

ぼくら二人は列車を降りた。そのとき彼女がぼくに赤くて大きな帽子をかぶせてきたのを今でもはっきりと憶えている。

《七月七日》で、ツェリンツォとぼくは列車の中で赤ワインを飲んだ晩のことはたくさん話した。でも、あの朝のひんやりとした口づけのことは二人とも話題にしなかった。

夜の三時になり、閉店時間になったのでぼくらも店を出ることにした。マスターはパソコンの前で眠りこけており、むにやむにやと頭の中にあると思しきさまざま

な計画について寝言を言っていた。ぼくは百元札をマスターとパソコンの間にはさんだ。二人とも彼に別れを告げ、店の外に出た。

ぼくはロランを脱退して以来、夜に北京の街をぶらつくこともなくなった。かつてはメンバーで街にくりだしては軍歌を歌ったりしたものだった。ぼくらの歌う軍歌は軍歌らしくない、嗚咽や咆哮のようなものだったけれど、ぼくらは血潮をたぎらせながら、青春を爆発させていたのだった。あの頃のぼくら十一人にとって、別離とは無縁で、その二文字を思い浮かべることすらなかった。

今、暗闇の中を歩いているぼくとツェリンツォにとっても、かつてはそうだったのだ。煙霧と暗闇の混ざったような景色を眺めているうちに、ぼくはふとあの軍歌を歌いたくなった。でも歌い出しすら思い出せなかった。ぼくの右側を歩いているツェリンツォからはコーヒーの香りがしたけれど、酒に酔った人みたいにぼんやりと物思いにふけているので、ぼくは話しかけていいかどうかともわからなかった。

た。

ある日の休み時間、ぼくはトマトというあだ名で呼ばれている教師に呼ばれた。

何の用かと思いながら教卓のところまで行くと、「今学期授業を何回サボった」と訊かれた。そいつの声はトマトの赤い汁みたいにぼくの方に飛び散ってきて、ぼくの顔も服もびしょ濡れにされたような気がした。

「十回ほどです」

「嘘つけ。十回じゃすまないだろ」

そう言って新鮮なトマトよろしく座っているので、ぼくもどう応じたらいいかわからず自分の席に戻った。

論理学の授業中にも、担当教員が「ティンレー・スバの特性はサボり魔である」などと言って、うまい例え話になったとでも思ったらしく、体をゆさゆさと揺らしながら笑った。

張仄昂と索沫達をはじめとする七人のメンバーが退学処分を受けたあと、ぼくは詩人のように学内のあちこちをぶらぶらしながら小説をたくさん読んで過ごした。あるとき小説を読んでいて、主人公が女と初めて口づけを

ロラン結成から二年が経ち、授業をサボったり、夜になっても寮に戻らなかったり、酔っ払って会議に出席したりするなど、メンバーの数々の問題行動がつまびらかにされると、大学の教師や学生たちの多くはロランを詩のサークルなどではなく、不良青年の集まった「いかれポンチの巣窟」と決めつけた。各学部でもロランのメンバーを退学処分にはじめた。一か月も経たないうちに七人が放校になり、ロランは大学の風紀を乱す不良団体として公表された。そして学内にはびこるメガネをかけた連中による会議の席上で、ロランを不良団体から優良団体に生まれ変わらせるといふ決議までなされた。

ぼくの学部では教師も学生もみんなティンレー・スバという学生の存在をとうに忘れてしまっていたようだし、ロランという団体が学内でいくら騒ぎを起こしているようが、ぼくの学部では話題にすらなっていないかった。

ある日クラスメートにロランの話題を出してみたけれど、その中の黒い長髪のやつがムーンウォークを面白おかしくやってみせたあと、「ロランってアメリカのバンドだったけ？」と言うので、ぼくは呆れてものも言えなかつ



交わすシーンに浸りきっていたら、急に携帯が鳴った。

メッセージを送ってきたのはツエリンツオだった。「今晩八時にロランの会合があるから講義棟一階に集合。かならず来て」と書かれていた。

ぼくは新生ロランの最初の会合がどんな感じなんだろう、漂白されたロランってどんな感じなんだろうと思いつながら会合に向かった。

新しく任命されたロランの代表は大学院生のように、仲間を三人連れてきていた。要はメガネ四人組だ。そこにぼくとツエリンツオ、髪を青く染めた子、それに舞踏学部の女子学生という退学処分にならなかったロランの初期メンバーの四人が加わった。

サークルの代表が会合を始めた。

「本日から詩人結社ロランは威厳ある道を進むことになる。われわれは新時代の青年として、詩を書くことで社会に奉仕する。これがわれわれの究極の目標だ。われわれロランの目下の目標は、中国の有名な詩の雑誌に詩を掲載することだ」彼は下がり下がる銀縁メガネを元に戻しながら、こんな話ちっとも面白くないと思つてい

るわれわれ四人をちらちら見ていた。

そいつの連れてきたメガネ三人組が拍手をした。でもその後ろにいるわれわれが三人に何の反応も示さず押し黙っているのを見て、連中は少しまり悪くなったようだった。

ここまで話したところで、メガネの一人がぼくたちに詩の雑誌を配った。見ると『花びら』というタイトルの雑誌だった。「学生諸君、三十一ページを見てくれ。今年四月、私の詩がここに掲載された。今後きみたちもこのレベルの詩を書けるようになれば、こういう有名な雑誌にきみたちの詩も掲載されるぞ」この新しいサークルの代表の発言を受けて、ぼくもその雑誌の三十一ページを見た。ページの半分は自分の紹介で埋められていた。そこには、九〇后<sup>ジュウニョウカウ</sup>を代表する詩人で「北京作家協会会員」などと御託が並べられていた。ぼくはそいつの

「追憶」というタイトルの短い詩を読んでみたところ、「花」と「涙」と「悲しみ」という三つの主な名詞からなる詩だった。まるで少女の恋文みたいなこの詩を目の前にいる大の大人がいったいどうして書こうと思つたん

だろうと思いつながら、そいつの次の言葉を待った。

そいつは自分で書いたこの詩を涙まじりに朗々と詠じたあと、ぼくを指さして「これは私の代表作だ。きみも見習うといい」と言った。

ぼくはその雑誌を机の上に放り投げると、立ち上がった。「あなたのこの詩はクソよりちよつとまじってどこだな」と賞賛してやった。そいつは顔面蒼白になつてしぼし茫然とぼくを見つめていた。

「おい、気でも触れたか」そいつが面食らった様子で言ったとき、ぼくは配られた四冊の雑誌をびりびりとちぎり、故郷でお祈りのときに撒くツアンパのように、空中に放った。教室じゅうに紙吹雪がひらひらと舞った。

「ロラン死す、だ」ぼくは三人の仲間にごう告げて教室を出た。ぼくを追いかけてきたツエリンツオがなだめて引き止めようとしたけれども、ぼくはそのとき、優良団体となり名ばかりとなったロランとは永遠におさらばしたのだった。

夜、寮に戻る道すがら、ぼくは「あの白いロランは結

局どうなったの」と訊くと、彼女は「白いロランも死んだ」と言った。ぼくはそれを聞いて何の感慨もなかった。彼女は「黒いロランが一年前に死んだみたいに、白いロランも昨日死んだの」と続けた。

一年前、ぼくがロランを脱退したあと、青い髪の男子部員と舞踏学部の女子部員も脱退したという。それを知らせてくれたのはツエリンツオではなく、青い髪の男子だった。

ロランを脱退して一年の間、ぼくらは学内で何度か遭遇した。そのたびにやつは「昔はよかったよな」と言うのだった。それからロランを脱退したあとの生活についてぼくに話すと、そそくさと別れた。数日前もぼくたちは学内ですれ違った。やつは青かった髪を黒髪に染めなおしていたけれども「昔はよかったよな」というあいさつはいつも通りだった。

大学の門をくぐったとき、ぼくはツエリンツオに「きみはどうしてロランを脱退しなかったの」と尋ねた。彼女はぼくの前を歩いていいたから、後ろから投げかけた質問のようになった。

彼女は振り向いて、後ろ向きに歩きながら、ゆっくりとかばんからたばこを一本取り出して火をつけた。一服吸い込むと、「二年の間、あたしは一人、白いロランの中で黒いロランの思い出を探してたの。骨折り損だったけどね」と言いながら、白い煙をふうっと吐き出した。言葉もたばこも無常を見せつけるかのように夜の空気に吸い込まれていった。彼女の手は細かく震えており、たばこの灰がひっきりなしに落ちていた。

青い髪の男子とツェリンツォがぼくに話してくれた言葉は、ぼくを酒とともにあったあの頃に引き戻した。酒を飲むと徐々に酔いが回ってくるように、ツェリンツォの体から漂ってくるたばこの強い香りに当てられているうち、尽きせぬ悲しみに包まれて、ぼくの赤い心臓が喉から飛び出してきそうになった。

ツェリンツォは吸いさしのたばこを道端のゴミ箱に放り込んで「最近小説を書いているんだってね。本当なの？」と訊くので、ぼくは肯定のしるしにうなずいた。すると彼女は「じゃあ、あたしたち二人の関係を小説に書いてよ」と言った。彼女はぼくの性格をよく知っていて、ぼ

くが二人の関係を小説に書くはずがないことはわかっているようだった。そして彼女はぼくの返事も待たずに足早に立ち去った。ゴミが燃える焦げくさいにおいが、ぼくを後ろから追いかけてきた。

ツェリンツォはすたすたと女子寮に戻っていった。ぼくは茫然と立ちつくし、彼女の背中を見つめていた。もし彼女が振り向いたら、ぼくはきっと駆け寄っていった彼女にすがりつき、おいおいと声を上げて泣いてしまいうだろうと思った。でも彼女は振り返ることもなく、女子寮の中に消えていった。ぼくはこれが一番ふさわしい別れ方であるような気がして、男子寮に向かった。

もうすぐ四時になるうとしているが、ぼくの部屋のあつ五号棟の扉はしっかり閉まっていて、どんなに叩いても返事がない。それでぼくは扉に寄りかかって寝た。目に見えない無数の虫に首を食われ、かゆくてたまらなかった。その瞬間、詩を書きたいという気持ちが高まり、小さな一節を口ずさんだ。

「小さき虫どもよ、詩人の血を吸った者は、来世は人間に生まれ変わり、町で物乞いをする運命さだめとなるだろう」

#### レコー

一九九三年、中国チベット自治区チャムド市マルカム県の半農半牧村に生まれる。中央民族大学在学中の二〇一二年から創作を開始し、二〇一五年から『民族文学』『チベット文芸』など文芸誌に作品を掲載している他、チベットの文学系サイトの草分けである灯明文芸ネットにも多数の作品を提供している。二〇一八年には作品集『ロラン』を出版。自作を自ら漢語に翻訳し、『西藏文学』に掲載している。レコーは「ゼロ」を意味するペンネームである。本作品は中央民族大学在学中の二〇一六年に執筆した初期の代表作である。作中の主人公は作家の本名を使っている。邦訳には『チベット幻想奇譚』（春陽堂書店）所収の「子猫の足跡」がある。

暗闇の中で首を掻きながら空を見上げると、夜が明けかかっていた。星は出ていないけれども、空は明るい光を発している。その光の中、ぼくの吟じた詩に見向きもしない虫たちが、ふらふらと飛び交っているのが目に映った。

#### 訳注

- (1) 中国のIT企業が開発したメッセージアプリ。WeChatとよぶ。  
 (2) 中国を代表するロック歌手、崔健の代表曲「一無所有」(邦題：俺には何もない)の歌詞「我一無所有」のこと。  
 (3) 一九九〇年代生まれを指す。

※本作品は二〇一六年八月にチベット文芸ネットに掲載された Ro langgs (<https://www.tibetcm.com/contemporary/nov-el/2016-08-05/8152.html>) の全訳である。作家の自己翻訳による漢語版の草稿「起死詩社」も適宜参照した。作中登場人物の氏名の漢字表記はこれに基づく。

## しかばねの物語

カワ・ラモ  
海老原志穂 訳

逃げられては、また追いかける  
王子デチュー・サンボは  
なんども口をすべらせ  
因果をくりかえすそそっかしさ

冷たい墓場を陽光の里とよび  
手をのばしてつかんだ三本の羽根を  
なんでも入る革袋の翼と言いはり  
やせがまんして王子は笑う

冗談好きのしかばねは  
なんども王子の目をかいくぐる  
したたる汗でつながれた長いお話は  
時をこえて人の世をめぐりゆく  
人の世をめぐりゆく



## 黒テントの一日

ジュ・カザン  
海老原志穂 訳

草原はいくども装いをかえ  
村や集落で語られてきた修行者らの  
奇跡の物語にも  
だんだんと黄金色のちりがふりつもる  
おばあさんの手ににぎられたマニ車は  
刻々とすぎゆく草原の時のように  
はやすぎもおそぎもせず  
まわりつづける

話題はゲレクとホワモから  
たくさんの年月とともに  
ホワゴンとドベにうつった  
家族のたわいないおしゃべりは  
陽光を追うようにテントの内壁をのぼっていく  
しばらくさびついていたおとぎ話たちは

おじいさんのあごひげのすきまから立ちあがり  
小さなバターランプの上をかけまわる  
徐々にふかまる静けさの中  
ふっとおとずれる退屈は  
雪とともにテントロープをつたい  
地面にだけ散る  
一日を終えた家の主の胸にうかぶのは  
今日トンドウプツオに着せてやった衣装の裾には  
あの子の姉さんに着せた花嫁衣装よりも  
指二本分は大きなカワウソ皮をあててやれた、という思  
い  
疲れ果てた牧童の長いいびきが  
たえることもなくいつまでも響いてくる

アムド地方テムチェン（青海省海西モンゴル族自治州天峻県）に生まれる。幼少期からチベット語の文芸誌を愛読。創作活動を始めたのは大学卒業後二、三年経ってから。これまでに詩や散文が『カングン・メト』、『ダンチャル』など様々な文芸誌に掲載される。詩には恋愛・失恋・結婚など女性のライフイベントに関するもの、女性の美しさを讃美したもの、チベット文化への愛情をテーマにしたものが多い。平易な表現と繰り返しを多用したリズムミカルな文体が特徴。詩集に『雪の耳飾り』（二〇一四）。二〇一五年、カングン・メト文学賞受賞。現在は中学校の教師としてチベット語を教える傍ら、詩の創作にいそしんでいる。本作品は『雪の耳飾り』に掲載されたチベット語詩 Rosprung の邦訳である。

ジュ・カザン

一九六〇年、アムド地方ゴロク（青海省ゴロク・チベット族自治州）生まれ。現代のチベットを代表する詩人のひとり。チベット語の教科書に掲載された詩も多い。詩集に『雪山のふもとでの想い』（二〇〇一）、『雪国の風』（二〇〇九）がある。本作品は一九八五年四月八日に書かれたチベット語詩 Shra nang gi nyin zhag（『雪国の風』所収）の邦訳である。

## ペマ・ツェテンさんを悼む

星泉

チベット映画界を牽引するリーダーとして国際舞台で活躍する映画監督であり、小説家、翻訳家でもあったペマ・ツェテンさんが、二〇二三年五月、映画撮影中に倒れ、帰らぬ人となりました。まだ五十三歳という若さでした。大切な友人だったペマさんの突然の訃報に接し、動揺のあまりしばらく何も手につかず、ただひたすら作家や映画人たちがSNSに投稿する追悼の詩や文章を読みながら過ごしていました。ペマさんと親しかった作家の追悼文には、小説の執筆にもっと時間を割きたいけれども映画のプロジェクトが激務でどうにもならないとこぼすペマさんの姿が描かれています。近年は後進の育成にも力を注いでいたので、時間はいくらあっても足りなかったことでしょう。

ペマさんと私たちチベット文学研究会との出会いは二〇一一年に遡ります。東京フィルムメックス国際映画祭のために来日したペマさんと親しくなり、そのとき作品集をいただいたことがきっかけで、二年後には初めての邦訳作品集『ティメー・クンデンを探して』を勉強出版から出版することができました。刊行に合わせてペマさんをお招きし、東京や京都で映画祭やトークイベントを開催するなど、ともに過ごした日々は忘れ難い思い出です。そのとき制作した『セルニャ』創刊号は、彼の作品の魅力を伝えたい一心で作ったもので、『セルニャ』の生みの親はペマさんだといっても過言ではありません。年々忙しくなっていたペマさんと会う機会は減る一方でしたが、活躍の様子をネットで見るが増え、そのたびに誇

## 解説

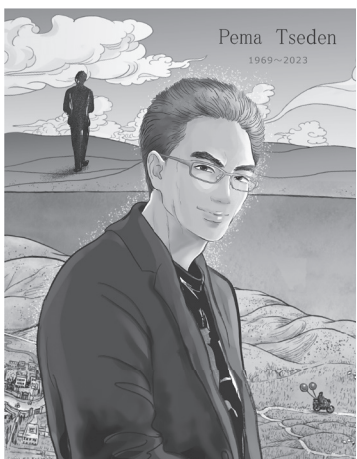
一つ目の詩「しかばねの物語」では、一九七〇年代生まれの作者によって、子供の頃から親しんできた、同物語の構造的な面白さが語られている。デチュー・サンボが王子であるという設定は、口承の「しかばねの物語」にもとづいているそうである。詩の中では、デチュー・サンボが口をすべらせてはしかばねに逃げられ、何度もふりだしに戻るさまを、「因果をくりかえす」と表現している。物語の中でくりかえされるこの因果のループが、物語そのものがくりかえし語られ人の世をめぐっていくというより大きなループへと連なっていくのもこの詩の深みとなっている。

声で語られる物語が人々に親しまれてきたチベットであったが、文化大革命の荒波の中、それらを自由に語ることはかなわなくなった。しかし、毛沢東の死とともに、十年間続いたその時代も終わりをつげた。翌年の一九七八年には鄧小平により改革開放政策がうちだされ、経済的、そして、文化的な豊かさが国中に広がっていった。二つ目の詩「黒テントの一日」が描くのは、改革開放後のゆるやかな空気感にひたるチベットの人々の姿だ。ヤクの毛で織った黒い色のテントに暮らすチベット牧畜民たちのものにもラジオの音は届いていたようだ。七〇年代後半、ラジオ局のアナウンサーとして人気のあったゲレクやホワモのニュース番組を楽しんでいた人々の関心は、数年後の八〇年代初頭には、ホワゴンやドベなど弾き語り歌手の音楽といった娯楽に移り変わっていったことが本詩からもわかる。しばらく語られることのなかった口承の物語も老人たちの口から飛び出し、みなを楽しませていたにちがいない。そのお話の中には、きっと「しかばねの物語」もふくまれていたことだろう。

らしく思っていた私たちでした。

『しかばねの物語』が子どもの頃から大好きだったペマさんは、好きが高じて自らの手で漢語に翻訳し、画家の吾要さんとともにアート作品のような美しい本を出版しています。さらにはユニークな翻案小説「屍鬼物語・銃」（『チベット幻想奇譚』所収）まで手がけています。日本語版の『しかばねの物語』が完成したら、しばらくぶりにペマさんを訪ね、お届けするつもりでした。ペマさんも敬愛していた蔵西さんの美しい挿絵入りの本を見てほしかった……。それがかなわないことが残念でなりません。

ペマさん、あなたと出会っていなかったら、私たちがこれほどの勢いでチベット文学の翻訳や映画の紹介を進めることはなかったでしょう。あなたの穏やかで温かい叱咤激励に心から感謝しています。またいつの日か、どこかで、生まれ変わったあなたと会えますように。



蔵西画



## 執筆者プロフィール

**岩田啓介** いわた・けいすけ 筑波大学人文社会系助教。博士（文学）。著書に『清朝支配の形成とチベット』（汲古書院）がある。セルニャ編集部。

**ウジャ・パクパジャブ** 一九八四年、チベットのアムド地方バルゾン（青海省海南チベット族自治州同徳県）に生まれる。青海民族大学芸術学院にてチベット伝統美術を、西藏大学芸術学院にてチベット伝統彫塑を、日本工学院、および、「アート・アニメーションのちいさな学校」にてアニメーションを学ぶ。美術教育、映画美術、グラフィック、デザイン、アニメーションの分野に従事。

**海老原志穂** えびはら・しほ 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所フェロー。博士（文学）。著書に『アムド・チベット語文法』（ひつじ書房）。訳書に『チベット女性詩集：現代チベットを代表する7人・27選』（段々社）、『ダライ・ラマ六世恋愛詩集』（共編訳、岩波書店）など。セルニャ副編集長。

**大川謙作** おおかわ・けんさく 日本大学文理学部教授。博士（学術）。訳書に『マ・ツェテン』『テイメー・クンデンを探して』（共編訳、勉誠出版）、『風船』（春陽堂書店）など。セルニャ編集部。

**小野田俊蔵** おのだ・しゅんぞう 佛教大学名誉教授。博

**松尾みゆき** まつお・みゆき 日本でテレビドキュメンタリーの仕事をしたのち、中国青海省（アムド・チベット）で日本語教育に従事。その後、ソントアルジャ監督作品「草原の河」などの日本語字幕を担当。ドキュメンタリーの制作も行っている。アート・アニメーションのちいさな学校でアニメーション制作を学んだ。

**三浦順子** みうら・じゅんこ チベット関連の通訳および翻訳家。お化け愛好家。訳書にリンチェン・ドルマ・タリン『チベットの娘』（中央公論新社）、イエシエー・ドゥンデン『チベット医学』（地湧社）、『ダライ・ラマ宗教を語る』（春秋社）など。セルニャ編集部。

**ルチュ・パクパジャブ** 一九九六年、アムド地方ルチュ（甘肅省甘南チベット族自治州碌曲県）出身。ラブラン・タキシル僧院で伝統的な仏画であるタンカを、西安美術大学で西洋絵画を学び、二〇一六年に来日。アート・アニメーションのちいさな学校」に参加、故大橋学の薫陶を受ける。『ヤクになった神さま』（共作・二〇一九）、『My Sister』（二〇二〇）製作。『らしのし』（二〇二〇）背景美術担当。二〇二二年に個展「新しと町」開催。

士（文学）。学位はチベット僧院での基礎教育課程の研究で得たが、その後チベット絵画史や絵画技法にも興味を持ち研究する。著書に『Monastic Debate in Tibet』（サイーン大学チベット学仏教学研究所）、訳書に『チベット絵画の歴史』（共訳、平河出版）など。

**蔵西くらし** 漫画家、イラストレーター。チベットの少年僧を描いた『月と金のシャングリラ』（イースト・プレス）が第24回文化庁メディア芸術祭マンガ部門審査委員会推薦作品となる。他の作品に『流転のテルマ』（講談社）、『ベルシャの幻術師』（原作・司馬遼太郎 文藝春秋）など。またチベット関連書籍の挿絵や装画を多く手がけている。

**鈴木博之** すずき・ひろゆき 京都大学国際高等教育院非常勤講師。博士（文学）。著書に『東方藏区諸語言研究』（四川民族出版社）など。共著書に『The Tibetan languages: An introduction to the family of languages derived from Old Tibetan』（LACITO Publications）など。

**星泉** 一ほし・いずみ 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授。博士（文学）。訳書に『チベット幻想奇譚』（共編訳、春陽堂書店）ツェワン・イシエ・ペンバ『白い鶴よ、翼を貸しておくれ』、ラシヤムジャ『路上の陽光』（いずれも書肆侃侃房）、『チベットのむかしばなし』しかばねの物語』（のら書店）など。セルニャ編集長。



## 編集後記

ある朝、新聞をめくる手が止まった。星泉先生が幼い頃にチベットの民話を聞いて育ったというインタビュー記事だった。西洋の昔話は知っているが、チベットの昔話は全く想像もつかない。どんな世界が広がっているんだろう？そこから「しかばねの物語」への冒険が始まった。星先生からどんな話を聞いて、その都度、不思議で奥深い世界に目をみはった。そもそも構造が大変面白いが、それだけではない。仏教の世界観で物語が進んで行くのかと思いきや、竜王など民間信仰的な存在や摩訶不思議な魔女（ふおーっと音を立ててやってくる!?）まで出てくる。細かい表現も面白い。「木馬」という渾名もひどいけど、湖に映った姿が「そのへんの番犬」みたいだとか。結構辛口である。口承で伝わってきた民話ならではのおおらかさと、民の知恵と希望を感じる物語だった。

さらにその後、蔵西さんをはじめ、チベットに関心を持って活動されている皆様を知り、情熱をたっぷりと感じた。今回、子どもの本として『チベットのむかしばなし しかばねの物語』を出版させていただいたのだが、未来を生きる子どもたちに、チベットの昔話の面白さとともに、愛と情熱を持って大切なことに取り組み素敵なおとなの人たちがいることを感じてほしいと願っている。

のら書店・編集部 佐藤友紀子

チベット文学と  
映画制作の現在

བཤའ་བྲུ་  
SERNYA

チベット文学と映画制作の現在

SERNYA 別冊

『チベットのむかしばなし しかばねの物語』特集

2023年11月1日 発行

[編集] SERNYA 編集部 / チベット文学研究会

星泉 (編集長) 海老原志穂 (副編集長)

岩田啓介 大川謙作 三浦順子

[表紙絵・挿画] 蔵西 (『チベットのむかしばなし しかばねの物語』より)

[ロゴデザイン・奥付フォーマット] 草本舎

[編集協力・ブックデザイン] 佐藤友紀子 (のら書店)

『SERNYA』バックナンバーの入手方法については下記ウェブサイトをご覧ください。

<https://sernya.aa-ken.jp>

[発行] 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1

電話 042-330-5600 FAX 042-330-5610 <http://www.aa.tufs.ac.jp/>

ISBN: 978-4-86337-406-5

© Individual contributors, 2023, Printed in Japan

※写真はとくに断りのない限り各記事の著書の撮影または提供による



<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>

この冊子はクリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンスの下に提供されています。





東京外国語大学  
アジア・アフリカ  
言語文化研究所

འབྲུག་ལྗང་གི་ལཱ་ལྷན་ཁང་།



チベット文学研究会